

# 筑後北部地区遺跡群 II

福岡県筑後市大字熊野・藏敷所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第70集

2006

筑後市教育委員会

ちくごほくぶちくいせきぐん  
筑後北部地区遺跡群II

筑後市熊野・藏数所在遺跡の埋蔵文化財調査

くまのはせまち  
熊野伊町遺跡

くらかずしまのまち  
藏数島ノ本遺跡

くらかずほこじ  
藏数保古手遺跡

くらかずさぶろうまる  
藏数三郎丸遺跡

くらかすながいせき  
藏数長畠町遺跡

2006

筑後市教育委員会

## 序

筑紫平野を彩る当市一帯では現在までに数多くの歴史的産物が生み出され、福岡県南部を代表する歴史的・文化的地域として発展しております。

今回報告する筑後北部地区遺跡群は平成16年度から継続して行われております「県営ほ場整備事業筑後北部地区」に伴う緊急の埋蔵文化財発掘調査の記録です。この大規模な農地の整備により、土の中に眠っていた先人たちの足跡が消滅する危機を回避するため、更には地域の歴史・文化財を記録に残し、後世に伝え残すために発掘調査を行いました。

調査された遺跡からは様々な時代の暮らしが復元され、当市一帯の歴史像を解明する資料が蓄積される事となりました。

本書を消滅する遺跡の名残りとして捉えるのではなく、未来を想像できる一つの学術的資料、若しくは地域を考えるための生涯学習の一資料として活用していくかなければなりません。

調査に際しましては、各工事関係者、各関係機関には多大なるご協力とご支援をいただきましたことに心から感謝申し上げます。

平成18年3月

筑後市教育委員会  
教育長 城戸一男

## 例言

1.本書は平成17年度に行った県営は場整備事業（山い手育成型）筑後北部地区事業の実施に伴った埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2.発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収録、保管している。整理調査及び整理作業の関係者は第1章に記している。

3.本書に使用した図面の遺構圖は小林勇作、上村英士、阿比留士朗が作成し、遺物の実測、浮遊は横井理恵、佐々木寿代、仲文恵、丸山裕子が行った。遺跡の全体図に関しての航空測量はアジア航測株式会社に委託した。

4.本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は別記する各調査現場担当者が行った。

5.今回の調査に用いた測量座標は国土測量法第11版標系(日本測地系2000)を基準としている。

6.本書に使用した遺構の表示は以下の略号による（筑後市にて「おき歴史文化財の取り扱いについて：2002年に準拠している）。

SD・溝 SK・土壤 SP・ビット SX・不明遺跡・流路・河川・溜まり状遺構

また、本文中の出土遺物について○×○の表記は両方の可能性が考えられるという意味である。

7.本書の執筆はIII.調査成果を各調査担当者が行い、(目次に記している)、I. II. IVと総集は上村が行なった。

## 目次

I. 調査経過と組織	1
II. 位置と環境	2
III. 調査成果	5
熊野町遺跡 (小林勇作)	5
鹿島島ノ本遺跡 (阿比留士朗)	17
鹿島島古手遺跡第2次調査 (A区) (上村英士)	23
鹿島島古手遺跡第2次調査 (B区) (小林勇作)	39
鹿島島古手遺跡第2次調査 (C区) (阿比留士朗)	51
越数三郎丸遺跡 (小林勇作)	61
越数長波町遺跡 (A区) (小林勇作)	64
越数長波町遺跡 (B区) (阿比留士朗)	68
IV. 考察	75
V. 写真圖版	

## I. 調査経過と組織

筑後北部地区巡回群は筑後市大字佛野・歳数に所在する。この地域は平成15年度より県営は馬鹿船事業による大規模な農地の改良工事を行っている。

平成16年10月4日に原因者である福岡県筑後川木系農地開発事務所より当該地について試験・確認調査依頼が筑後川教育委員会に提出され、担当課である社会教育課文化スポーツ係による現地での試験調査を平成6年10月25日から11月9日まで実施した。試験調査の結果、沿岸で遺構が確認され、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。計画地における各水路新設予定地の8ヶ所については遺構が破壊を受けるため本調査を実施しなければならない旨を伝え、平成17年4月13日に「県営は馬鹿船事業执行手帳」を筑後川地区に係る埋蔵文化財調査として協定を締結し、埋蔵文化財沿岸調査を行なうことになった。調査費用については費用統算にて80%を福岡県筑後川木系農地開発事務所が負担し、20%を国、県、市、町元で負担している。平成17年4月8日から平成17年10月31日まで現地での本調査を行い、整備報告書作成作業を平成18年3月20日に完了した。

### 1) 平成16年度（事前審査等）

#### 總括

教育長	城戸 一男
教育部長	高原 健
社会教育課長	田中 隆一
文化スポーツ係長	成瀬 平和
文化スポーツ係 (文化財担当職員)	永見 秀穂 小林 勇作（事前審査）
上村 美士 岡比留士朗 立石 真二	上村 美士 岡比留士朗 立石 真二

### 1) 平成17年度（調査・報告書作成）

総括	城戸 一男
教育長	城戸 一男
教育部長	高原 健
社会教育課長	田中 隆一
文化スポーツ係長	角 恵子
文化スポーツ係 (文化財担当職員)	永見 秀穂 小林 勇作（調査担当） 上村 美士（調査担当） 岡比留士朗（調査担当）

### 3) 発掘調査参加者

石橋香代美	井上むつ子	今山美咲子	柳田勝子	内野康晴	江崎トシ子	加藤礼子
河添幸子	古賀明美	下川義文	城崎マスヨ	角里子	田島好江	田島ヤス子
辻勝	宮坂英子	中村富男	中村三男	馬場千鶴子	馬場浩	原清隆
嵩川香代子	渡辺泰子	愛川一枝	三輪美樹子	藤田泰代	近藤一郎	斎藤和代

### 4) 整理作業参加者

整理作業員	仲 文恵	柳井 理穂	佐々木 有代
整理作業員	野口 啓輔	山口 槙見子	

調査及び整理作業に際しては次の方々にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。

（順不同、敬称略）  
木本雅謙（長崎外国语短期大学）、山村信義（太宰府市教育委員会）、小鹿野亮（筑紫野市教育委員会）、  
立石真二（篠崎町教育委員会）

## II. 位置と環境

### ・地理的環境

筑波市は福島県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が横断し、国道442号から横断する。また、市南西側には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花涼川、北部には貞日川が東西流れる。市北部には耳納山地から派生する八久丘陵が東西に延び、滝森川の源頭部が点在する。低位置盆地である東部や、盆地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶園、東部では米麦を中心の田園地帯が広がる。市街地は開道に沿って市を中心部に形成されている。

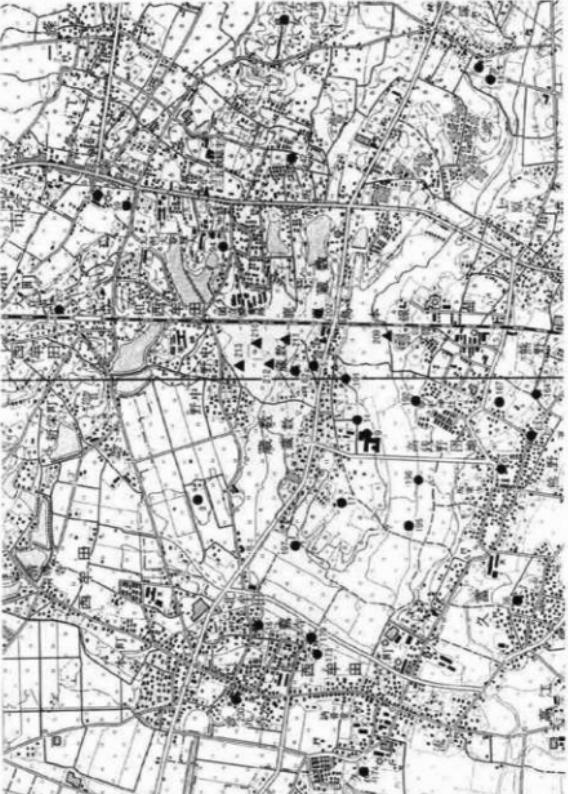


Fig.1 周辺道路分布図 (1/50000)

- 1. 行山山頂
- 4. 2丁寺古墳
- 5. 紫雲山房跡跡第1次
- 8. 田代墓群
- 9. 紫雲山房跡跡第2次
- 11. 久喜山頂
- 14. 紫雲山房跡跡第3次
- 16. 四谷山房跡跡第2次
- 17. 遠野山口遺跡
- 18. 遠野山口遺跡
- 26. 久喜山房跡跡
- 42. 紫雲山房跡跡
- 53. 花川山房跡跡第2次
- 61. 佐野御前遺跡
- 62. 紫雲山房跡跡第4次
- 63. 伊野根遺跡第2次
- 64. 紫雲山房跡跡
- 65. 紫雲山房跡跡
- 66. 紫雲山房跡跡
- 67. 新山山頂跡跡
- 173. 西行田小次郎遺跡
- 174. 西行田土原手遺跡
- 178. 西行田日高寺遺跡
- 191. 遠野水町遺跡
- 192. 遠野松ノ下遺跡
- 195. 遠野石坂田遺跡
- 196. 遠野宮ノ松遺跡
- 197. 紫雲山房跡跡山遺跡
- 200. 西行田元今遺跡
- 202. 紫雲山房跡跡第1次
- 207. 西行田鎧塚遺跡
- 209. 佐野御前遺跡
- 210. 紫雲山房跡跡
- 211. 紫雲山房跡跡第2次
- 212. 紫雲山房跡跡
- 213. 紫雲山房跡跡第3次
- 牛番村は当市の免賦課所帯

## ・ 磐数地区の歴史的環境

磐数地区には旧石器時代から現代まで様々な文化財が残されており歴史的環境について時代を追って概観する。

磐数字版口では後期旧石器時代とみえられる角椎状石器が出土している。伊万里市御岳山系の黒磯石を使用した横丸ぎの剥片を素材とする断面三角形の未製品である。市内ではこの石器の他に大字鶴田地区で4点の旧石器遺物が出土しているが、明確な旧石器時代包含層からの出土ではない。しかしながら、遺物の存在は市内の旧石器時代を物語る資料として貴重である。

縄文時代になると熊野・磐数地区の遺跡からは陶器・植物の標示例が既どない。市内部の大字常川地区や大字志他区などでは中期の集石遺構や遺物を繋めつけて出土する跡跡<sup>1)</sup>が、磐数地区では成教森ノ木遺跡で溶し穴状遺構が3基発見されている。

弥生時代になると、熊野・磐数地区一帯の八女丘陵部に大集落が形成される。現在までに明瞭な両側の遺構は確認されていないが、中期弥生になると曾日川北側の丘陵部に使用する鍛錬炉・木遺跡からも子持丸玉を出土しており、大集落の発展過程が窺えできる。当地区から北西約1kmに田原遺跡もあり、弥生時代から古墳時代にかけての集落が検出されている。

熊野・磐数地区と大字西田地区の字界である大字西田字松原に5世紀中頃と考えられる瑞宝寺古墳が遺跡さ<sup>2)</sup>。坂安丘陵にに残ると想われる八女丘陵群の中で東の石入山古墳と西の久留米市三瀬町十道寺古墳の間に位置しておおり、現在は消滅して面影がないが、磐穴系横口式石室をもつ直徑約26mの円墳である。主な遺物は珠文鏡、骨・鏡などの鉢型器具、形象埴輪、須恵器、有孔円鏡、白玉などがある。

当市では古代西海道が南北に縱断することが解っており、大字崩津・山ノ井・鶴田地区などでは道路遺構が検出されている。磐数地区では国道209号とほぼ同じラインで推定されているが、現在までに道路遺構は検出されておらず、奈良時代から平安時代にかけての集落についても検出されていない。西海道を循環とするならば、磐数地区は三瀬町と下妻町の莊原に近い下妻町に存在する。

中世になると磐数地区は上妻郡広川庄として坂東寺御野神社による支配となる。鎌倉初期の広川庄名羽林橋では4.3町と広川庄最大の面積を誇っていたようである。また、永和4年(1137年)に勅願院光願院の崇福院・大德寺諸庵延長の東林西堂和尚に広川庄員名田地付田・畠地田段・園地在恭園百枚一人を永代寄進しており、椿山耕言(はるしむね)は宮人物の磐数地区に田苗若葉を育んでいたとされている。光明院では坂東寺北側の佛所宮ノ後遺跡、熊野五反田遺跡から当該前の貿易施設器や生活雑器を中心にも多數出土しており、坂東寺延長院の采替を彷彿とさせる。室町時代には広川庄と水田庄との境界争いなどを起こし、戦闘での辻の崩壊へと続いていく。

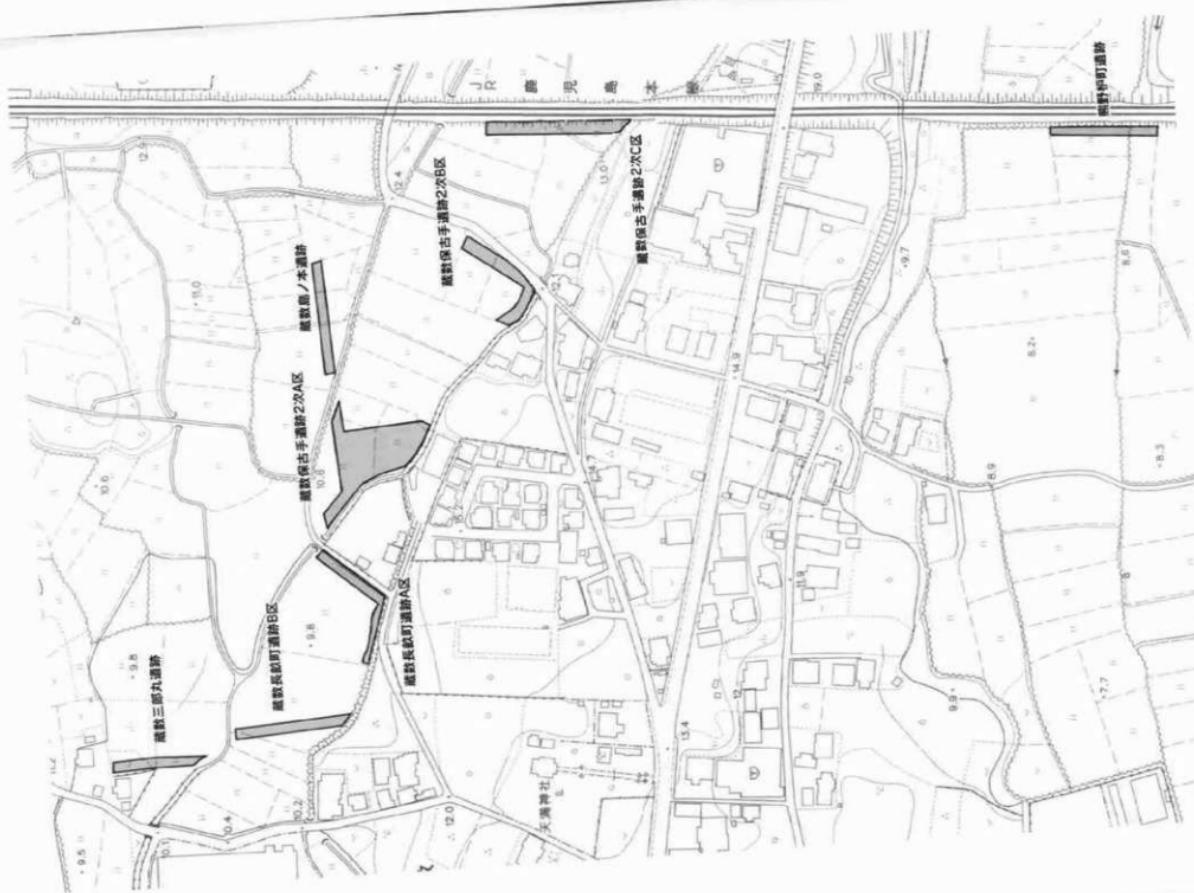
近世になると、田中吉政が筑後国領主となり、先に述べた坂東寺の再興や土木工事を行い、農地開発に尽力したとされる。田中家絶嗣後、当市は久留米藩城として有馬氏による統治となる。有馬氏により赤坂城や坂東寺城が起こった。また、当地区では漁港用溜池の造成が盛んに行われ、田中開発に随ても17世紀半ば、整備されていたと考えられている。近世の当市での差別調査事例は多く、その中でも水利開発(湖や水路など)の遅れが多々多く残る地域である。

### 【参考文献】

[1] 佐山史 萩尾市史編纂委員会・編 1985

[2] 佐山史 萩尾市史編纂委員会・編 1990

[3] 美術化記念大正函書「1」 萩尾市文化財保護委員会編 2005



E19-2 调查地点位置图 (1/2500)

## 1. 猪野町遺跡第1次調査

### (1) はじめに

当遺跡は八久丘陵南端部にあたる標高8～9m位の低地丘陵地。したがって大字猪野字和田3510-1、408-1-3F住する。筑後北部地区は宮崎県筑後郡宮崎市（現い・手背成城）筑後北部地区的平成17年度工事による発掘調査である。新設される水路によって破壊を受けるが3208mを調査対象範囲として発掘調査を実施した。調査区はJR鹿児島本線（西側）に沿って南北に細長く、途中、東西方向に走る水路によって南北は分離される。このが、便宜上、南部をA区、北部をB区と称した。

発掘調査は小林勇作が担当し、平成17年4月18日から同年6月1日の計12ヶ月間実施した。この間、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構剥離・実測作業・写真撮影を現場で行い、整理作業から報告書作成までの作業は文化財監修室で順序的に行なった。なお、重機による表土剥ぎは（有）福島重機へ、航空測量業務はアジア航測（株）へ委託した。調査の結果、溝等の遺構が確認され、陶片・土器・瓦器・打削器・瓦器・陶磁器・石器等の出土遺物を得ることができた。以下は、発掘調査で確認された主要な遺構と遺物について報告する。

### (2) 掘出遺構

#### A区

##### 溝

#### 1SD04 (Fig.3)

A区の北端で検出した南北方向の溝である。北部は現代の東西水路によって破壊されており、南方へ2.45m分を検出したところで終息する。幅0.60～0.90m、深さ0.13mを測り、堆土は黒褐色砂質土を基調とする。堆積土が、は上削器（片）を僅かに認めた。B区南端で検出された1SD07に接続する可能性が考えられる。

#### 土坑

#### 1SK05 (Fig.3)

A区北端1SD04の西側で検出した。平面プランは倒円形状を呈し、道朝西側は現代の觀亂を受ける。長軸1.03m、短軸0.83m、深さ0.27mを測り、堆土は黒褐色土を基調とする。上削器（片）が僅かに出土した。

#### 浦まり状遺構

#### 1SX01 (Fig.3)

A区南端に位置した遺構であり、調査区外へ展開するためには全体プランは確認できていない。遺構は部において東側は浅く、西側は深くなっている。東側の深さは最大0.17m、西側の深さは最大0.30mを測る。西側北半部にテラスを認め、底盤はやや凹凸面を残す。堆土は黒褐色砂や黒褐色砂質土等が出土した。自然堆積を呈し、遺物は弥生土器（壺）、土削器（杯・甕・片）、瓦器（陶）、白磁（皿）等が出土した。

#### 1SX02 (Fig.3・Tab.2)

1SX01の北端に隣接した遺構であり、東部は調査区外へ展開する。遺構内部は南端から北端にかけて一段深くなってしまっており、深さは0.15～0.36mを測る。黒褐色砂や黒褐色砂質土等が自然に堆積する。出土遺物は皆無であった。

#### 1SX03 (Fig.3)

1SX01の北端に隣接した遺構であり、幅2.05m、深さ0.19mを測る。黒褐色砂や黒褐色砂質土等が混入した堆土が自然に堆積し、1SX01と同様の堆土を呈することから同一遺構である可能性が考えられる。なお、出土遺物は皆無であった。

## B区

### 溝

#### 1SD07 (Fig.4・Tab.2)

B区南端で検出した東西方向の溝であり、1SX14を切る。途中は南方へ分岐し、A区で検出された1SD04へと接続するものと思われる。東西溝は幅1.80m、深さ0.28m、南北溝は幅0.63m、深さ0.05mを測る。埋土は南方からの流入土が見られ、僅かながら砂層が発達しており、流水があつたものと思われる。遺物は弥生土器（片）、土師器（片）が僅かに出土した。

#### 1SD09 (Fig.4・Tab.3)

B区南部で検出した東西方向の溝である。溝の北岸にテラスを認め、断面形は逆台形状を呈する。幅1.55～3.08m、深さ0.44mを測る。埋土は砂層が厚く堆積し、かなりの流水があつたものと思われる。出土遺物はない。

#### 1SD10 (Fig.4・Tab.3)

B区南部に位置し、1SD09の北部で検出した。東西方向の溝で幅1.05～1.30mを測る。溝底部はピット状の窪みが著しく、深さは最大で0.28mを測る。埋土は砂層が厚く堆積しており、埋土中から土師器（高环）が出土している。

#### 1SD11 (Fig.4・Tab.4)

B区中央部で検出した。平面状では多岐に分離しており、南部に位置する1SD10との切り合いは不明である。遺構内の状況から概ね東西方向に走るものと思われるが、底部はピット状或いは土坑状の凹凸、窪みが特に目立った状態で確認された。土層観察では複雑に砂層が混入し、発達していることからかなりの流水によって埋没したものと考えられる。埋土中からは土師器（片・小皿・环）が認められた。

#### 1SD12 (Fig.5・Tab.5)

B区北部で検出した遺構であり、南部の1SD13及び北部の1SD15を切る。遺構内は東側を中心に摺鉢状を呈し、埋土の上半部は黒茶色粘土、下半部は砂層が厚く堆積した状態であった。当溝と重複するかのように現代の水路が東西方向に設置されており、調査中はここから流れ込んでくる流水に悩まされた。流水を遮断するためのコンクリート製堤防が部分的に設置されており、現在もなお激しい流水があることを物語っている。この状況より以前からも水が集まる場所であったことが考えられ、この東方からの流水によって当遺構内西部は大きく抉られた状態になったと推測される。出土遺物は須恵器（鉢・片）、青磁（碗）が認められた。

#### 1SD13 (Fig.5・Tab.5・6)

B区北部で検出した東西溝であり、先述した1SD12に切られる。溝の断面形は概ねU字状を呈するものと思われ、南岸にはテラスを認める。幅1.50m以上、検出面からの深さ0.54mを測り、埋土は南方から灰色砂及び黒色粘土が流れ込みが強い。遺物は僅かながら第10層より土師器（甌）を1点出土した。

#### 1SD15 (Fig.6・Tab.7)

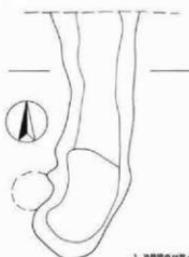
B区北端部で検出した遺構であり、南部の1SD13に切られる。遺構内は先述した1SD13と同様な摺鉢状を呈する。埋土の上半部は黒茶色粘土、下半部は砂層が厚く堆積した状態であり、東方からの流水によって当遺構内西部が大きく抉られたものと推測される。出土遺物は土師器（小皿）、黒曜石（剥片）が僅かに認められた。

### 溜まり状遺構

#### 1SX14 (Fig.6・Tab.6)

B区南端部に位置し、上半は1SD07に切られる。平面プランは半円状を呈し、遺構西部は調査区外へ展開する。幅3.10m、1SD07底部からの深さは0.35mを測る。埋土は黒灰色粘土が厚く堆積し、遺物は皆無であった。

1SD04



1. 植物根の付く黄土
2. 黄灰色の砂質土と赤褐色粘土層(リム山、灰灰化帶)

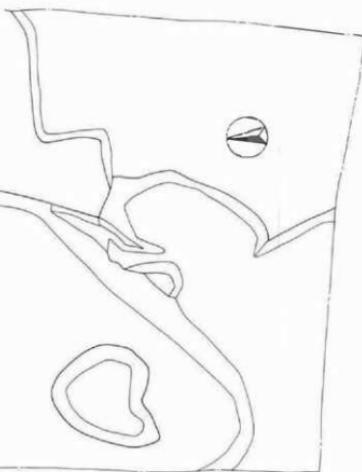
H=8.200m



1SK05



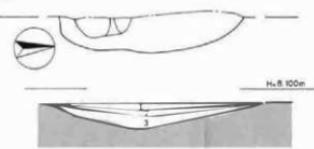
H=8.000m



1SX02



1SX03



## 南北土層

1. 剥離部 色鮮い(5~10mm位の小石を多く含む)
2. 黄褐色粘土層
3. 細粒褐色粘土層
4. 黄褐色砂質土
5. 黄褐色砂質土

地山：灰灰化帶

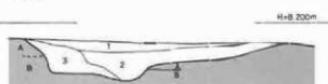


Fig.3 A区 溝 (1SD04)・土坑 (1SK05)・溜まり状遺構 (1SX01~03) 実測図 (1/40)

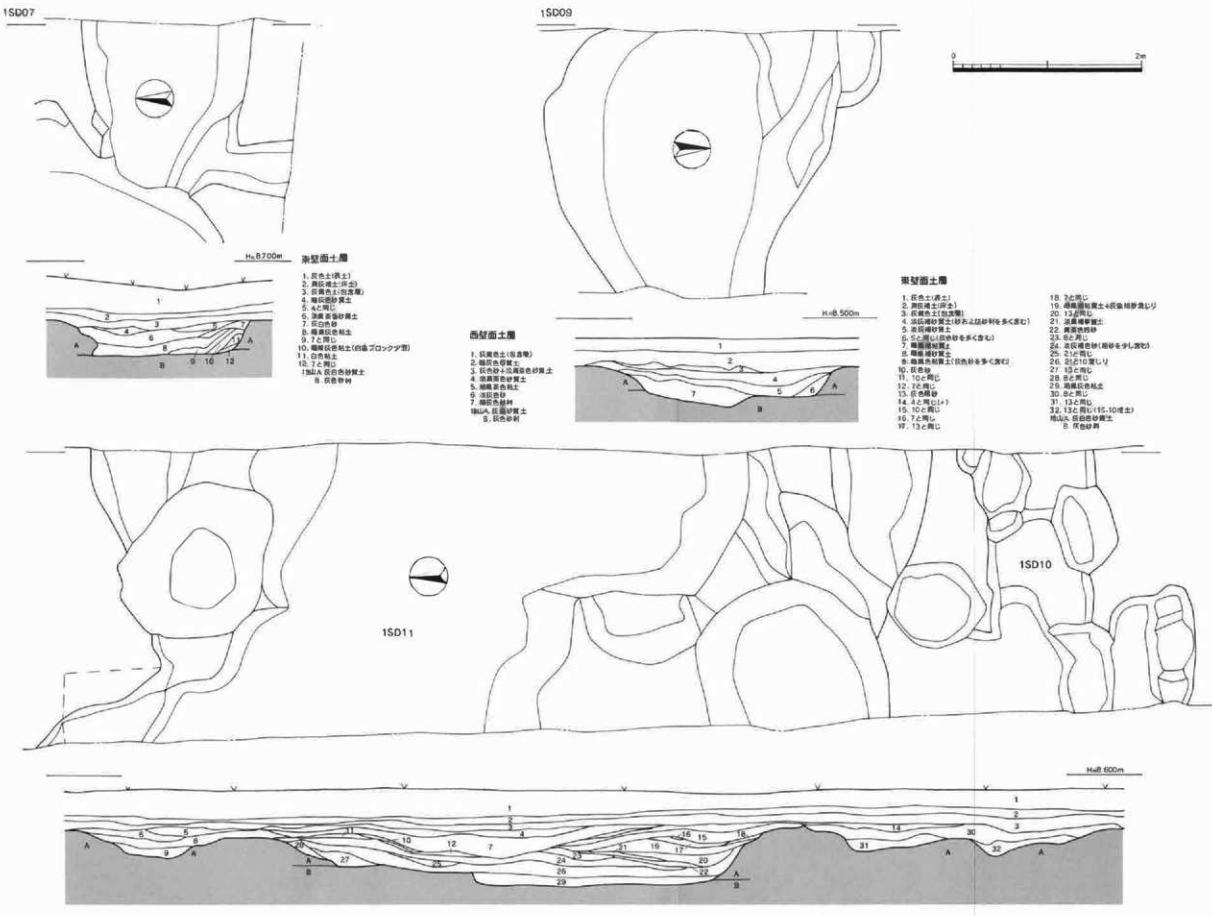
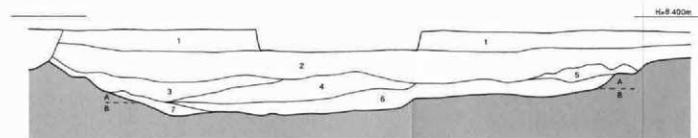
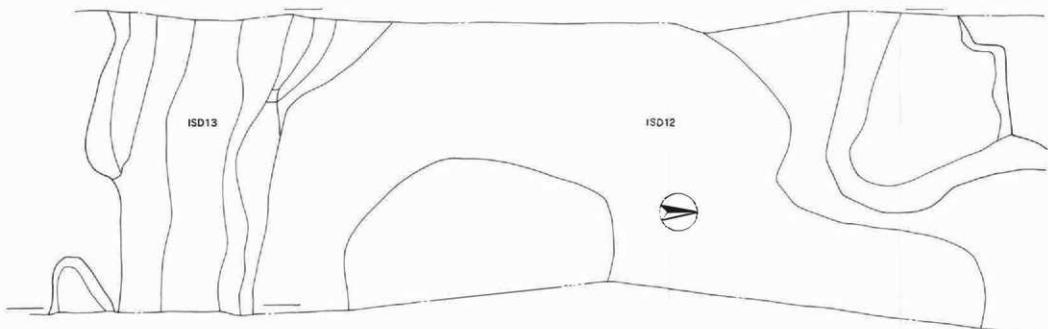


Fig.4 B区 溝 (1SD07-09~11) 実測図 (1/40)

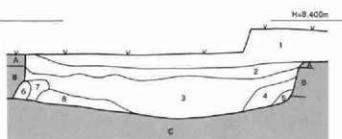
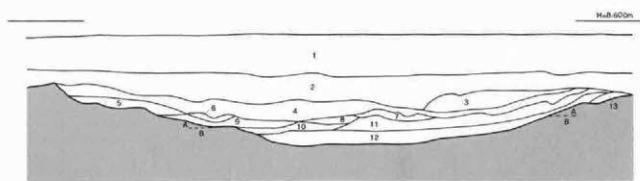
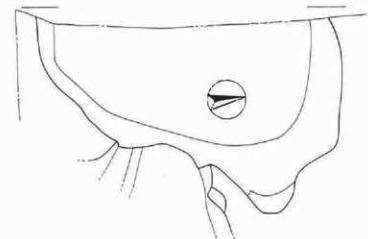
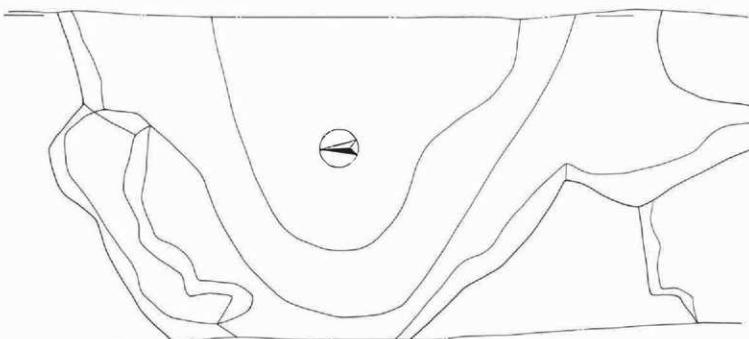


- 1. 灰色土(黒土)
- 2. 海藻灰分砂土
- 3. 鹿蹄草灰分土
- 4. 草原灰分土
- 5. 低地灰分黑土(シラカバ)
- 6. 沼泥灰分土
- 7. 沼泥灰分砂土(シラカバ)
- 8. 黑色灰分土

Fig.5 B区 溝 (ISD12・13) 実測図 (1/40)

1SD15

1SX14



1. 砂質土(黄土)  
2. 深褐色砂質土  
(1.0m以上で砂質多く泥化)  
3. 灰色砂質土  
(0.5m以上で砂質多く泥化)  
4. 灰褐色砂質土  
5. 黄褐色砂質土  
6. 黄褐色砂質土  
7. 地下含汚砂質土

8. 黄褐色砂質土  
9. 黄褐色砂質土  
10. 黄褐色砂質土  
11. 黄褐色砂質土  
12. 黄褐色砂質土  
13. 黄褐色砂質土  
13A. 黄白色砂質土  
13B. 黄褐色砂質土

1. 深褐色砂質土(基盤)  
2. 黄褐色砂質土  
3. 黄褐色砂質土  
4. 深褐色砂質土+褐色砂質土  
5. 黄褐色砂質土  
7. 土(土)  
8. 黄褐色砂質土  
9. 黄褐色砂質土  
10. 黄褐色砂質土  
11. 黄褐色砂質土  
12. 黄褐色砂質土  
13. 黄褐色砂質土  
13A. 黄白色砂質土  
13B. 黄褐色砂質土



Fig.6 B区 溝（1SD15）・溜まり状遺構（1SX14）実測図（1/40）

(3) 出土遺物

A区

溜まり状遺構

1SX01 (Fig.7 · Tab.8)

仰生土器

大甕 (1) 底部破片で平底を呈する。底径11.2cmを測り、体部にかけてはやや丸みを帯びながら立ち上がる。磨耗が著しく調整は不明である。

土師器

壺 (2) 口縁部細片で僅かに外反する。磨耗のため調整不明で、胎土は微砂粒・石英・角閃石を僅かに含む。

甕 (3) 底部細片で底径7.2cmを復元する。小型甕と思われ、底部は平底を呈する。磨耗のため調整不明で、胎土は微砂粒・石英・角閃石を僅かに含む。

瓦器

塊 (4) 口縁部細片で僅かに外反する。内面端部に重ね焼き痕跡が認められる。

白磁

皿 (5) 口縁部細片で端部は口禿げとなる。淡灰白色の素地に淡灰白色釉を施釉する。大字府編年IX類。

B区

溝

1SD10 (Fig.7 · Tab.8)

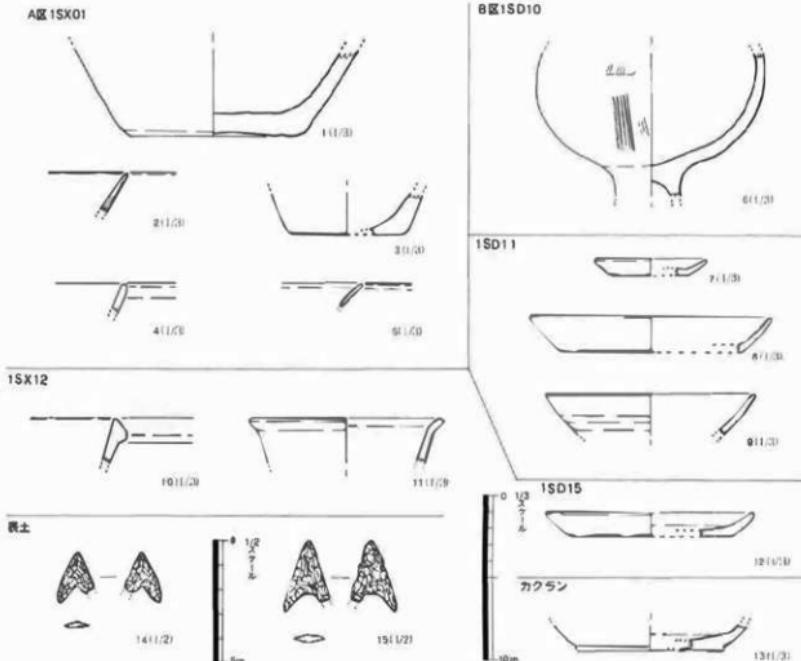


Fig.7 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)

#### 土師器

高壺 (6) 口縁端部及び脚部を欠損し、環部の最大径は14.0cmを測る。外側の一部で僅かに刷毛目痕を認め、胎土は微砂粒・石英・角閃石を含む。

#### 1SD11 (Fig.7・Tab.8)

##### 土師器

小壺 (7) 口径7.0cm、底径4.7cm、器高1.05cmを復元する。底部外側は糸切りで磨耗のため調整不明。

皿 (8) 口径14.9cm、底径11.2cm、器高2.2cmを復元する。底部外側は糸切りで体部はやや丸みを帯びる。磨耗のため調整不明である。

环 (9) 口縁部細片で口径13.0cmを復元する。体部と口縁部の境で後線を認め、口縁部はごく僅かに外反する。磨耗のため調整は不明である。

#### 1SD12 (Fig.7・Tab.8)

##### 瓦忠器

鉢 (10) 口縁部は玉縁状を呈する。焼成不良で色調は淡茶白色を呈する。胎土は1~2mm程度の砂粒及び石英を多く含む。

##### 青磁

环 (11) 口縁部細片で口径12.0cmを復元する。濃灰白色の素地に淡茶緑色の透明釉をかけ、内外面に貫入を認める。大宰府編年Ⅲ-1類と思われる。

#### 1SD15 (Fig.7・Tab.8)

##### 土師器

小壺 (12) 口径12.9cm、底径10.0cm、器高1.5cmを復元する。表面磨耗のためわかりにくいか底面外側は糸切りと思われる。

#### 攪乱・表土 (Fig.7・Tab.8)

##### 土師器

环 (13) 底部細片で底径9.1cmを復元する。表面磨耗のため調整不明。

##### 石器

石斧 (14・15) 共に凹基式の二等辺三角形を呈する石斧であり、石材はサスカイト製である。右脚部を欠損し、側邊に細かくタッヂを加える。14は表面の風化が著しい。

#### (4) 小結

当地は、東部から展開する八女丘陵南袖部にあり、西流する倉田川の北岸に立地する。調査区のほぼ全面にまたがって検出された溝及び割まり状遺構は、当地がこれらの地形的な制約を受けているためのものと考えられ、かねてから相当分の流水が集中する地域であったことが予測される。検出された全ての遺構が不安定なプランを呈し、堆積土中に多くの砂や礫層が認められたのはこのためと思われる。また、遺物において弥生時代から中世に至るまでの土器、石器を出土したが、何れも表面が著しく磨耗していることから、土砂に混入した遺物が激しいローリングを繰り返すことによって生じたものと察することができよう。今回出土した遺物は上流にあたる東部に展開する集落からの流入品と思われ、その存在を窺える資料となった。

## 2. 岐阜県立木遺跡 (1次調査)

### (1) はじめに

当遺跡は現在岐阜県立木本に所在しており、標高10.9mの低地に立地している。調査区は水路新設予定地のため南北4.5m、東西70mの東西に幅員長く設定し、平成17年4月26日より表土を除去を(有)協易重機に委託し、調査を開始した。7月21日の空中写真撮影を(有)空中写真企画に委託し7月26日に(株)アシア航測に委託した航空測量をもって調査は終了となった。

### (2) 掘出遺構

#### 溝

##### SD01 (Fig.11・Pla.9・10)

調査区東側で検出された南北に走る溝である。検出段階では幅15m～27mと東に幅広がりを示す大きな溝であったが、掘り進めると自然流路であることと、数回の流路の変化があることが分かった。SD01の最終的な形態はY字状を呈し分岐していたものと思われる。また、中間部に残っている箇所も地中とは異なり前段階に堆積した堆積土である。

##### SD02 (Fig.11・Pla.9・10)

SD01の東側で検出された南北方向に走る溝である。幅約1.7m、深さは検出面より約0.5mを測る。この溝はSD01を切っている。

#### SD08 (付図)

調査区(南)西側で検出された幅約0.2m、深さ0.1mを測る。断面形態はV字状を呈し、北西方向に走る溝である。

#### 土坑

##### SK03 (Fig.8)

SD01の西側に深さ3cm～10cmの浅いogni地状が不定形に広がつてます! その中央部に幅約1.0m、深さ約0.1mを測り、不定形を呈する土坑である。土削器の脚片が數点出土したが同化出来るレベルではなかった。

##### SK04 (Fig.8)

SD01の南側に位置している、長幅0.95m、短幅0.65m、深さ0.1mを測る。不定形を呈する土坑であり、出土遺物は土削器が数点出土したが同化出来ない。

##### SK07 (Fig.9)

調査区中央より西よりで検出し、北側の調査区外に延びている土坑である。幅1.4m、深さ0.2mを測る円形を呈するとと思われる。土削器を数点出土したが同化出来ない。

##### SX05・06 (付図)

ogni頭と思われる非常なogni頭が出土したために遺物番号を発用したが、レベル自体は地表面と変わらずに不定形に広がっており、範囲も曖昧なために航空測量で同化されなかつた。SK04とSK07の間がおおよその範囲であり、細かい門戸面になっている。

### 3) 出土遺物 (Fig.10・Pla.13)



Fig.8 SK03 - SK04 連続実測図 (1/40)

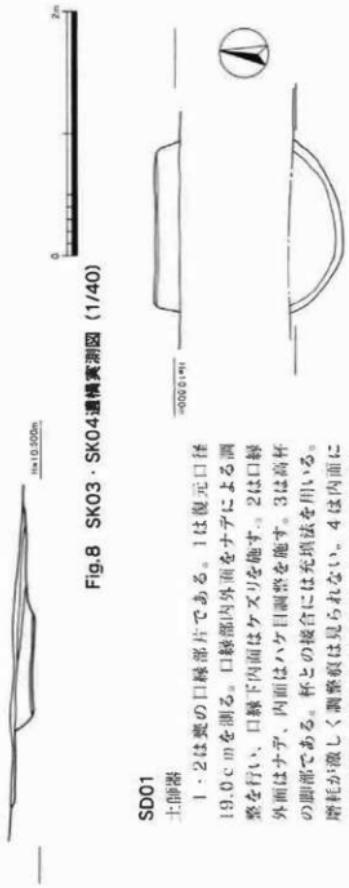


Fig.9 SK07 連續実測図 (1/40)

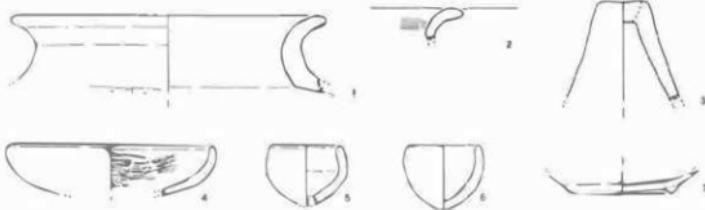
#### SD01 土削器

1・2は堀の口縁部断面である。1は復元口径19.0cmを測る。口縁部内外面をナードによる調整を行い、口縁下内面はケスリを施す。2は口縁外面はナード、内面はハケ口調節部を施す。3は高杆の脚部である。4との接合には充填法を用いる。磨耗が激しく調整部は見られない。4は内面に丁寧な解きを施した状である。外面にちり居きを施しているようだが増耗によって幅15mmない。5・6はミニチュアの手握ね土器で、口縁部を内側するタイプと羽\*かに内蔵するタイプが出土したが磨耗が激しく器壁が崩落している。7は取り付け高台の杯である。切り離し最も直取されないほど惜耗している。

#### SD02 土削器

8~11まで堀の口縁部である。8・10は頗く直線的に立ち上がり、9は外側に強く屈曲している。11は縫やかに屈曲しながら立ち上がる。8・10は削削部が擦耗により看取出来ない状態である。8も外側の縫方向のハケ口調節が施されているのが見える程度である。

SD01



SD02

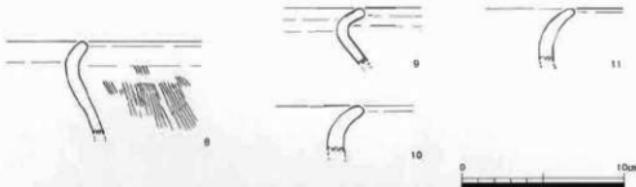


Fig.10 SD01・SD02出土遺物 (1/3)

NO	種類	口径	底径	器高	残存	色調
1	土師器裏	(19.4)	—	—	口縁部1/2	淡灰茶色
2	土師器裏	—	—	—	口縁部1/4	淡茶褐色
3	土師器高杯	—	—	—	脚部1/3	淡橙色
4	土師器杯	(12.8)	—	—	1/3	暗茶褐色
5	土師器ミニチュア	(4.6)	—	3.7	1/3	淡茶灰色
6	土師器ミニチュア	(4.2)	—	4.0	1/2	淡茶灰色
7	土師器杯	—	(6.3)	—	1/4	淡茶白色
8	土師器裏	—	—	—	1/4	淡灰茶色
9	土師器裏	—	—	—	口縁部細片	淡灰茶色
10	土師器裏	—	—	—	口縁部細片	淡灰茶色
11	土師器裏	—	—	—	口縁部細片	淡灰茶色

※( )内は復元による数値

Tab.1 出土遺物観察表

## (4) 小結

今回発掘した本遺跡は東西方向に長長い調査区であり、その調査区内で遺物を多く含む遺構は少なかった。その中で溝状遺構では少量ながら遺物を出土したのだがSD01は自然流路であった。本遺跡の立地する場所は八女丘陵西端部より鋸歯状に張り出した丘陵間の谷部から低地部に移行する箇所に立地しているために西侧に向かって標高が低くなってしまっており、水の流れは東西方向になると思われる。しかし、SD01は南北方向に走っているために、低地部では谷部から流れた水はかなり蛇行しながら流れていったと思われる。

## 【参考文献】

筑後市教育委員会 「歴史遺跡群（青ノ木遺跡）」

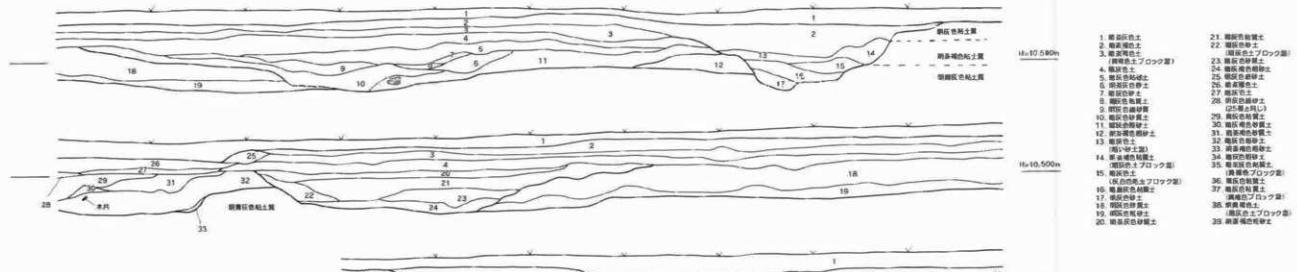
1990 筑後市文化財調査報告書第6号

筑後市史編纂委員会 「筑後市史」

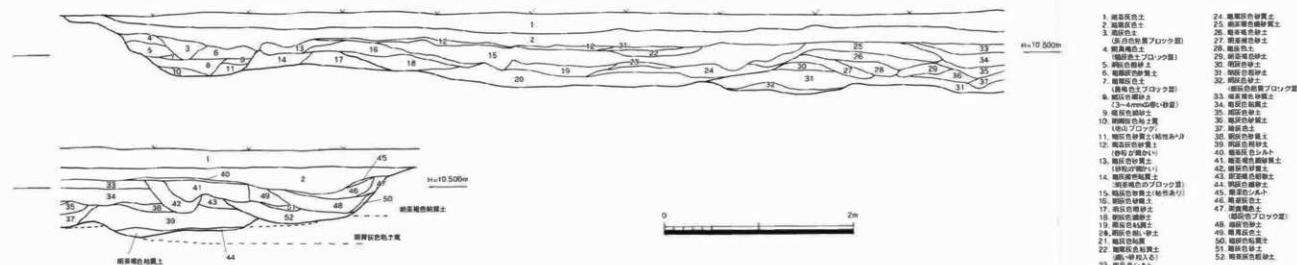
1998 筑後市史編纂委員会



調査終了後 現地状況



SD01 SD02北望土著國



SD01, SD02南盤土層圖

### 3. 考収保古手遺跡 第2次調査 (A区)

#### (1) はじめに

当遺跡は茨城市大字藏敷字保古手2259番に所在する。標高約9m～10mの低地に立地し、調査区北側と南側は八久佐喰屋部の標高約15mの丘陵地帯を形成するため、調査区一帯は谷張の地形を呈する。試掘調査は平成17年5月12日から7月29日。調査面積は1458m<sup>2</sup>。調査期間は平成17年5月12日から7月29日。調査に際しては機械による土壌調査（有）フクシマ重機、基準点・水準点設置作業、航空測量による遺構全体圖作成をアジアアドバイザリーズ（株）、遺構全体芋負担形を（41）空中写真撮影に委託した。発掘調査は上村英士が担当した。

#### 基本土層

調査前は水田として使用されており、標高約10mを測る。耕作土が約25cm、その下に約15cm～10cmの木上を確認し、木上を除去した黄白色粘土（一部シルト系も有り）および茶色粘土上の地山に遺構が切り込む。遺構埋土は黒色系粘質土と茶色系粘質土及び砂質系に分かれれる。

#### (2) 検出遺構

##### 土塁

調査区西端の現況水路北側で検出し、調査区外へ延びると考えられる土塁である。検出最大長軸約8.8m、検出最大幅約3.25m、最大深さ約0.57mを測る。埋土は茶色系で下層は砂質土である。遺物は須恵器鏡片、土師器坏片、小皿片、土鍋片、甕片、磁器片、陶器片、瓦片、黒曜石片、サスカイト刻片を出土している。

##### 2SK13 (Fig.15, Pla.15)

調査区中央で2SD10に切られる不定形な土塁である。検出長軸約5.2m、検出幅軸約2.5m、最大深さ約0.72mを測る。埋土は黑色系の粘質土が基層で下層で砂質土が混じる。遺物は磁器片を出土する。

##### 2SD09 (Fig.14, Pla.15・16)

調査区を南北に延びて走る削り、低地に存在するため氾濫原として扱うほうが妥当である。調査はA・B・Cトレンチを設定し細割している。検出最大幅約1.3m、最大深さはAトレンチで1.7mを測る。埋土は基本的に黒色系の粘質土で一部砂層が混じる。地山は黄色粘土層下の小疊層となり地下水がある。遺物は土師器鏡片、甕片、坏片、瓦片を出土している。

##### 2SD10 (Fig.14, Pla.17)

調査区中央を東西に延びて走る削り、2SD09・2SK05を切る溝である。東端で2SX12に接続するような形状をとる。検出長軸約20m、検出最大幅約2.3m、最大深さ約0.33mを測る。埋土は上層が茶色系の砂質土、下層が黒色系である。遺物は土壙・須恵器鏡片、土師器坏片、小皿片、土鍋片、甕片、瓦器焼片、磁器片、瓦片を、下層からは須恵器鏡片、土師器坏片、甕片、土壙片を出土している。

#### 不明遺構

##### 2SX12 (Fig.16)

調査区中央東端で検出した不定形な遺構で2SD10と合流している。検出長軸約9.55m、検出幅軸約6.6mを測る。深さについては基底を過塗しており一部砂層部で0.48mを測る。埋土は茶色系の粘質土である。遺物は土師器鏡片、高坏片、土壙片、瓶器片、瓦器焼片、磁器片、陶器焼片、甕片、瓦片、石製品を出土している。

## 2SK14 (Fig.17)

2SK13東側で検出したかぶ不定形な遺構である。一部にチラスを設け、検出長幅約3.7m、検出範囲約1.75m、最大深さ約0.33mを測る。構底は安定しておらず、海水による削除で頂上では削元行きでないかが確認には約10cm前後の小ビットを多數確認している。遺構全体の埋土は茶色系である。遺物は土師器环×皿片、鑿片、土鍬片、瓦器片、磁器片を出土している。

## 2SK23 (Fig.13)

調査区南側で検出した不定形な遺構である。このような不定形な遺構は当調査区では数多く確認しており、上層の現況耕作や旧耕作時の痕跡、若しくは粘土等の上取り場ではないかと考えられる。検出長幅約9.3m、最大深さ約0.06mを測る。遺物は土師器片、磁器片、陶器片、黒曜石剝片を出土している。

## 2SK26 (Fig.13)

調査区中央で検出した不定形な遺構であるが2SK09を越けるように配置している。埋土は茶色系と黒色系が混じる粘質土であり、構底は北側が低くなる。遺物は土師器環×皿片、土鍬器皿片、土師器片、瓦質すり鉢片、瓦片を出土している。

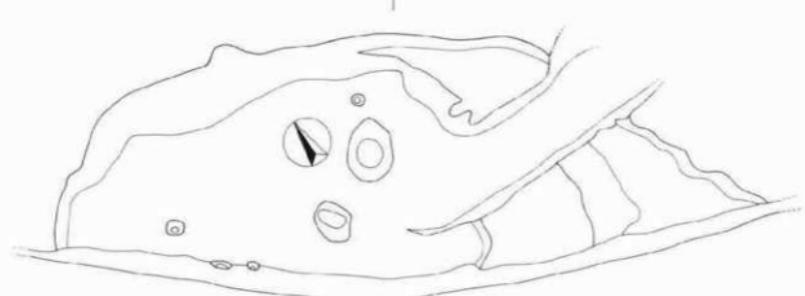
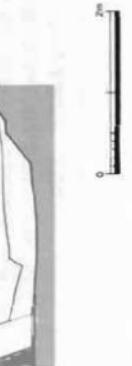


Fig.12 2SK05実測図 (1/60)



## 2SK18 (Fig.18,19, Pla.17-20)

調査区中央北側で検出した計12個(1a~l)の連続する土壌壁である。各土壌は削円形を基本とし、上部規則は長輪で45.0m~0.90m、底部約0.18m~0.49m、深さは最大で0.13mを測る。上部開口部は西側列の南化で0.40m~0.45m(立上り部開口)、東列の南北で0.40m~0.50mを測る。埋土は單一層で、淡黒色土に地山近傍の黄色土が縦に混入している。埋土は端までおり堅固である。遺物は土師器小片のみである。

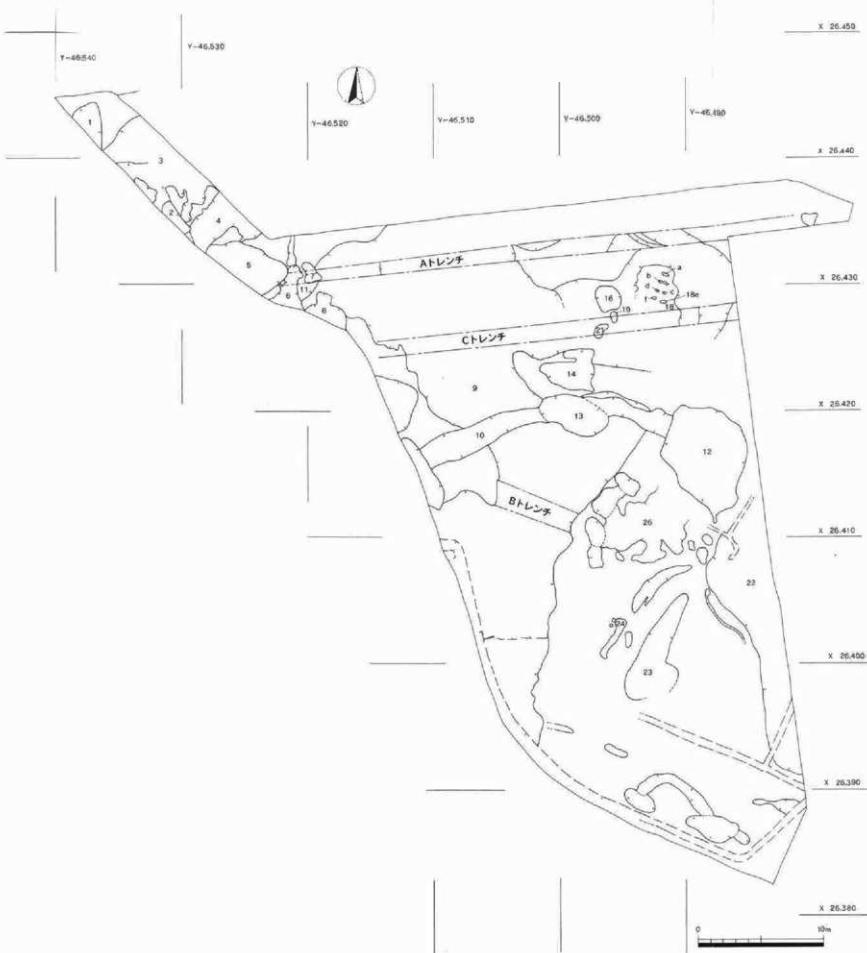
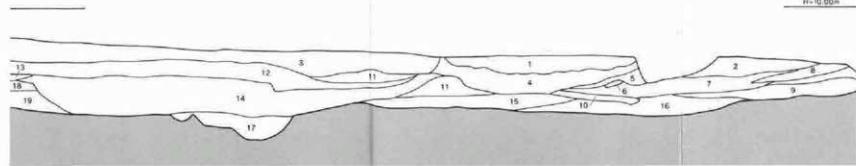


Fig.13 藏数保古手遺跡第2次調査（A区）遺構略測図（1/300）

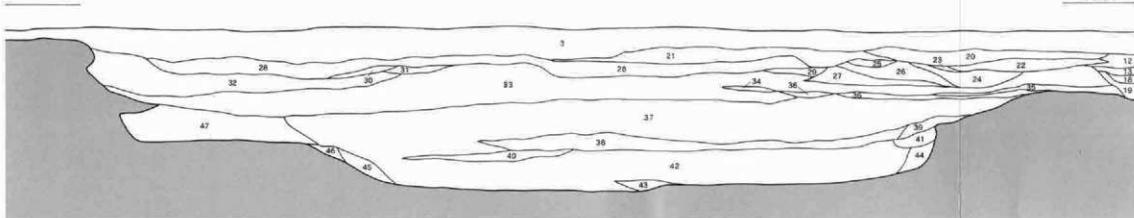
2SD09(AH レンチ)

1. 黄褐色土
2. 黄褐色砂質土
3. 黄褐色砂質土
4. 淡黄褐色砂質土(粘りあり)
5. 淡黄褐色砂質土(粘りなし)
6. 砂質灰土
7. 砂質灰土
8. 砂質灰土(2段目)
9. 砂質灰土(1段目)
10. 黄褐色砂質土(分離質)
11. 黄褐色砂質土(2段目)
12. 黄褐色砂質土
13. 黄褐色砂質土
14. (中)黄褐色砂質土(小石混入)
15. 黄褐色砂質灰土
16. 黄褐色砂質灰土
17. 黄褐色砂質灰土(粘り)
18. 黄褐色砂質灰土(粘りなし)
19. 灰色砂質土(粘り)
20. 黄褐色土
21. 灰色砂質土
22. 灰色砂質土
23. 灰色砂質土
24. 灰色砂質土
25. 砂質灰土(シルト質)
26. 砂質灰土(シルト質)
27. (中)黄褐色土(シルト質)
28. 黄褐色土(シルト質)
29. 灰色砂質土(シルト質)
30. 灰色砂質土
31. 砂質灰土(シルト質)
32. 砂質灰土(シルト質)
33. 灰色砂質土(シルト質)
34. 砂質灰土
35. 灰色砂質土
36. 黄褐色砂質土
37. 砂質灰土(シルト質)
38. 灰色砂質土(シルト質)
39. 灰色砂質土
40. 黄褐色砂質土(粘り)
41. 黄褐色砂質灰土(粘り)
42. 黄褐色砂質灰土(粘りなし)
43. 灰色砂質土
44. 砂質灰土
45. 灰色砂質土
46. 灰色砂質土
47. 黄褐色砂質土

H=10.00m



H=10.00m

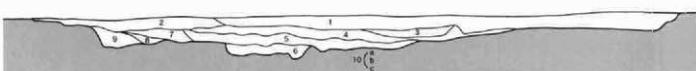


2SD09(B レンチ)

1. 淡黄褐色砂質土
2. x (中)黄褐色土(2段目)
3. 黄褐色土(2段目)
4. 黄褐色砂質土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色砂質土
7. 黄褐色砂質土
8. 黄褐色砂質土
9. 黄褐色砂質土
10. 灰色砂質土(粘り)

2SD10

H=10.00m



1. 淡黄褐色土(シルト質)
2. 当代灰土
3. 灰色砂質土
4. 地山堆積

Fig.14 2SD09・10土層図 (1/40)

2SK13

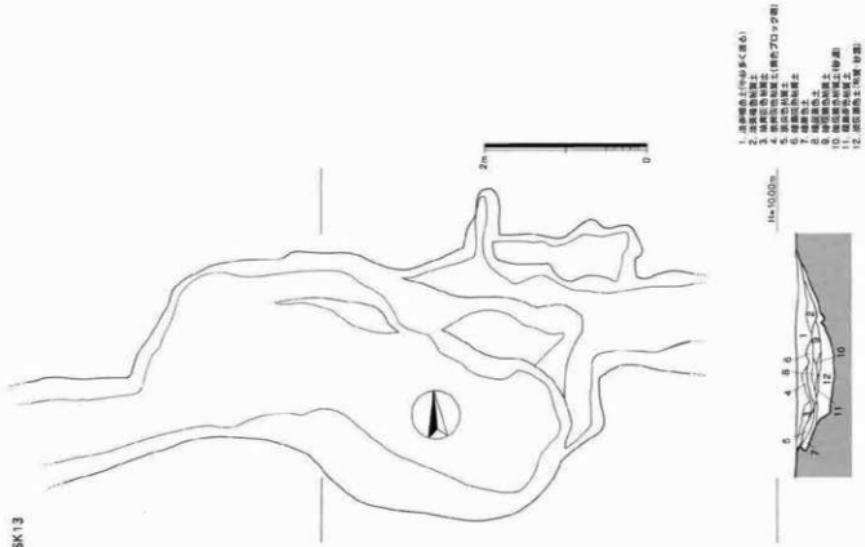


Fig.15 2SK13調査図 (1/60)

2SX22 (Fig.20、Pla.20・21)

調査区中央東側で検出し剥離区外へ延びると考えられる不定形な遺構である。検出長約15m、最 大深さ約0.16mを測る。茶色砂系の埋土を削除すると底は0.10m程度の小ビットが無数に存在して いる。（図上は削木による崩壊で観察部のみの状況で、検出時は小ビットが密集している。）遺物は須恵 帽壺片、土師器片×皿片、瓦片、土鍋片、鉢片、瓦器片、礫器片、且異土器片、瓦 片、土製品、石製品、石製品が出土している。

2SX27 (Fig.21、Pla.20・21)

2SX18南側で検出した小ビットが群集する遺構である。SX12との切り合い関係は不明であり、これ らの小ビットの分布範囲も不安定でSX18を切るものもある。壁上は茶色系の炒質土と粘質土が混ざっ ており、各ビットの断面は不定形である。遺物は出土していない。

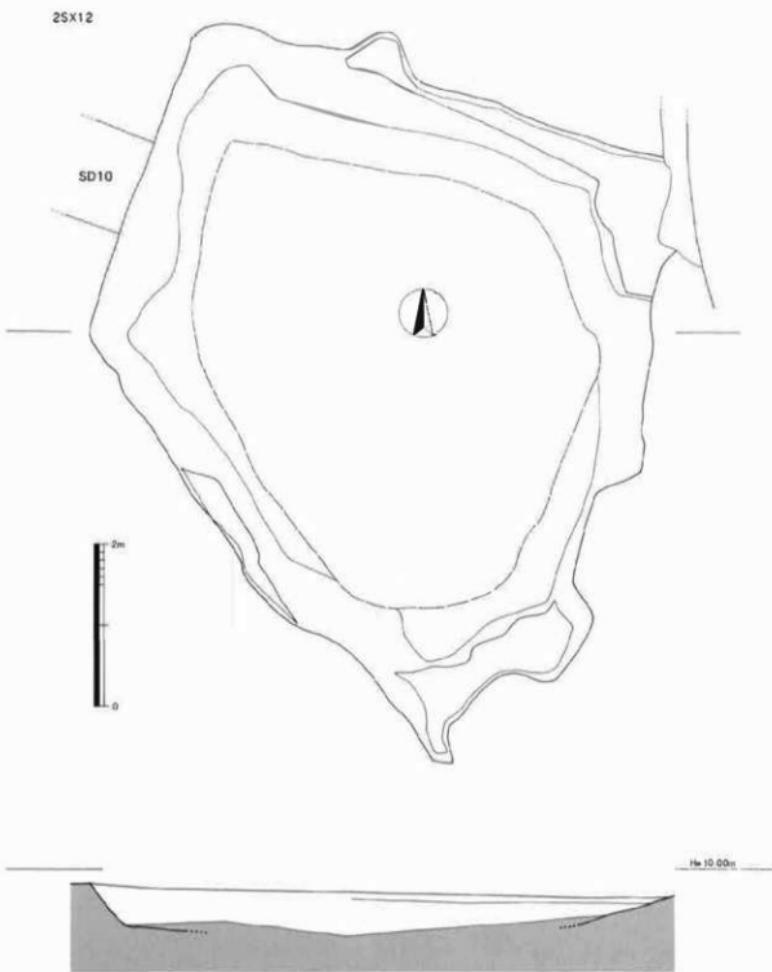


Fig.16 2SX12実測図 (1/60)

(3) 出土遺物

土壤

2SK05 (Fig.22、Pla.23)

土師器

小皿 (1) 口径7.0cm、器高1.8cm、底径5.6cmを測る。底部糸切りで口縁部に油焼が残る。

磁器

白磁

2SX14

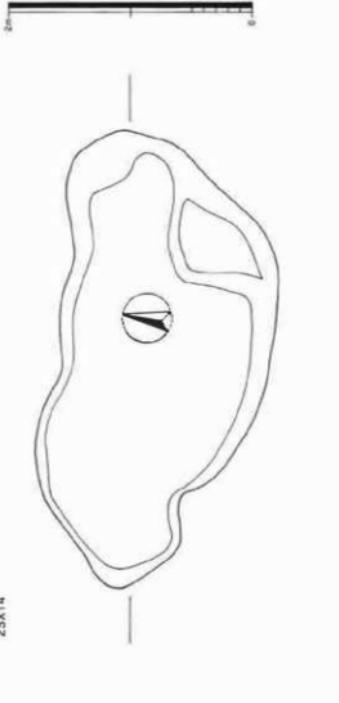


Fig. 17 2SX14実測図 (1/40)

碗 (2) 底径5.1cmを測る。高台接地前のみ縁片で、見込みに目撃か4ヶ所残る。若干質人が見られ、内面にはビンホールが残る。

皿 (3) 口縁部片で端部が若干外反する。残存器高1.2cmを測る。

糸付 (4) 口縁部から体部片で口縁外面に開隙、体部下位に梅花文を施す。

2SK13 (Fig.22, Pla.23)

磁器

白磁

碗×皿 (5) 口縁端部片で縁部を外反させ上縁部を水平に上げる。

青

2SD09 (Fig.22, Pla.23)

土陶器

环 (6) 体部から口縁部にかけて内凹し、丸形になると考えられる环片である。剥離は磨耗のため不明。  
環(7・8) 7は口縁部片で内面頭部下から横方向のテ  
内面にヨコナチその後の斜方向ハケ目が残る。

2SD10茶砂土 (Fig.22, Pla.23)

土陶器

土鍋 (9・10) 共に口縁部片で縁部を折り曲げ玉縁状に仕上げる。剥離は磨耗のため不明、焼成不良である。  
磁器

白磁

皿 (11) 口縁部細片で端部を外反させる。現存器高1.4cmを測る。

2SD10茶粘 (Fig.22, Pla.23)

土陶器

土鍋 (12) 口縁部から上位片で、口縁部を折り曲げ玉縁状に仕上げる。体部外側に指痕跡が残る。

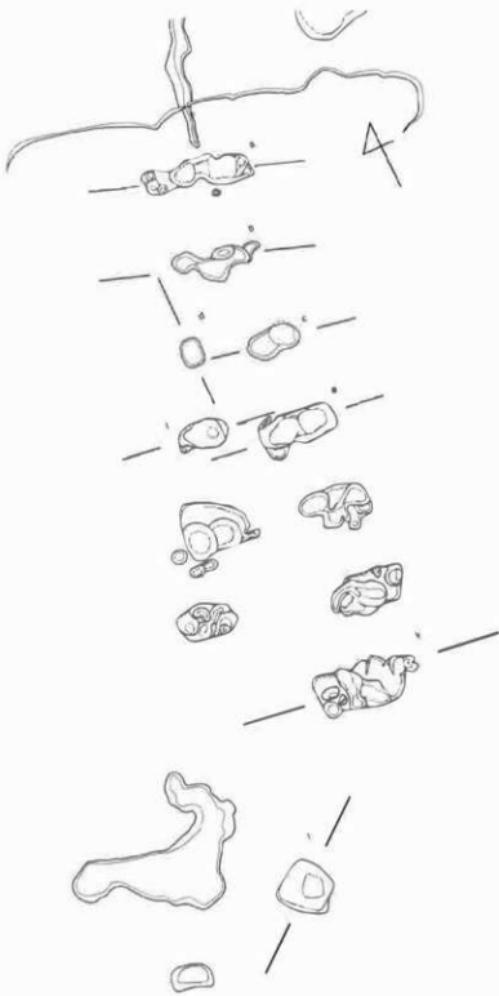


Fig. 18 2SX18窓測図 (1/40)

#### 2SD10 (Fig. 22, Pla. 23・24)

類器

壺 (13) 口縁端部片で調整はヨコナデ、外面屈曲下に自然軸がかかる。焼成還元良好で暗青灰色。

土師器

小皿 (14) 口径10.7cm、器高1.4cm、底径8.0cmを測る。底部糸切り、内外面は磨耗のため調整不明。

すり鉢 (15) 底部片で底径8.0cmを測る。内面にすり目を施す。焼成不良。

瓦器

椀 (16) 口縁部片で調整はヨコナデ。焼成不良で口縁部内外面淡黒灰色、淡茶灰色を呈する。

磁器

白磁

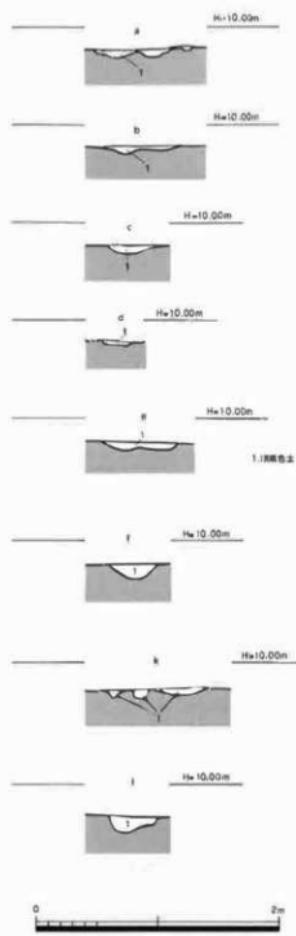


Fig. 19 2SX18土層図 (1/40)



Fig.20 2SX22 実測図 (1/50)

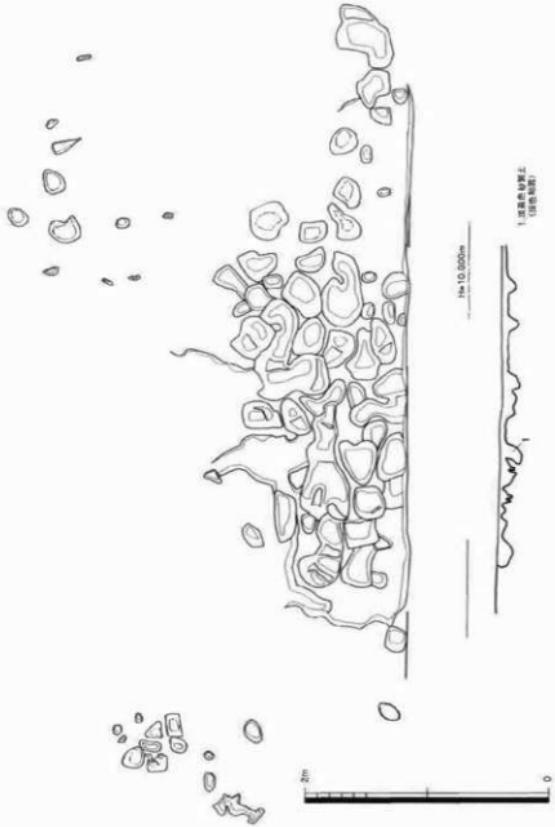


Fig.21 2SX27實測圖 (1/40)

III (17) 口縁から体部片で口先げのIIIである。残存器高2.15cmを測る。

碗 (18) 口縁部片で全面施釉である。口縁端部を若干外反させる。

青磁

碗 (19) 電気窯系青磁で外面に連弁を施す。

土器皿

平瓦 (20) 製土は石英や角閃石を含み比較的精造されている。丁寧に削りし、布目模が残る。

不明遺構

2SX12 (Fig.22, Pla.24・25)

土器器

土鍋 (21) 口縁端部を玉縫状に仕上げ、前面は縱方向のかげ目、外面は折断線と縱方向のハゲ目が残る。

筆×筆 (22) 穴孔した耳の部分である。胎上は精選されており赤色粒子が見られる。

瓦器

碗 (23) 口縁部片で調整は焼成のために不規則、外面淡茶褐色を呈し、焼成不良である。

磁器

青磁

碗 (24) 体部片で外面に縱方向の槽目を施す。同安窯系青磁。

陶器

筆 (25) 歪形片で内外面に算割を施す。高台部は算割。基部は淡米灰色、淡煙茶色を呈する。半程度の痛みが見られる。花崗岩製。

石製品

不明製品 (26) 長さ22.5cm、厚さ4.8cmを測り、側面が坂面状している。中央に直徑5cm程度、深さ2.0cm程度の痛みが見られる。花崗岩製。

2SX14 (Fig.22, Pla.25)

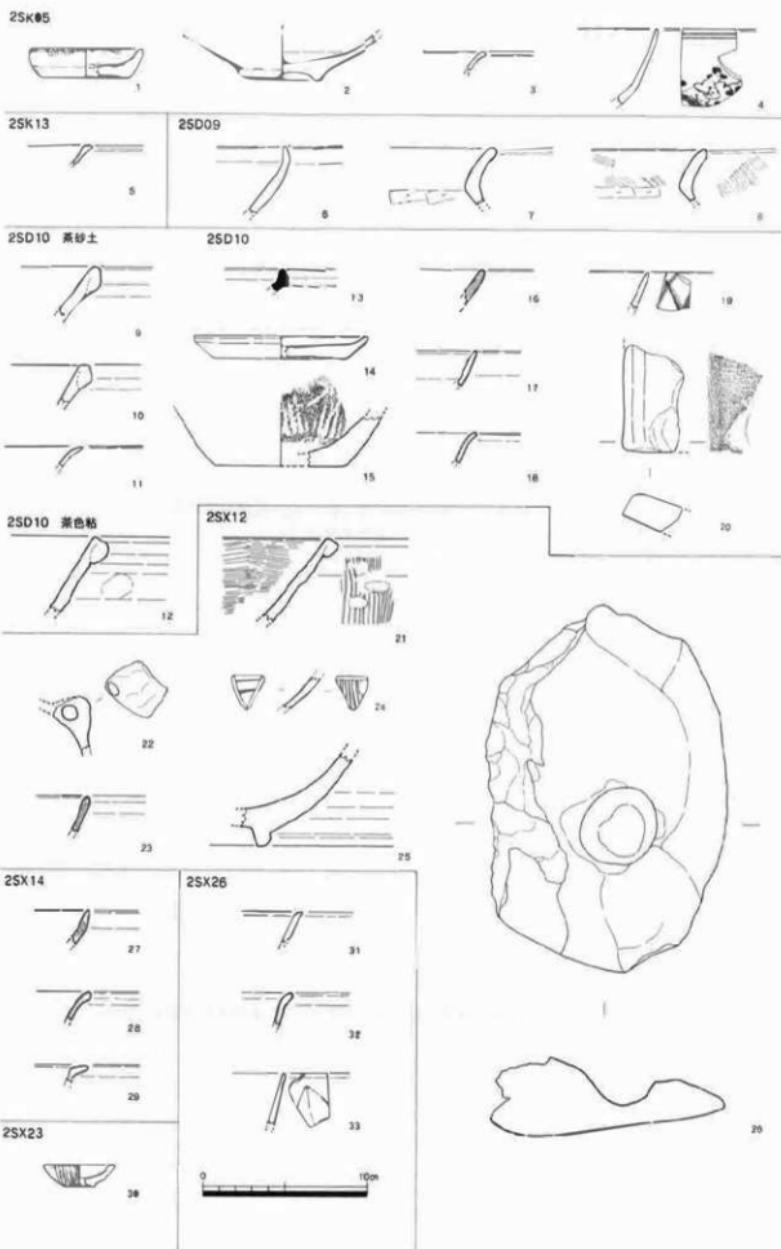


Fig.22 出土遺物① (1/3)

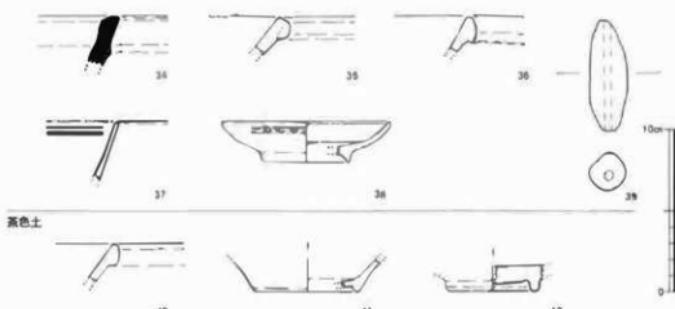


Fig.23 出土遺物② (1/3)

## 瓦器

楕 (27) 口縁部片で端部が若干内湾する。口縁外側は重ね焼き痕が残り黒色化している。

## 磁器

## 青磁

碗 (28) 口縁部片で端部が若干丸みを帯びる。釉が厚く掛かる。竜泉窯系青磁。

鉢 (29) 口縁端部を屈曲させ平らに仕上げる。竜泉窯系青磁。

## 2SX23 (Fig.22、Pla.25)

## 磁器

## 白磁

紅皿 (30) 口径4.5cm、器高1.35cm、高台径1.8cmを測る。外面を貝殻上に型押しする。

## 2SX26 (Fig.22、Pla.25)

## 磁器

## 白磁

碗 (31) 口縁部片で端部が若干外反する。素地は淡茶白色、釉調は淡黄白色。

## 青磁

碗 (32・33) 32は小碗で口縁部を外反させる。33は外面に連弁を施す。共に竜泉窯系青磁。

## 2SX22 (Fig.23、Pla.25・26)

## 須恵器

甕 (34) 口縁部片で外面に浅い断面三角形の突帯が付く。調整はヨコナデ、自然釉が掛かる。

## 土師器

土鍋 (35) 口縁部片で端部を玉縁状に仕上げる。調整は磨耗のため不明。

## 磁器

## 白磁

碗 (36) 口縁部を玉縁状に仕上げる。外面にピンホールが残り、淡黄茶色を呈して焼成不良。

## 青磁

碗 (37) 口縁部内面に三本の沈線が見られる。竜泉窯系青磁。

## 染付

皿 (38) 口径10.5cm、器高2.5cm、高台径5.4cmを測る。見込みを蛇の目状に釉のカキ取る。

## 土製品

土鍋 (39) 長さ6.8cm、幅2.35cm、厚さ2.3cmを測る。約6mmの孔を穿つ。

## 茶色土 (包含層)

## 磁器

## 2SX26 (Fig.23, Pla.25・26)

自磁  
腕 (40・41) 40は口解剖を玉解状に仕上げる。軸調は毫灰白色を呈し、焼成良好。41は高台16.5cmを測り、高台部断面で斜面仕上げる。

### 肖磁

腕 (42) 底部片で高台径5.8cmを測る。高台側は露點。

### (4) 小結

今次調査では前的な調査範囲により数々の遺物が検出されており、これらの中で幾つかの特徴的な遺物について概観していく。

#### 大鉗

2SD09については、北側検出地点でかなり遺構は深く粘土層と砂層の混合している状況から、かなりの流水があったと考えられる遺構側面のオーバーハングの状況からも判断できる。しかし、中古層や南側では粘土層が浅く崩壊しているのみとなり、調査区南端では地山である砂礫層が北側の検出面より高い位置で崩壊されている。この事から2SD09は完了しながら調査区を東西に淀む、若しくは雨水により激しい流水があつた事を物語っている。調査区一帯が標高10m以下の低地であり、北側と南側が東丘陵端部となる谷地形のため、大鉗と音より、むろ自然剥皮及び筋の痕跡とも考えられる。水には事欠かない地域である事は調査区の雨水による水流空により明らかである。また、出土遺物から見るとハトレンチである北側からは古墳時代までの遺物しか確認されず、南側であるCトレンチから中世の遺物を検出している事から、地形的な制限により様々な時代に何度も泥炭が盛り返されている様が見受けられる。しかし、人骨や以前に採取した遺物が検出されており、旧地で営まれた遺構の意義について考えなければならない。

#### 波板状連続土塊および不明遺構

2SX18については、現在までに様々な研究成果から遺構定や性格の推定が行われている。今次調査の遺構については、遺構配置状況と2SX22・27から、ある程度想定できる性格について言及していく。遺構は2SX18が横北方間に配置され、北から南側へ二段に分離される。分離した最南端の連続土塊2SX18-1周辺から2SX27の小ビット群が切り込むたところ、30年～40年前までは馬等による水田耕作を検出され、下層へ、下層へと直下から検出される点も考慮すると可能性は高い。しかし、連続土塊が検出されたのは2SX8のみであり、小ビット群も範囲は調査区全体から見ると極端に狭いため疑問は残る。当市では限界宮ノ後遺跡等でも同様に不定形な沈み込み(ビット)式を採用する

が集中的に検出されており、今後の調査事例の増加に期待したい。

波板状連続土塊については昨今の研究で遺構の性格付けが行われているが、その中で「牛馬歩行種」が近年の成見で明らかになっている。牛馬の歩行により連続した土壠が形成される過程が復元されており、一概には言えないが今次調査の2SX18から2SX22・27へと続く則脚はこれらを推定する手がかりとなる。調査地で農家の方の聞き取り調査を行つたところ、30年～40年前までは馬等による水田耕作を行つていたようで、遺構が表土（耕作者・床土）直下から検出される点も考慮すると可能性は高い。しかし、連続土塊が検出されたのは2SX8のみであり、小ビット群も範囲は調査区全体から見ると極端に狭いため疑問は残る。当市では限界宮ノ後遺跡等でも同様に不定形な沈み込み(ビット)式を採用する

#### 出土遺物

各遺構から出土している(?)遺構の時期を明確に示す遺物に恵まれなかつた。それの中でも、2SD1 QH1のガラスが特異な遺物として挙げられる。当市では古代・中世を通じて見を出土する遺物及び遺物自体の出土が殆どない。近世・近代では水田地の素焼きの土管を作る器物で作成された平瓦が見受けられる。今次調査の平瓦については水田地の平瓦に比べて厚く、馬上も若干異なる。近隣で古代の遺跡は確認されておらず、中世には坂東寺・鶴野神社（鶴野時代）の北側地として栄えていたことから圓通を慶わせる遺物である。

Tab. 2 程數保吉手調卦繩2次圖暨A區

（）注視允許、注視強制

#### 4. 藏数保古手遺跡 第2次調査 (B区)

##### (1)はじめに

当遺跡は筑後市大字藏数字保古手238-1に所在する。東方より八手状に広がる八女丘陵の谷部にあたり、標高10.8m位の低地に立地する。筑後北部地区県営は場整備事業（扫一手育成型）筑後北部地区平成17年度工事に係る発掘調査であり、調査区は同小字内において2箇所を設置することとなつたために西側調査区をA区、東側調査区をB区と称した。A区は上村英士、B区は小林勇作が調査を担当した。当調査区(B区)は、永久構築物となる道路の掘削部分と遺跡確認範囲の約411m<sup>2</sup>を対象範囲としてし字状に設定し、発掘調査は平成17年6月6日から同年9月5日の約3ヶ月間実施した。この間、考古学的手法による表土剥ぎ、遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影を行い、整理作業から報告書作成に至るまでの作業は文化財整理室で随時行った。なお、重機による表土剥ぎは(有)福島重機へ、航空測量業務はアシア航測(株)へ委託した。調査の結果、溝・土坑・道路状遺構等の遺構が確認され、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・石器等の出土遺物を得ることができた。以下は、発掘調査で確認された主要な遺構と遺物について報告する。

##### (2) 検出遺構

溝

##### 2SD1 (Fig.25 · Tab.28 · 29)

調査区北部に位置した東西方向の溝であり、途中、土坑状に拡張する箇所を確認した。溝の長さは15.0m、幅0.60~1.03m、深さ0.33mを測る。溝の断面形は逆台形状を呈し、溝底はほぼ平坦な状態を呈する。上位層は黒茶色粘質土、下位層は灰色砂がレンズ状に堆積し、一定の流水を伴っていた可能性が考えられる。もう一方で検出した土坑状に拡張した部分は、長軸2.62m、短軸1.83m、深さ0.83mを測り、溝より下位の壁坑はオーバーハング気味に抉られていた。遺構内下半の壁面は灰色砂利を呈する地山で脆く、流水に伴って崩落したためと考えられる。遺構の機能としては一般的に流水路(2SD1)を利用した漁耕の施設であったことが推測されるが、この他の様々な要因も考えられよう。2SD1から弥生土器(甕・片)を認めている。

流路

##### 2SX2 (Fig.25 · Tab.30 · 31)

調査区中央部で検出した東西方向の溝である。南部の溝(2SX3)及び下位の道路状遺構(2SF5)を切るように確認され、幅約5.40m、遺構検出面からの深さ0.32~0.90mを復元する。土層被覆では上位層に比較的安定した粘質土が堆積していたが、下位層においては砂や砂利が混入した砂質土の発達層が見られた。また、溝底では筋状にはしる溝状遺構が認められるなど荒れた状態を呈していたことから上流からの多量の流水があつたものと推測される。溝底は北部側が一段と深くなつており、レベル差異は概ね0.60m前後を測る。遺物では上位層の黒色粘土で弥生土器(甕)、須恵器(甕・甌・片)、土師器(环・高环・甕・甌・片)、瓦器(甌)、白磁(片)を認め、下位層の灰色砂では弥生土器(高环・器台)、土師器(丸底环・甕)が出土した。

##### 2SX3 (Fig.25 · Tab.30)

調査区南部で検出し、北部は溝(2SX2)に切られる。幅15.0m以上、遺構検出面からの深さは0.22~1.09mを測り、調査区南端部で溝南岸の立上がりを確認する。土層被覆では比較的安定した粘質土が上位層を覆い、下位層で砂質土層の発達を認めたが、溝底付近の一部では乳白色の沈殿層も認められた。溝底は筋状にはしる溝状遺構やビット状遺構を認めるなどの凹凸が著しい。2SX2と同様に上流から多くの流水が繰り返されていたものと思われる。遺物では上位層の黒茶色粘土で弥生土器(甕・片)、土師器(高环・片)を認め、下位層の砂層では弥生土器(片)、土師器(片)が出土した。

### 不明遺構

2SX5 (Fig.26・Tab.33~38)

当遺構は調査区中央部で検出した溝路（2SX2及び2SX3北岸部）の下段で確認し、S-6～9で構成される。まず溝構の状況について述べる。溝路内を部にあるやや幅広の溝状遺構（S-6）は、S字状に蛇行しながら流路（2SX2）と呼ばれる位置を示すように東西方向へと走る。断面形状は緩やかなU字状を呈するものであるが、越構の軸や深さについては著しく変化がみられるなど不規則な状態である。S-7は運搬小車側に位置した溝状遺構であり、両端は溝底に延びる。溝状遺構（S-8）は東西方向に走り、東から西に向かって前傾は傾く、傾度は段々となる。S-9はこれらとの連続性を示すようより複雑な溝状遺構を呈する。堆土は移植コテで剥ぎ取らなければ長面が開いた有する、部分的に礎化した状況も観えた。この堆土の性質によるもののか、上位から強い仕力によるものなのかなど、幾々な要素がある。堆土はそのままでは剥ぎ取れることはできない。堆土を除去した溝底面では、両端から多くの小ピット状及び上戸状の痕跡を著しく認め、更に西部においては小石や礫が軽羽地盤（乳白色粘土）に対して著しく突き刺された状態も確認された。運搬レベルは一概の溝状遺構と同じく西高東低を呈する。出土遺物はS-6から堆土に引出上器（17）を認めたのみである。

### (3) 出土遺物

溝路

2SX2様出水面探査 (Fig.24・Tab.39)

#### 浮生土器

焼(1~4)

1は断面形が錐先形口縁を呈する。2は上底を呈する底面部細片で、底径6.0cmを測る。3は底径9.0cmを復元する。底部はやや吹き気味で上底を呈する。4は平底を呈した口縁部細片で底径8.0cmを復元する。底部から胴部にかけては渦曲気味に立ち上がり。

焼(5)

底面部細片で底径6.0cmを復元する。底部は平底を呈し、胴部へはタガマ目、て立ち上がり。

#### 上側器

片(6~9)

6~9は丸底杯の口縁部細片で剥れ落ちた断片のため調整不明である。6は口径12.0cmを復元し、口縁部はやや縮み上げる。7は器肉が厚く、口径は12.9cmを復元する。9は口縁部がやや内傾する。

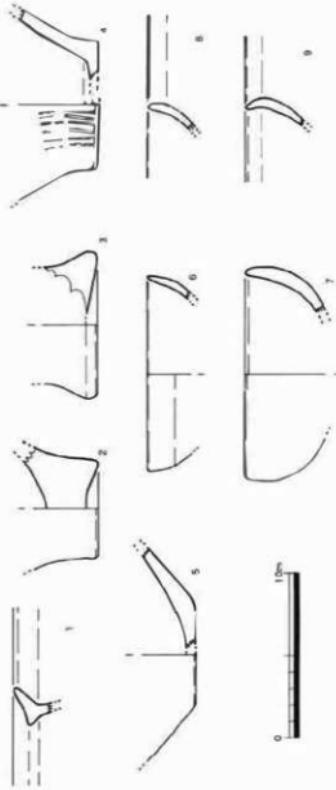


Fig.24 溝路 (2SX2様出水面探査) 出土遺物実測図 (1/3)

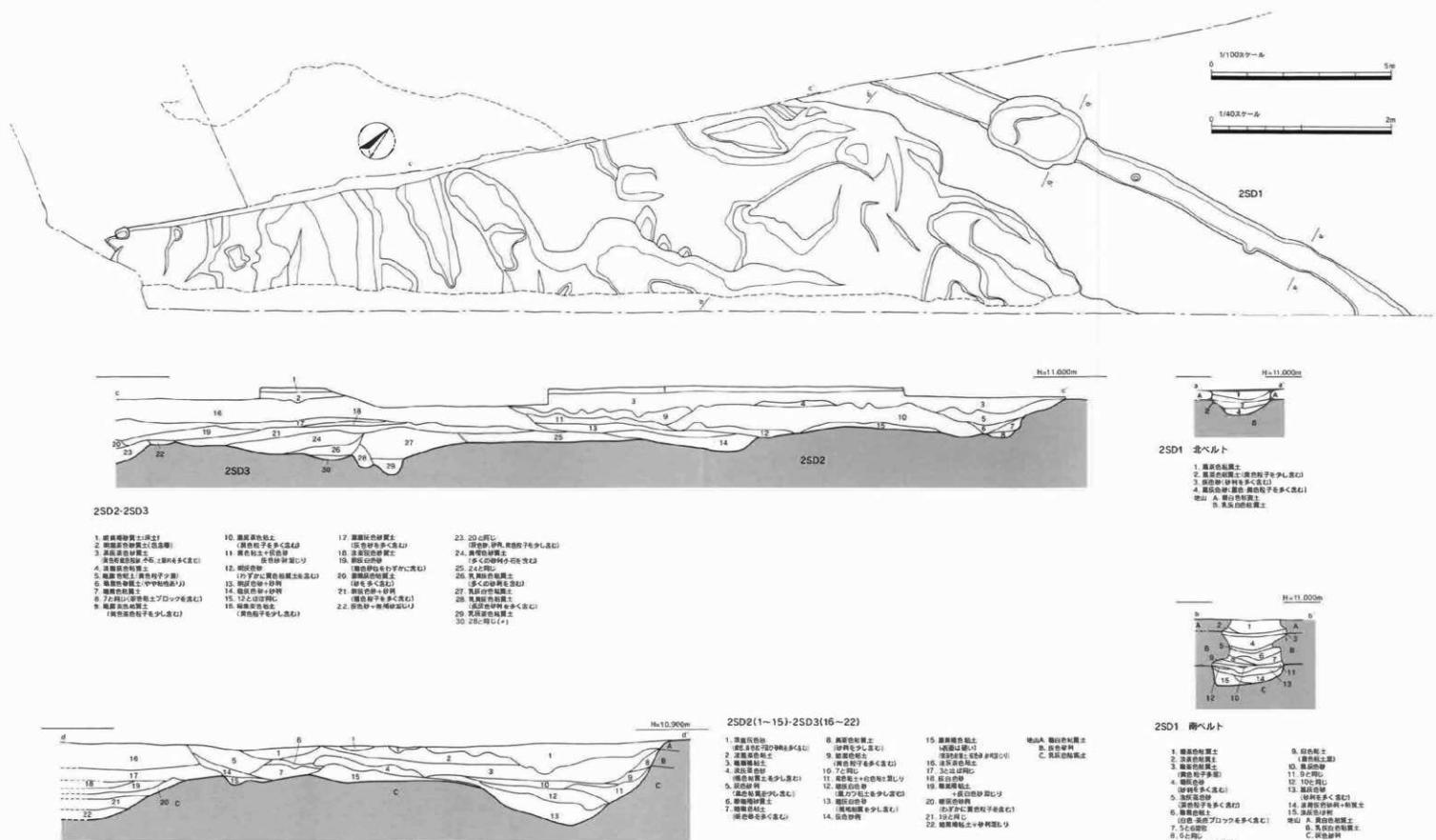


Fig.25 溝 (2SD1)、流路 (2SX2・3) 実測図 (1/40・1/100)

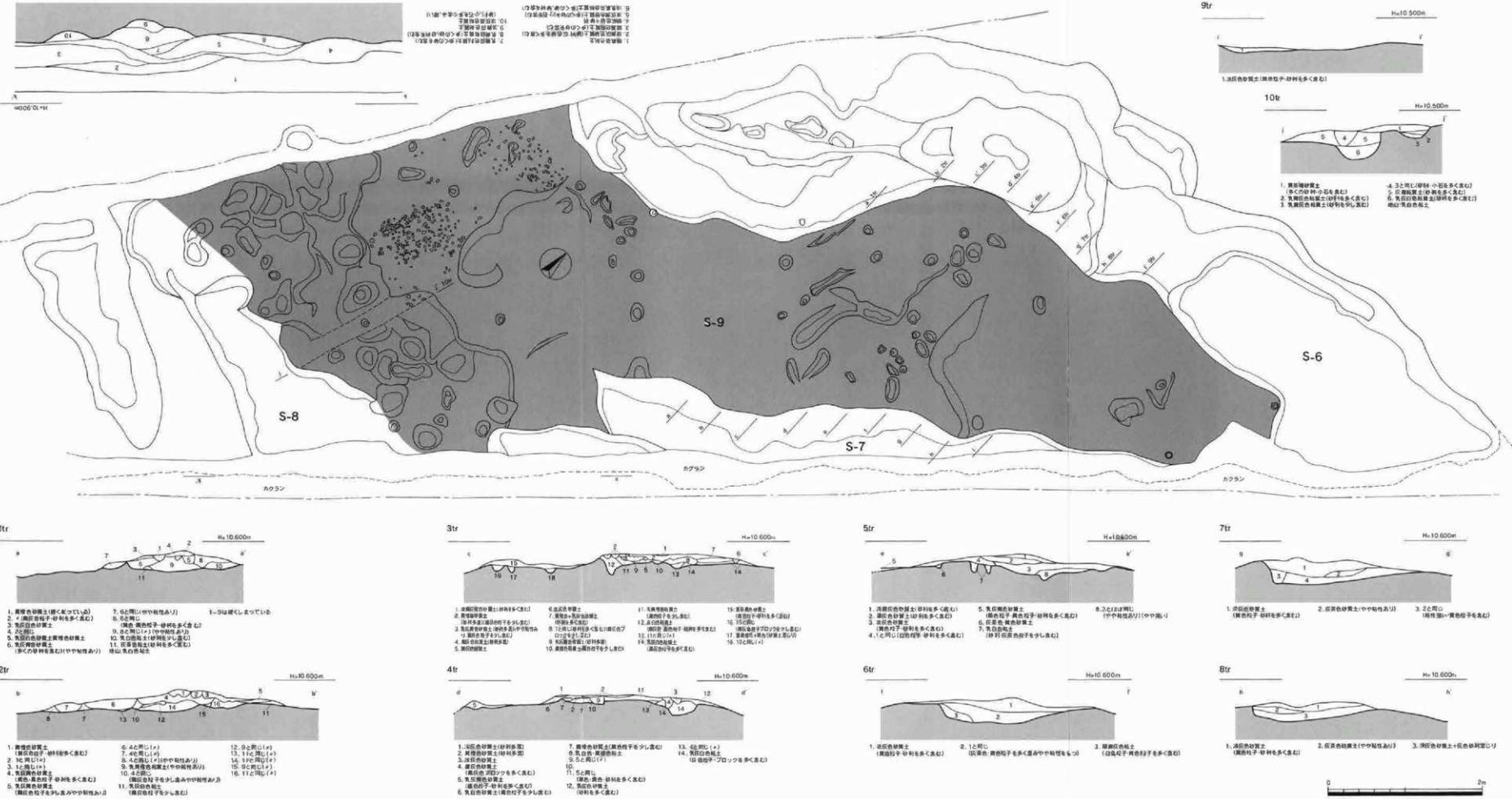


Fig.26 不明遺構 (2SX5) 実測図 (1/40)

## 2SX2黒色粘土 (Fig.27・Tab.39~41)

弥生土器

甌 (10~12) 10・11は「く字状」口縁を呈し、11は口径9.9cmを復元する。12は平底を呈する底部細片で底径10.0cmを復元する。

乳頭器

甌 (13) 底部細片で底径7.6cmを復元する。外底部は回転ヘラケズリ、内面はナデである。

甌 (14) 脚部の細片で、外面に平行叩き文、内面上位にヨコナデ、下位に同心円文を施す。

土師器

甌 (15~22) すべて丸底甌である。著しく磨耗した破片が多く、調整痕は判別できた範囲で記す。15は手捏ね土器で口径3.2cm、器高2.1cmを測る。16は口縁部の一部が歪んでおり、口径は最大で14.0cmを復元する。器肉は厚く、やや深めの甌で器高は7.1cmを測る。底部は手持ちヘラケズリ後ミガキを施す。17はやや内傾した口縁部を呈し、口径14.0cmを復元する。口縁部外側はヨコナデを施す。18はやや深みのある甌で口径14.8cm、器高6.0cmを復元する。口縁端部は僅かに内傾する。19は口径15.0cm、器高5.75cmを復元する。底部外側は手持ちヘラケズリ、口縁部外側及び内面はミガキを施す。20は厚手でやや内湾した口縁部を呈し、口径16.2cmを復元する。口縁部内外側はヨコナデ、底部外側は手持ちヘラケズリを施す。21は口径16.9cmを復元する。内面及び底部外側上位は丁寧なミガキ、口縁部外側はヨコナデ、底部外側下位は手持ちヘラケズリを施す。22はやや内傾した口縁部を呈し、口径17.1cmを復元する。

甌 (23) 口径15.4cmを復元する。口縁部は緩やかに外反し、口縁部内外側ヨコナデ、肩部外側は横方向の刷毛目、肩部内面はケズリを施す。

壺 (24~26) 24は外方へ湾曲した口縁部を呈し、内外側はミガキを施す。口径は12.0cmを復元する。25はラッパ状に立上がる口縁部を呈し、口径9.6cmを復元する。内外側はミガキを施す。26は脚部細片で脚部最大径は16.3cmを復元する。内面はケズリ、外側は刷毛目を施す。

高甌 (27~31) 27は甌部の細片で甌部は丸みを帯びる。著しく磨耗しており、調整不明。28~31は脚部破片であり、28は脚部径8.9cm、29は脚部径9.2cm、30は脚部径9.5cm、31は脚部径11.2cmを測る。何れも器面磨耗のため調整不明である。

甌 (32) 把手部はナデ、体部外側は刷毛目、内面はナデの調整を施す。

瓦器

甌 (33) 底部細片で高台径7.3cmを復元する。胎土は微砂粒を多く含み、表面は磨耗のため調整不明である。

白磁

甌 (34) 体部細片で淡灰白色の素地に淡灰白色釉を内面に施す。外側は露胎でケズリの調整。

## 2SX2灰色砂 (Fig.28・Tab.41・42)

弥生土器

甌 (35・36) 35は外方へ湾曲した口縁部を呈し、口径12.4cmを復元する。36は「く字状」を呈する口縁部破片で口径14.0cmを復元する。共に磨耗のため調整不明である。

土師器

甌 (37~42) 37~41は丸底甌である。38は口径14.4cmを復元し、口縁端部はやや肥厚する。39は口径14.5cmを復元し、底部外側は手持ちヘラケズリを施す。40は口径15.0cmを復元し、口縁部内外側はヨコナデ、体部内面は丁寧なミガキ、体部外側は手持ちヘラケズリ後一部ミガキを施す。41はやや内傾した口縁部を呈し、口径16.8cmを復元する。口縁部内外側はヨコナデ、体部内面は不定方向のナデ、体部外側は手持ちヘラケズリを施す。42は口径15.6cm、底径8.8cm、高さ4.0cmを測る。口縁部内外側及び体部外側はヨコナデ、体部内面は不定方向のナデ、底部外側は糸切り後ナデを施す。

甌 (43・44) 43は「く字状」に屈曲した口縁部を呈し、口縁部内外側はヨコナデ、体部内面はケズ

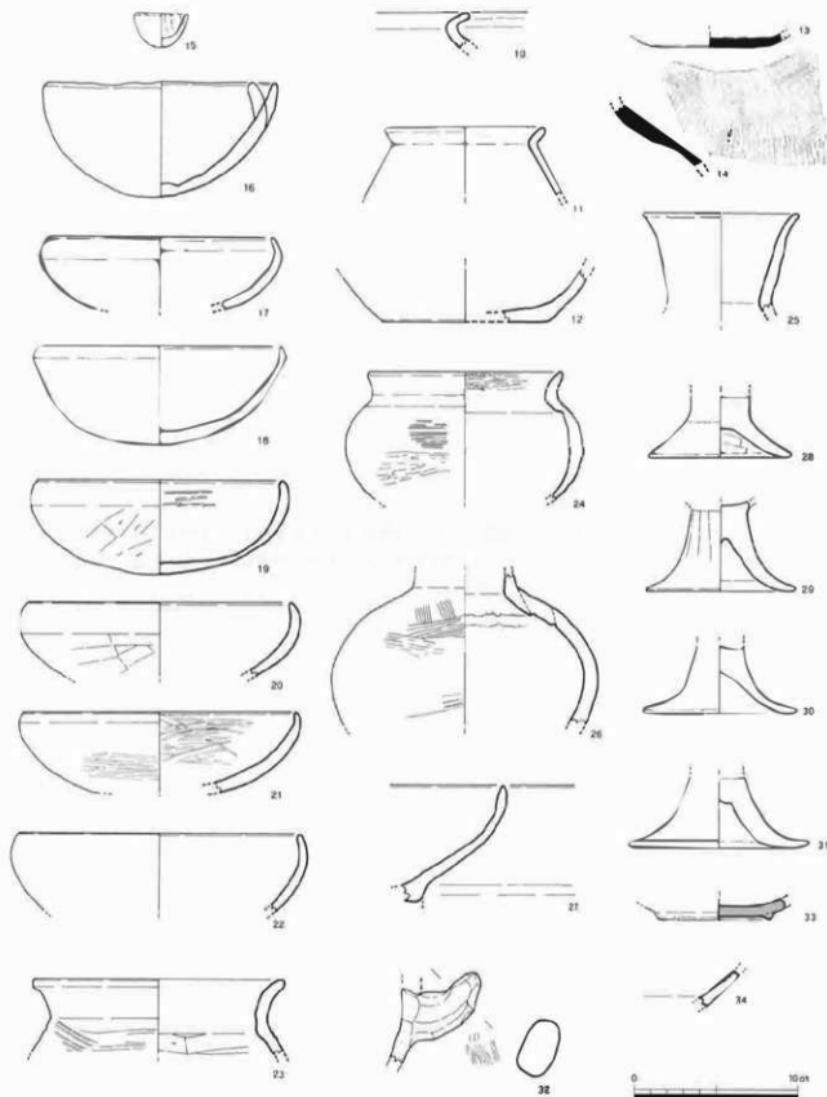


Fig.27 流路（2SX2黑色粘土）出土遺物実測図（1/3）

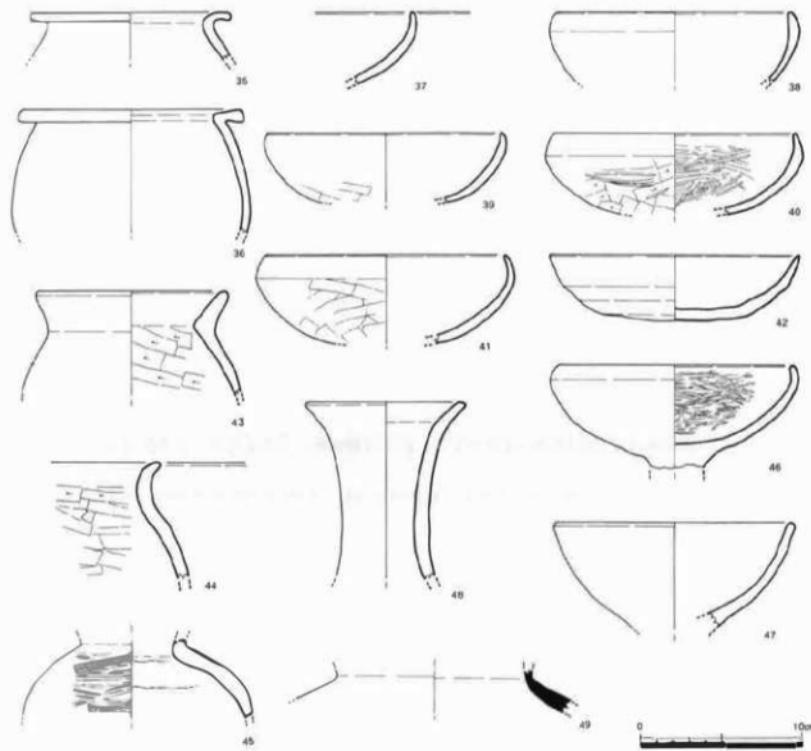


Fig.28 流路(2SX2灰色砂)出土遺物実測図(1/3)

リを施す。体部外面は磨耗のため調整不明。44は緩やかに外反する口縁部を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はケズリ、体部外面はナデの調整を施す。

壺(45) 肩部の細片で外面は横方向の刷毛目を施す。内面は粘土接合痕跡を認めるが磨耗のため調整は不明である。

高杯(46・47) 共に丸みを帯びた杯部の破片である。46は口径14.65cmを測り、内面には丁寧なミガキ痕が残る。外面は磨耗のため調整不明。47は口径15.0cmを復元する。胎土に微砂粒、石英、角閃石、雲母を含む。磨耗のため調整不明。

器台(48) 口径10.0cmを測る。磨耗のため調整不明で胎土は微砂粒、石英、角閃石を含む。

須走器

壺(49) 肩部細片で外面に自然釉がかかる。胎土は微砂粒を多く含み、色調は淡灰色を呈する。

2SX3 (Fig.29・Tab.42)

弥生土器

壺(50・51) 50は上底を呈する底部細片で底径4.4cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデを施す。51は平底を呈する。表面磨耗のため調整不明。

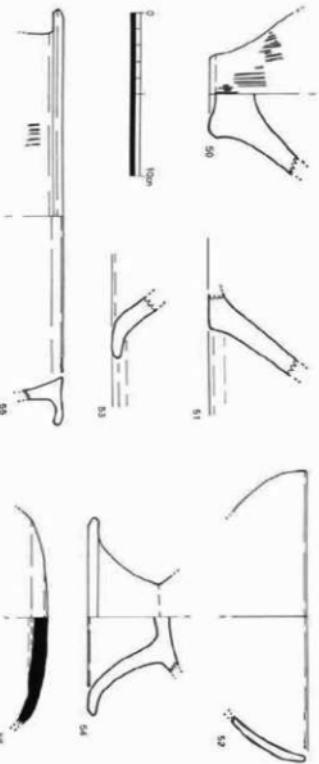


Fig.29 流路 (2SX3)、カクラン、表土出土遺物実測図 (1/3)

#### 土(陶器)

片 (52) 口縁部細口片で口径18.0cmを復元する。胎土は微砂粒、石英を含み、表面は磨耗のため調整不明である。

高杯 (53・54) 53は脚端部の刻片、胎土は微砂粒を含む。54は脚部の長さが短いタイプで脚部径は1.2-2.0cmを測る。表面磨耗のため調整不明。

#### カクラン (Fig.29・Tab.42)

#### 学生土器

瓶 (55) 口縁部細片で脚先形口縫を呈する。口径25.6cmを測る。

#### 乳頭器

瓶 (56) 天井部細片で外側は凹軸へラケズリ、内面はヨコナタデである。

#### (4) 小結

今回は狭小の調査区設定にちからむらず解り易く、流路2条などの遺構に加え、学生時代から古墳時代中世の遺物を得ることができた。

調査区北部で確認された第(2SD1)と流路(2SX2・3)は、東西方向に走るものである。調査中、付近に住む男性が現場へ立ち寄り、「雨期になるとこのあたり(現場周辺)は昔から路地記憶して、気に水没してしまうほど水が集中する場所だよ」と話されていた。当地は北部並びに南部に展開して八重丘陵に挟まれた谷部である。先の話から見てよりこの地形的的作用による影響を受けていたことが窺い知ることができ、検出された一連の排水路は地形的的作用を多く受け自然派生した遺構であると考えられる(当調査区北側にあたる蕨藪保古戸1次並びに2次C1区の調査区からも同様の第・流路を検出している)。流路(2SX2・3)下層からは5C後半を主体とする遺物を出土しており、当該層を遺構形成時期下限としておきたい。上層では瓦器、白磁等の遺物を含んでおり、埋没に至るまでは相当の期間があつたものと思われる。

流路下位より検出した2SX5は、遺構の残存状態から遺路とは関係のない別の遺構としての見方を強めて調査を進めたところであったが、遺構の機能や性質を判断することはできず今回は不明遺跡として報告するに留まった。しかし、当遺構を削除する前払道構(S-6～8)並びにこの遺構に挟まれた空画面(S-9)を含む各ノーツを同一時間の所産で意図的に構築された遺構であつたと想定すると、遺路状遺構に類似するところが認められる。2SX5と道路状遺構との接点について、少々亂暴ではあるが当遺構

を道路状遺構のバーツに当てはめた場合、「①遺構全体（S-6～9）＝切り通し、②溝状遺構（S-6～8）＝側溝、③硬化した埋土及びその空間（S-9）＝路面」と置き換えることができる。道路の認定とタイプについては山村氏著書の「大宰府辺の道路状遺構（註1）」が著名であるが、その充分条件として「1.路面と認定できる状況、切り通しにみられる道路状遺構に舗装や硬化面を伴うこと 2.切り通し、土堀（土橋）、橋梁や側溝などの関連施設を伴うこと 3.轍跡などの通行を示す痕跡を伴うもの 4.一定距離をおいて2地点以上で存在が確認できること」をあげている。当遺構はこの充分条件に対しても1及び2に関しては概ね満たされているものと考えるが、以下の2項目の内容については立証できないのが現状である。当遺構を流路が形成される段階から埋没過程に至るまでの痕跡である可能性も否定できないために道路状遺構として判断するにはより一層の条件提示が必要であると考える。今後の調査事例が期待される。

【引川文庫】

註1 山村信榮 「大宰府辺の道路状遺構」 『奈良考古学研究』6号 懸山閣（1904）

## 5. 墓数保古手遺跡 第2次調査 (C) [X]

### 1)はじめに

当遺跡は剪枝市墓数保古手に所在してます。調査区は水路新設予定地のために南北75m、東西6mと南北に幅長く、J-堤(堀川島本郷の西側)に隣接平行して位置し、標高11.3m～11.5mの低地に立地している。調査区中央には水堀 石走っているためにそれを奥に北側調査区、南側調査区と本文では表記している。平成17年6月27日より(株)福島県機械に裏土を除去を委託し調査を開始した。その際にJR沿線の隣接地のために重機が動く間、列車の安全と事故防止として監視員を(株)に委託した。また、同・堀川島によりラジコンを使用して行う航空測量をとりやめ、手測りによる平面図作成を(株)アジア航測に委託した。同年8月31日に(有)室中写真企画に委託した空中写真撮影をもって調査は終了となった。

### 2)検出遺構

#### 調査区北端で検出された岩干カーブを描きなから東西方に向る溝である。規模は幅0.6m、深さ0.2mで底面は傾やかなJ字状を呈する。土師器の断片が出土したが國化出来るレベルではなく、また時期不明である。

#### 2SD05・2SD06 (Fig.31・Pla.44)

北側調査区で検出された東西方に向る溝である。調査区東側では地山を抉んで北側の幅10mと南側の幅8mで検出したのだが、西側部分ではそれらが合流しており明確に分けることが出来なかった。北側の幅10mの方を2SD05、南側の幅8mの方を2SD06とそれぞれ遺構番号をつけたのだが上層図(Fig.31)を見ると細い砂板やシルトなどが堆積しているために自然流路であることが分かる。またそれが河口がありあつたり、堆積物を繋り越してい。○ 食地点周辺は西側に崩れて標高が低くなるために東側より流れ込むSD05、SD06を通り調査区内で合流したのだろう。また、2SD05内で幅1.5mの調査区外に延びているため標高が土壌か不明な遺構を2SD05a、幅1mの細い溝が2SD05bと割り分けして表記してある。

#### 2SD08 (Fig.31・Pla.46)

南側調査区北端で「く」字状に検出された。断約2m、検出面よりの深さ0.8mを測る。道幅内の左位がオーバーハングしており(Fig.31) 溝路であった事が伺える。遺物は土師器の断片が出土したが國化出来るレベルではなかった。

#### 土坑

#### 2SK03 (Fig.30・Pla.43)

北側調査区で検出し東側調査区外に延びていく。長さ約22.2m、検出面よりの深さが0.15mとい、土坑である。遺物は土師器の断片が出土したが國化出来るレベルではなかった。

#### 2SK04 (Fig.30・Pla.44)

北側調査区SK03より南側で検出された断約22.0m、検出面よりの深さが0.4mを測る。長方形を呈する上部であるが両側を覆瓦により削平されている。断面形態はすり鉢を呈しているが、中心部で一部下がっている。

### 2SK07 (Fig.32・Pla.46)

南側調査区の北端で検出された不定形を呈する大型の土坑である。一部は西側調査区外に延びており、深さは検出面より0.2mを測る。また、この土坑は2SD08を切っている。

### 2SK09 (Fig.32)

南側調査区で検出し東側調査区外に延びていく。長さが約2.1m、検出面よりの深さが0.5mを測る土坑である。遺物は土器壺の細片が出土したが図化出来るレベルではなかった。

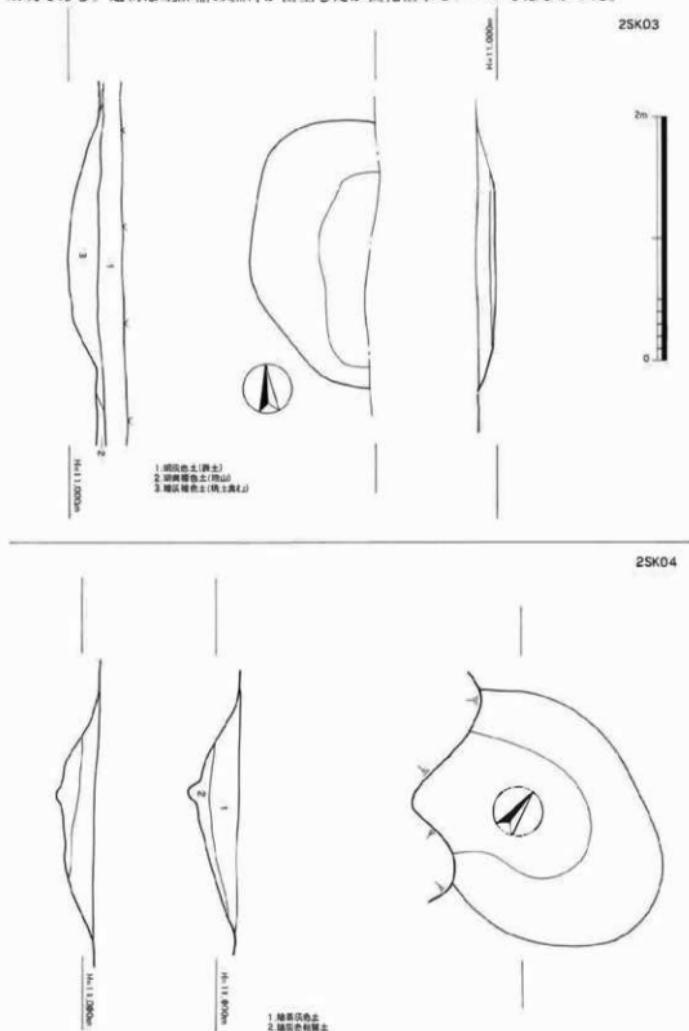
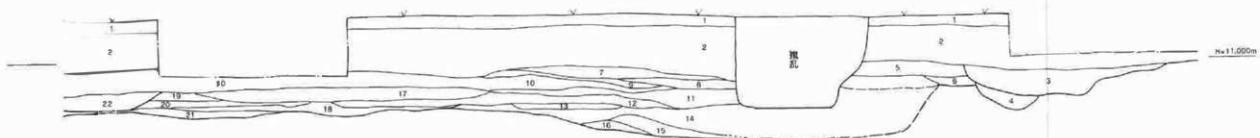
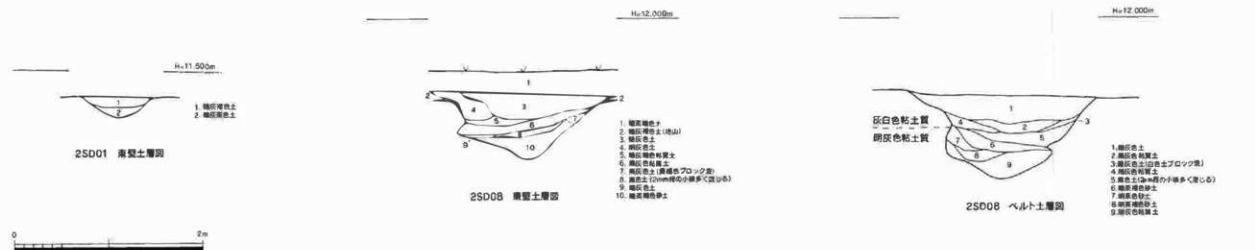
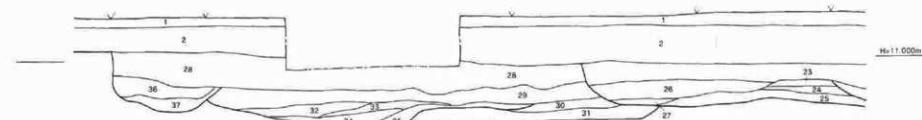


Fig.30 2SK03・2SK04 遺構実測図 (1/40)



1. 線状白色土質
2. 線状褐色土
3. 黄褐色土
4. 複合的黃土 (S-S6)
5. 線状褐色砂質土
6. 黄褐色砂質土
7. 複合的黃土
8. 複合的黃土 (粘土ブロック層)
9. 線状褐色砂質土
10. 黄褐色砂質土
11. 黄褐色复合的黃土シルトがうすく覆層にたいでさ)
12. 線状褐色土
13. 黄褐色土
14. 複合的黃土 (粘土ブロックシルトなど正面になら)
15. 黄褐色砂質土
16. 黄褐色砂質土 (粘土)
17. 黄褐色砂質土 (粘土)
18. 黄褐色砂質土 (粘土)
19. 黄褐色砂質土
20. 黄褐色砂質土 (粘土ブロック多くはじる)
21. 黄褐色砂質土
22. 黄褐色砂質土
23. 黄褐色砂質土
24. 黄褐色砂質土
25. 黄褐色砂質土 (粘土)
26. 黄褐色砂質土 (粘土)
27. 黄褐色砂質土 (粘土)
28. 黄褐色砂質土 (粘土ブロック土)
29. 黄褐色砂質土 (粘土ブロック土)
30. 黄褐色砂質土
31. 黄褐色砂質土 (粘土)
32. 黄褐色砂質土
33. 黄褐色砂質土
34. 黄褐色砂質土
35. 線状白色土質
36. 黄褐色砂質土
37. 黄褐色砂質土

2SD05 土壌図



2SD01 南壁土層図

2SD08 東壁土層図

2SD08 ベルト土層図

Fig.31 保古手C2C土層図

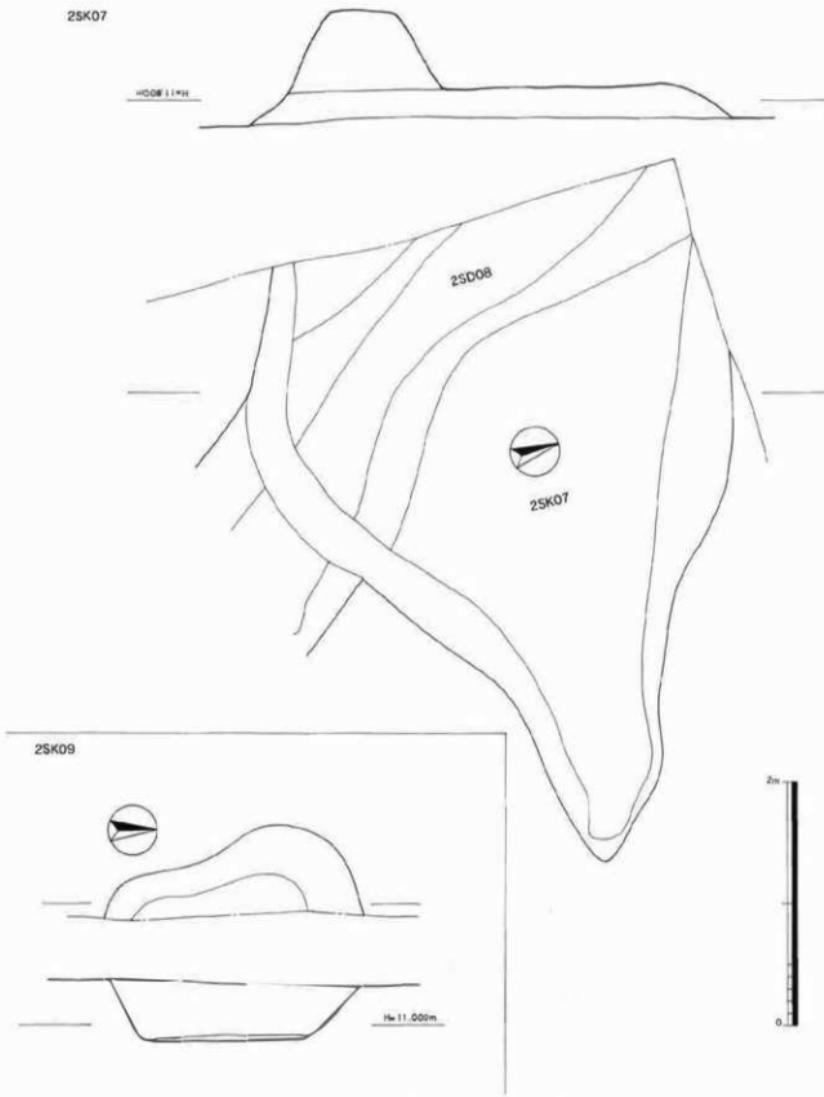


Fig.31 2SK07・2SK09遺構実測図 (1/40)

#### ピット

#### 2SP02 (付図)

2SD01を切っている幅0.3mを測る円形ピットである。出土遺物は土師器の細片が一点出土しただけであり時期などは不明である。

2SP11 (Fig.33・Pla.47)

角陶製鉢内に位置し長軸0.5m、短軸0.35m、深さは検出面より0.15mを測る。平面はやや瘤円形を呈している。邊開正面に遺物が良好な状態で出土しているが復元すると盤の口縁と高杯の脚部であった。

## 不明遺構

2SX10 (付図・Pla.48・49)

南側調査区内で遺構全体図(付図)に該線で囲まれている範囲内に細かい凹凸面があり、そこから遺物が出土したため遺構番号をつけたのだが(図)の深さは非常に浅く不定形に亘っているためにおおよそその範囲だけを破線にて図化した。

3) 出土遺物 (Fig.34・35・Pla.50・51)

2SD05 (1)

底もしくは体の底部である。外面上位に強いコナデを施し外側に隙きながら立ち上がる。2は白磁の底

2SK04 (2・3)

2は土壌器の種である。外面上位に強いコナデを施してあらひみ部分には3は光輝が施されている。

2SK07 (4~7)

4は土壌器の種と思われる。裏元による底盤径は14.0cmと大型である! 外面には細い工具を使用したと思われる回転カスリ痕が後に残る。底部切り崩しは糾りによる。5は焼である。歯先口絆を呈しているがローリングによる溝跡ひびく、SD08に帰属する遺物だと想われる。6は白磁の皿である。体部外側下半が露胎を呈している。7は稚鉢である。内外面は暗茶褐色を呈する。1単位10本の割り目を施す。

2SX10 (8・9)

8・9どちらも蛇ノ目割れぎを施し、体部外側が高台脇から下半が露胎を呈している白磁碗である。8はよりも置付け部分が幅広く、復元底径が大きいため8・9は別個体である。3

2SP11 (10・11)

10は盤である。体部は外面上に縦方向のハリ、測定、内面は斜め方向にケスリを施す。口縁部は外側に直線的に開き、全体的に器型は解く、シャープである。11は高杯の脚部である。脚部上端部は削り口ではなく成形欠陥で残存しているために杯との接合は杯の底部をソーケ、小底に施し接合したと思われる。しかし、杯部分は出土しておらず、杯との接合部2分岐部が剥離していたのだろう。

表掲 (12~18)

12~14は盤の口縁部片である。磨耗が激しく測定値は看取されない。15は盤の底部である。底部中央を窓せてあるが、磨耗が激しく、測定値看取れない。16は白磁の底盤である。高台脇から高台前面は露胎であり見込みには質人が入る。17は三足ちくは4足のアマガ? 中央が円孔してあり足の端部にはガラス張り無<sup>レ</sup>が付着する。18 (Fig.35) は削色を呈する鉛ガラス製の管瓦である。

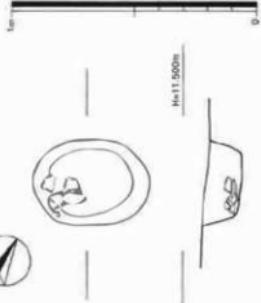


Fig.33 2SP11 出土状況 (1/20)

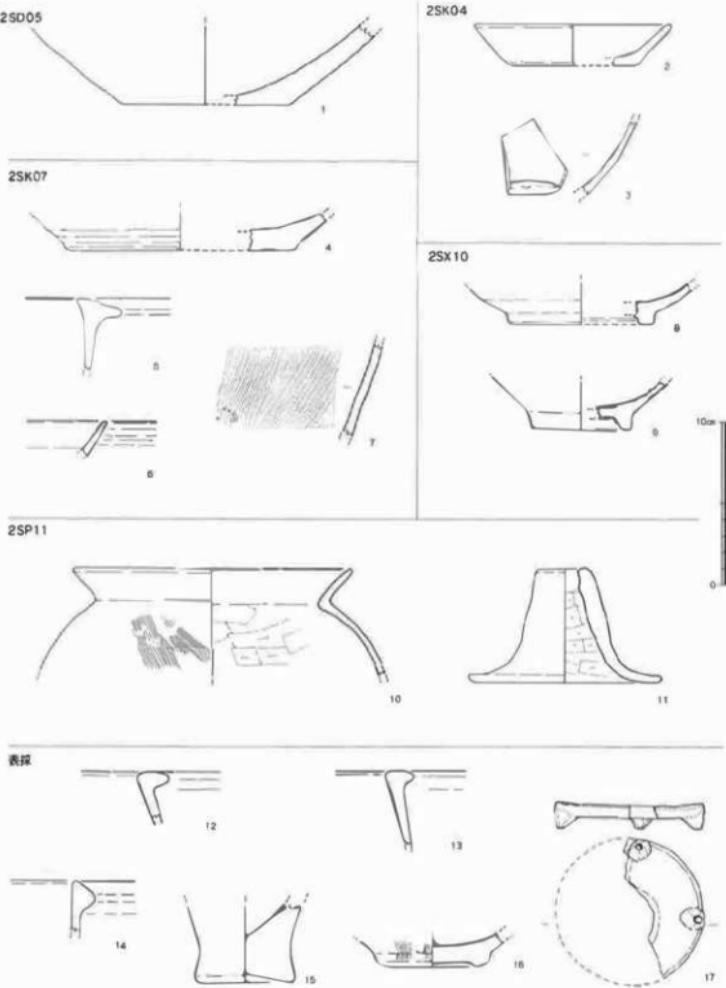


Fig. 34 藏数保古手2次C出土遺物 (1/3)

NO	種類	口径	底径	器高	残存	色調
1	土師器鉢	—	(10.0)	—	底部1/2	淡灰茶色
2	土師器杯	(12.1)	(7.5)	2.4	1/3	淡橙茶色
4	土師器杯	—	(14.0)	—	底部1/3	暗茶褐色
8	白磁碗	—	(9.0)	—	底部1/3	淡綠白色
9	白磁碗	—	(6.0)	—	底部1/2	淡灰白色
10	土師器壺	(17.0)	—	—	口縁部1/2	淡橙茶色
11	土師器高杯	—	11.8	—	脚部のみ完形	明茶色
16	白磁碗	—	(7.1)	—	底部のみ	灰白色
17	ハマ	(9.0)	1.5	1/2	—	淡灰茶色
ガラス製品	全長	幅	残存	—	色調	—
18	管玉	2.45	0.9	完形	明青色	—

\* 小片は省略 ( )内は復元による数値

Tab. 3 出土遺物一覧表

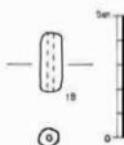


Fig. 35 表探出土遺物 (1/2)

#### (4) 小結

今回調査をした木道跡は、新幹線建設に伴い整備調査を実施した箇数保古手遺跡・1次調査区の線路を抜んだ西側に位置している。1次調査区の起きと思われる遺跡が12次調査C区でも検出されたのでそれら遺跡の対応関係を見てみると（Fig.36）、まず、1次調査区（SD01）の起きである割は、今回遺物の出土がないために遺構番号を付けていないかった南側調査区の南端を東西に走る筋に極く。この溝も丘陵に沿って走っているためにSD01と状況が同じである。2SD08は第1次調査区西面を見るとSD10、SD15どちらかに施してあるものと思われるのだが、遺物の出土状況、土壌の堆積状況、オーバーハンプティングの痕跡が明らかSD15に該当するとと思われる。古墳時代の遺物を多く含んだ自然流路であつたSD10は2次調査区では検出しなかつたためにそのまま縫隙の下を「他」に括けられたのだろう。また、2SD05、2SD06の自然流路は1次調査区の北側に縫隙で限んだ範囲に該当するものと思われる。この縫隙はSD15と埋没土色が同じであり自然流路と判断し木標のまま範囲だけをおさえた箇所である。1次調査区では谷地形の一一番低い場所にあたる。

今回の調査では遺物層が少なかったが、表土ながら管も出土しているし、1次調査では透かしの入る高杯の割合が出土している。このことから八女丘陵の高い位置からかなりの水量を伴って谷に流れていたものと思われる。

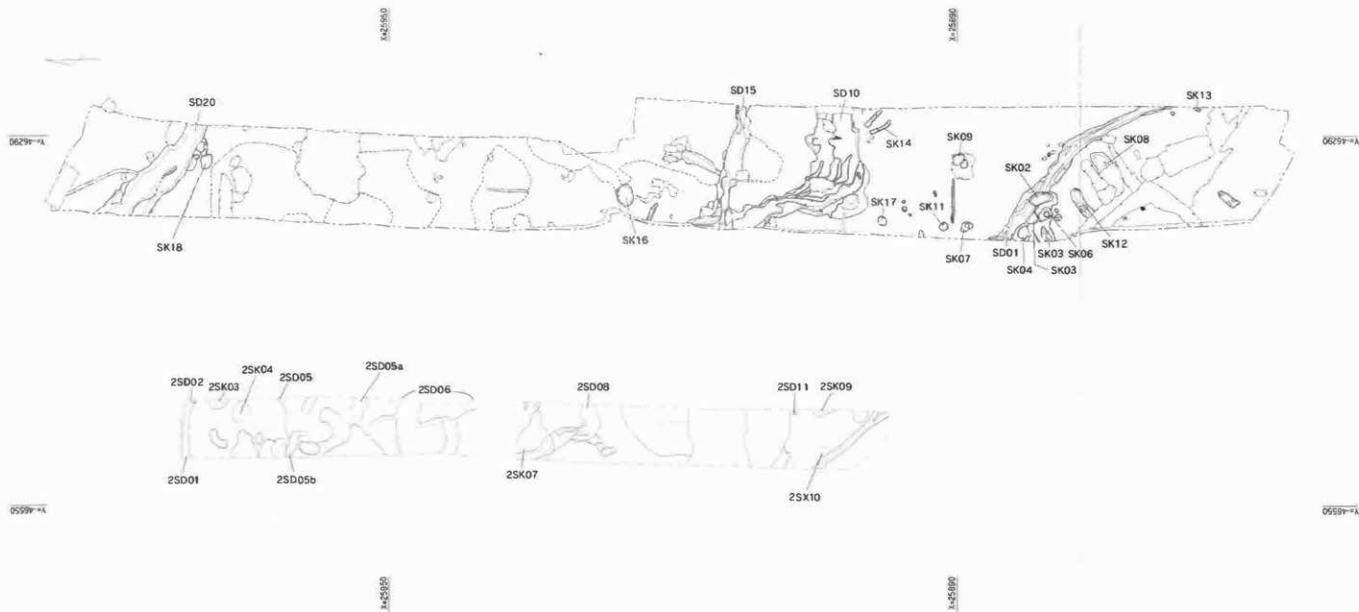


Fig.36 藏数保古手1次、2次遺構配置図 (1/400)

## 6. 織敷三郎丸遺跡 第1次調査

### (1)はじめに

当遺跡は筑後市大字織敷字三郎丸404-2・408に所在する。当調査区の北端は標高9.1m前後、南端は8.8m前後と徐々、傾斜へ向かって下がっています。当地は東方より八手折に広がるハ女丘陵南斜面にあたりる谷筋に近い場所に位置する。筑後北部地域は筑後藩領事業（古い手荷成四）筑後・北部地区平成17年度工事に係る発掘調査であり、斬伐された木路によって破壊を受ける約661mを調査対象範囲として発掘調査を実施し、小林男爵が担当した。

調査区は南北方向に細長く設定した。発掘調査は、平成17年8月30日から同年9月16日の間実施し、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構揭露・洗削作業・写真撮影を行った。重慶による「ぞよ割ぎ」（右）福島飛機へ、航空測量係務はアシカ航機（株）へ委託し、整理作業から報告書作成に至るまでの作業は文化財監理室で監修を行った。調査の結果、滑等の遺構、井戸等の遺跡（井戸歩行船跡？）が確認され、出土遺物では弥生土器・漆器・土師器・土器・土器等を得た。以下は、発掘調査で確認された主要な遺構と遺物について報告する。

### (2) 條出遺構

#### 溝 1SD1 (Fig.37・Tab.53)

調査区北端で検出した東西溝であり、長さ4.30m、幅0.53～0.87m、深さ0.15mを測る。溝の断面形状は頸ね松やかなU字状を呈し、溝の北岸の一部が突出してテラス状を呈する。上層に淡灰茶色土、下層に暗灰茶色砂質土が堆積することから、<sup>①</sup>魚池底水を作っていたものと思われる。出土遺物は土器器（小皿）を認めており、中世に比定される。

#### 1SD2 (Fig.37・Tab.53)

調査区南端で検出した東西溝である。溝の断面形はV字状を呈し、長さ4.43m、幅0.70～1.47m、深さ0.35mを測る。溝「物」の両岸に多くのテラスを呈す。上層は東高西低で0.1mの差異を生じる。底は赤茶色砂質土を基調とする舞土が厚く堆積して、<sup>②</sup>一定の底水層があつたものと思われる。出土遺物は弥生土器（片）、須恵器（体）を認めており、中世期の溝であつたと考えられる。

#### 1SD3 (Fig.37・Tab.54)

調査区南端で検出した斜北溝で、両方へ向かって落ち込む。調査区南端部の落ち込みは複数段階で形成され、斜面は複数段階で形成され、斜面は複数段階で形成される。長さ6.50m、幅0.55～0.75m、深さ0.08mを測り、埋土は淡灰茶色砂質土である。出土遺物に思まれておらず、陶片に強生（毛器片）を認めたのみで埋没時期については不明である。

#### 不明遺構 (付図 Tab.54)

今回、不明遺構とした小ビット群は調査区北端で確認された。小ビットの径は10～15cm程度であり、形状は桶円形鉢・不規円形鉢・著しいもののや平坦であるなど規則性に欠ける。地山である乳白色～褐色にては黒褐色粘土が塊状に混在した粗土を基調とするが土壤によつて変化したものもある。群集となつた範囲では小ビットが横ね北端～南端間に密集して筋状を呈しているのがある。<sup>③</sup>一定の規則性があつたものと想定される。小ビット群からは土器器（土器片）の遺物が出土しており、近世の所産であると思われる。

### (3) 出土遺物

#### 溝 1SD2 (Fig.38・Tab.55)

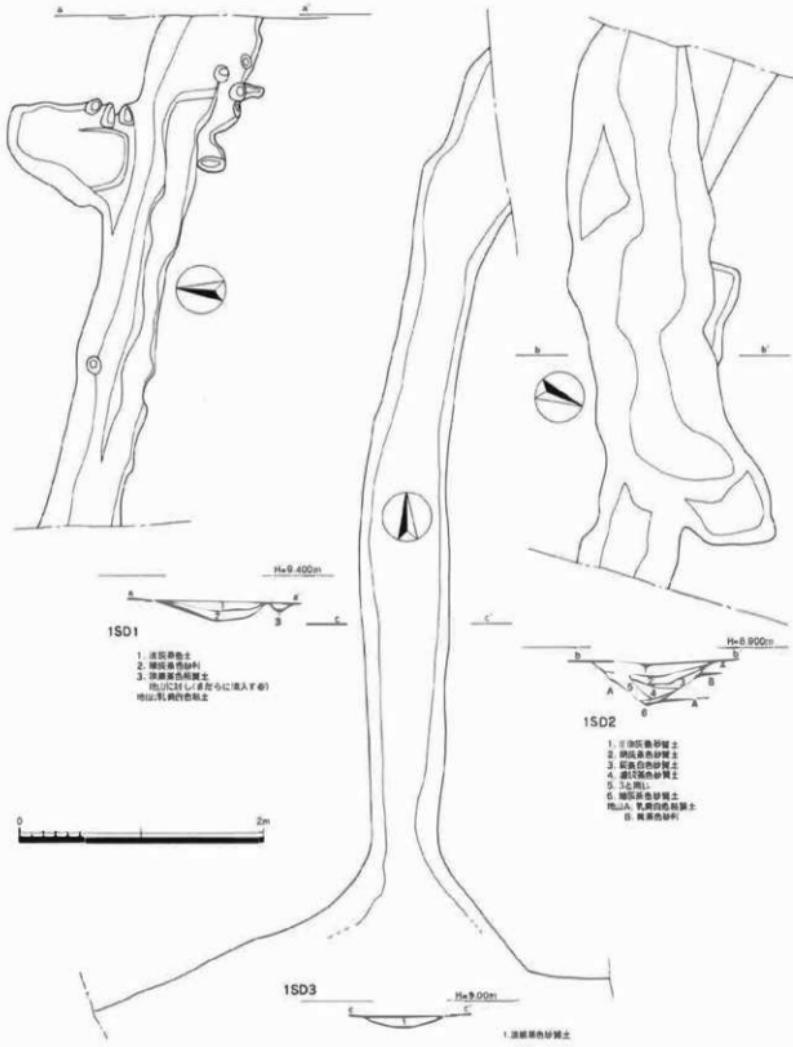


Fig.37 溝 (1SD1~3) 實測図 (1/40)

須志器

鉢 (1) 玉縞状を呈した口縁部細片である。焼成不良で胎土に微砂粒・石英を含み、色調は淡茶灰色を呈する。

不明遺構 (Fig.38 · Tab.55)

#### 土師器

上端 (2・3) 瓦に口縁部翻片で玉縁状口縁を有する。3は口縁端部から外側にかけて煤が付着する。

#### 表土 (Fig.3B・Tab.55)

##### 白磁

(4) 歪管翻片で高台径7.0cmを復元する。淡灰白色の素地に淡灰白色釉を内面及び外前に施すか高台部は墨釉である。高台部は削り出しが浅く、器肉も厚く、火孚附屬件IV類に属するものと思われる。

#### (4) 小結

今回の調査で検出された遺構は、普及び不規則構であり、僅かながら古代からの出土遺物を得られたことは成果であった。

先述したように崩 (ISD)・2) は中世に比定される東西崩であり、何れも理上に隙を含む急速崩が難えたことから水路として機能していた可能性が考えられる。また、調査区南端部で検出された谷込込みは概数長段町遺跡で確認された田河川解と想定され、この谷込込みに対するISD3)についても排水水を作う水路として機能していたと思われる。なお、ISD2)は断面形がV字状を呈するところから区画崩としての可能性も考えられるので追記しておきたい。

調査区北部で検出した不規則構は、径10~15cm程度を測る小ビットが研集する遺構である。本文中でも報告したことおり、併集となった範囲内においては筒状に集中している箇所があるなど一定の規則性が認められ、遺崩の崩壊や形狀・遺構保存状態等から想像すると水田の開墾や耕作時の際に牛や馬に蹴などを引きつける一連の作業によって生じた歩行崩跡と推測され、当地が耕作地として土地利用をされていたものと解きられる。牛馬等歩行崩跡については、昨年度実施した熊野宮ノ後遺跡においても確認されている。

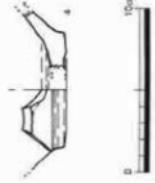


Fig.3B 出土遺物調査図 (1/3)

Fig.3B 出土遺物調査図 (1/3)

## 7. 岩数長歴遺跡 第1次調査 (A区)

### (1)はじめに

当遺跡は筑後市祇園町に所在しており、標高10.9mの低地に立地している。調査区は水路新設予定地のため南北40m、東西5m及び南北3.5m、東西38mの「L」字に設定し、表土を除去を(4)船島重機に委託し、調査を開始した。10月20日の空中写真撮影器を(4)空中写真企画に委託し、10月21日に(株)アジア航測に委託した航空測量をもって測量は終了となつた。尚、本調査区は河比留七期が担当し、西側に位置している岩数長歴町遺跡第1次調査区を小林勇介が担当した。

### 2) 棚出遺構

#### 河川跡

1SX01 (Fig.40・Pla.56)  
 この遺構は「L」字状調査区の南北に長い調査区北側で広く検出された遺構である。しかし、明らかな sondage上の違う部分が確認されたために1SX01を細分し1SX01a、1SX01bとした。1SX01aは幅1.25mの蛇行しながら東西方向に走る溝である。1SX01bは幅8mの東西に走る溝である。これらはすべて1SX01内に重複しており、また、1SX01を河川と判断した理由としては検出幅が4.5mと幅広く、西側の中盤状に地山が残っている範囲を含めると17mを測る。また、幅広のために「T」字状にトレーンを入れ削序を観察する上砂や砂利、粗い砂が互層に堆積しているために河川跡と判断し完層はしなかつた。そのために未層の部分は破線で表記している。B区で検出されたこの河川跡の動きはSX01である。

#### 自然溝路

1SD02 (Fig.39・40・Pla.57・58)

1SX01の南側で検出した幅4mの東西に走る溝路である。この溝路を切って竹製排水を検出した (Fig.39)。この溝は昭和の前半代に水田の排水施設として作られたもので調査区の中で数本確認された。この1SD02もB区の1SD02として検出されている。

#### 土坑

1SK03 (付図)

1SK01を切っている長軸1.0m、短軸0.5m、深さ0.04mを測る横円形の浅い土坑である。

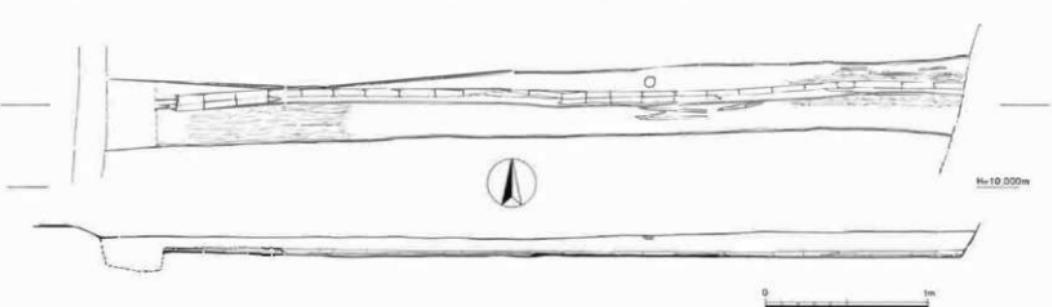
#### 溝

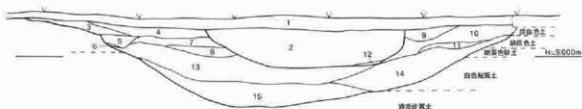
1SD04 (付図)

東西に長い調査区で検出された深い溝状遺構である。深いため途中で切れている箇所もあるが、東西方向に走っており屈曲し北側の調査区外に抜けで行く。

#### 出土物 (Fig.41・Pla.60)

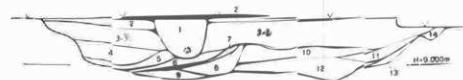
1～4は1SD02出土である。1は縦の口縫部で滑耗が激しく調整板は不明である。2は焼もしくは外の口縫部である。3は厚もしくは焼の底部である。4は蓋の脚部であり三角形の突端が貼り付けている。





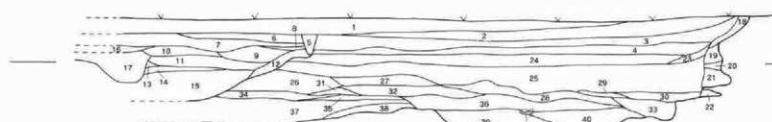
SX01 西壁土層図

1. 開拓地内土
2. 塩化物の含水耕土
3. 塩化物の含水耕土
4. 塩化物の含水耕土
5. 塩化物の含水耕土
6. 塩化物の含水耕土
7. 塩化物の含水耕土
8. 塩化物の含水耕土(砂質が細かい)
9. 塩化物の含水耕土
10. 塩化物の含水耕土
11. 塩化物の含水耕土
12. 塩化物の含水耕土(アクリル)
13. 塩化物の含水耕土
14. 塩化物の含水耕土(シート+粘土+砂質が細かく互層に重なっている)
15. 塩化物の含水耕土
16. 塩化物の含水耕土
17. 塩化物の含水耕土



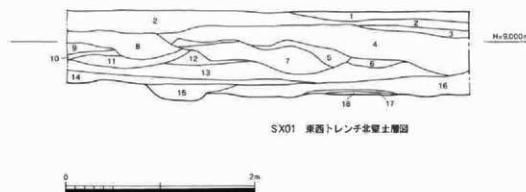
SX02 西壁土層図

1. 塩化物の含水耕土(ワッカヨリの間隔)
2. 塩化物の含水耕土(1mm~3mm程度の小孔が多く入る)
3. → 塩化物の含水耕土(1mm~3mm程度の小孔多く入る)
4. 塩化物の含水耕土
5. 塩化物の含水耕土(薄い砂質を多く含む)
6. 塩化物の含水耕土
7. 塩化物の含水耕土
8. 塩化物の含水耕土(砂質が細かい)
9. 塩化物の含水耕土
10. 塩化物の含水耕土(砂質が細かい)
11. 塩化物の含水耕土(シート+粘土が多く重じて)
12. 塩化物の含水耕土
13. 塩化物の含水耕土



SX01 南北トレンド東壁土層図

1. 剥離褐色土
2. 剥離褐色土
3. 剥離褐色土
4. 剥離褐色土
5. 剥離褐色土
6. 剥離褐色土
7. 剥離褐色土
8. 剥離褐色土
9. 剥離褐色土
10. 剥離褐色土(重い)
11. 剥離褐色土(重い)
12. 剥離褐色土
13. 剥離褐色土
14. 剥離褐色土(薄い)
15. 剥離褐色土(薄い)
16. 剥離褐色土
17. 剥離褐色土
18. 剥離褐色土
19. 剥離褐色土
20. 剥離褐色土
21. 剥離褐色土(重い)・軽質漂石(少)
22. 剥離褐色土
23. 剥離褐色土
24. 剥離褐色土
25. 剥離褐色土
26. 剥離褐色土
27. 剥離褐色土
28. 剥離褐色土(重い)・軽質漂石(少)
29. 剥離褐色土
30. 剥離褐色土
31. 剥離褐色土
32. 剥離褐色土(重い)
33. 剥離褐色土(重い)
34. 剥離褐色土(重い)
35. 剥離褐色土(重い)
36. 剥離褐色土(重い)
37. 剥離褐色土(重い)・軽質漂石(少)
38. 剥離褐色土(重い)
39. 剥離褐色土
40. 剥離褐色土(重い)・軽質漂石(少)



1. 剥離褐色土(後輪化マレンゲ帶)
2. 剥離褐色土
3. 剥離褐色土
4. 剥離褐色土
5. 剥離褐色土
6. 剥離褐色土
7. 剥離褐色土(重い)
8. 剥離褐色土
9. 剥離褐色土
10. 剥離褐色土
11. 剥離褐色土(重い)
12. 剥離褐色土
13. 剥離褐色土
14. 剥離褐色土
15. 剥離褐色土(重い)
16. 剥離褐色土(重い)・軽質漂石(少)
17. 剥離褐色土

Fig.40 長畠町A区 土層図

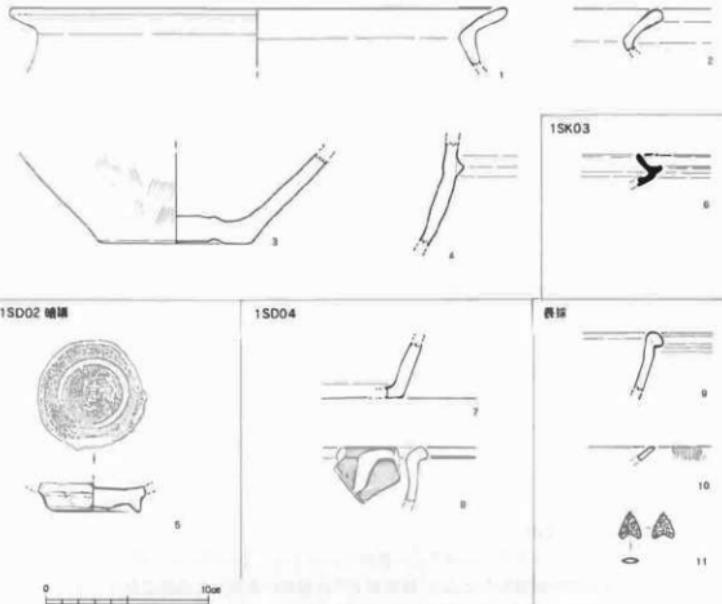


Fig. 41 藏数長畠町 A 区出土遺物 (1/3)

NO	種類	口径	底径	器高	残存	胎土色調	釉調
1	土師器裏	(30.6)	—	—	口縁部1/4	淡灰茶色	
2	土師器裏	—	—	—	口縁部1/5	淡棕茶色	
3	土師器鉢	—	(9.5)	—	底部1/2	暗茶褐色	
4	土師器裏	—	—	—	底部1/3	淡灰茶色	
5	青磁碗	—	5.9	—	底部のみ	灰白色	明緑色
6	須恵器杯身	—	—	—	口縁部1/5	明灰色	
7	陶器不明	—	—	—	底部1/4	赤褐色	
8	陶器鉢	—	—	—	口縁部1/5	明灰色	黄緑色
9	陶器鉢	—	—	—	口縁部1/5	暗灰色	黒褐色
10	紅皿	—	—	—	口縁部1/4	白色	白色
石 製品		全長	幅	残存	材質		
11	石鏡	1.65	1.4	完形	黒曜石		

※( )内は複元による数値

Tab.4 出土遺物一覧表

いる。5は1SD02竹製削器から出土した青磁碗である。見込み部分は釉剥ぎを施し無釉である。また、同じく見込みには文様を描き、その内側に「諫」の字を入れる。6は1SK03出土の須恵器の杯身である。焼成が悪く明灰色を呈している。7・8は1SK04から出土し、7は陶器の不明品で内面に若干釉が付着する。8は陶器の鉢だと思われる。灰釉を基調とし白釉を掛け流す。9～11は表探である。9は褐釉を施した陶器鉢で、10は紅皿、11は石鏡である。

## (4) 小結

今回の調査ではA区、B区とも一連の遺構が検出している。それら一連の遺構は自然流路や河川跡であるのだが両調査区だけではなく、この周辺は流路が多くある。また、その埋没年代も中世まで下るものもあり生活痕と思われる遺構は検出されていない。

## 8. 嵩数長歟町遺跡 第1次調査 (B区)

### (1)はじめに

当遺跡は筑後市大字嵩數字長歟町219、220に所在する。東方より八手状に広がる八女丘陵の谷部にあたり、標高は9~10m位を測る。筑後北部地区駐営は場整備事業(住い・手育成型)筑後北部地区平成17年度工事に係る発掘調査であり、新設される水路によって破壊を受ける約661m<sup>2</sup>を調査対象範囲として発掘調査を実施した。調査区は同小字内において2箇所を設置することとなり便宜上、東側調査区をA区、西側調査区をB区と称し、A区は阿比留土器、B区は小林勇作が調査を担当した。

B区は、南北方向に細長い調査区となり、発掘調査は平成17年9月5日から同年10月31日の約1ヶ月間実施した。この間、考古学的手法による表土剥ぎ、遺構換出、遺構掘削、実測作業、写真撮影を行い、整理作業から報告書作成に至までの作業は文化財整理室で随時行った。なお、重機による表土剥ぎは(有)福島重機へ、航空測量業務はアジア航測(株)へ委託した。調査の結果、溝等の遺構が確認され、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器、石器等の出土遺物を得ることができた。以下は、発掘調査で確認された主要な遺構と遺物について報告する。

### (2) 検出遺構

#### 河川跡

##### 1SX1 (Fig.42・Tab.62~64)

当遺構は調査区の北部から中央部にかけて広い範囲で検出した。遺構検出後、調査区に沿って確認のためのサブトレーンチを西側に設置したところ、検出面下では複雑に堆積した流路であることが判明した。そこで、調査はトレーンチ幅を拡張して土層観察を主として行い、遺構検出面から約1.6m程掘り下げたところで地山と思われる裸層を確認した。調査区東側壁で土層を確認したところ尚ほ少なくとも6条以上が存在していたことがわかった。上位層では黒茶色粘質土が厚く堆積し、比較的安定した状態であったが、下位層では砂や砂利、砂質土が激しく入り乱れ、混在した状態であったことから河川の氾濫源であったことが推測される。出土遺物は摩滅した縄文土器(片)、染付(片)、石器(削片)等を僅少量認めたのみである。

#### 流路

##### 1SD2 (Fig.43・Tab.65・66)

八女丘陵北袖部の範にあたる調査区南部で検出された流路であり、丘陵に沿うように南東-北西に方向をとるものである。流路は蛇行した状態で検出され、断面形は概ね緩やかなU字状を呈する。溝底部は溝筋に沿って溝状に乱れており、部分的にピット状の凹凸痕を認める。上位層では安定した黒茶色粘質土が形成し、下位層では砂や砂利を多く含む砂層が発達していたことから相当な流水量を伴った流路であったと考えられる。南岸西よりの溝底では自然流水を認め、遺物は弥生土器(甌、壺、片)、土師器(小皿、壺、甌、片)、瓦器(甌)、石器(石包丁・砥石)等を出土した。

### (3)出土遺物

#### 河川跡

##### 1SX1 (Fig.44・Tab.67)

#### 縄文土器

片 (1) 脱土に1~2mm程度の砂粒及び石英、金雲母を含む。風化が著しくわかりにくいか、僅かながら外面に貝殻条痕を認める。

#### 染付

皿 (2) 底部細片で高台径7.0cmを復元する。淡灰白色の素地に青みがかった淡灰白色釉を豊付け以外に施釉する。

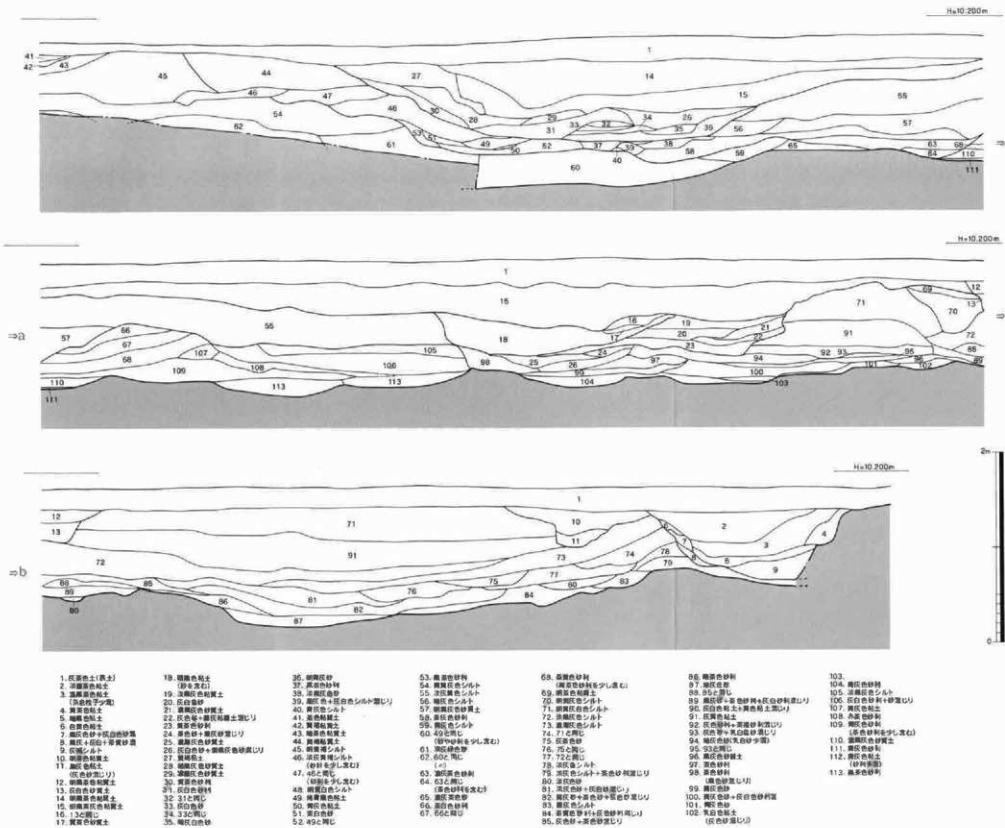
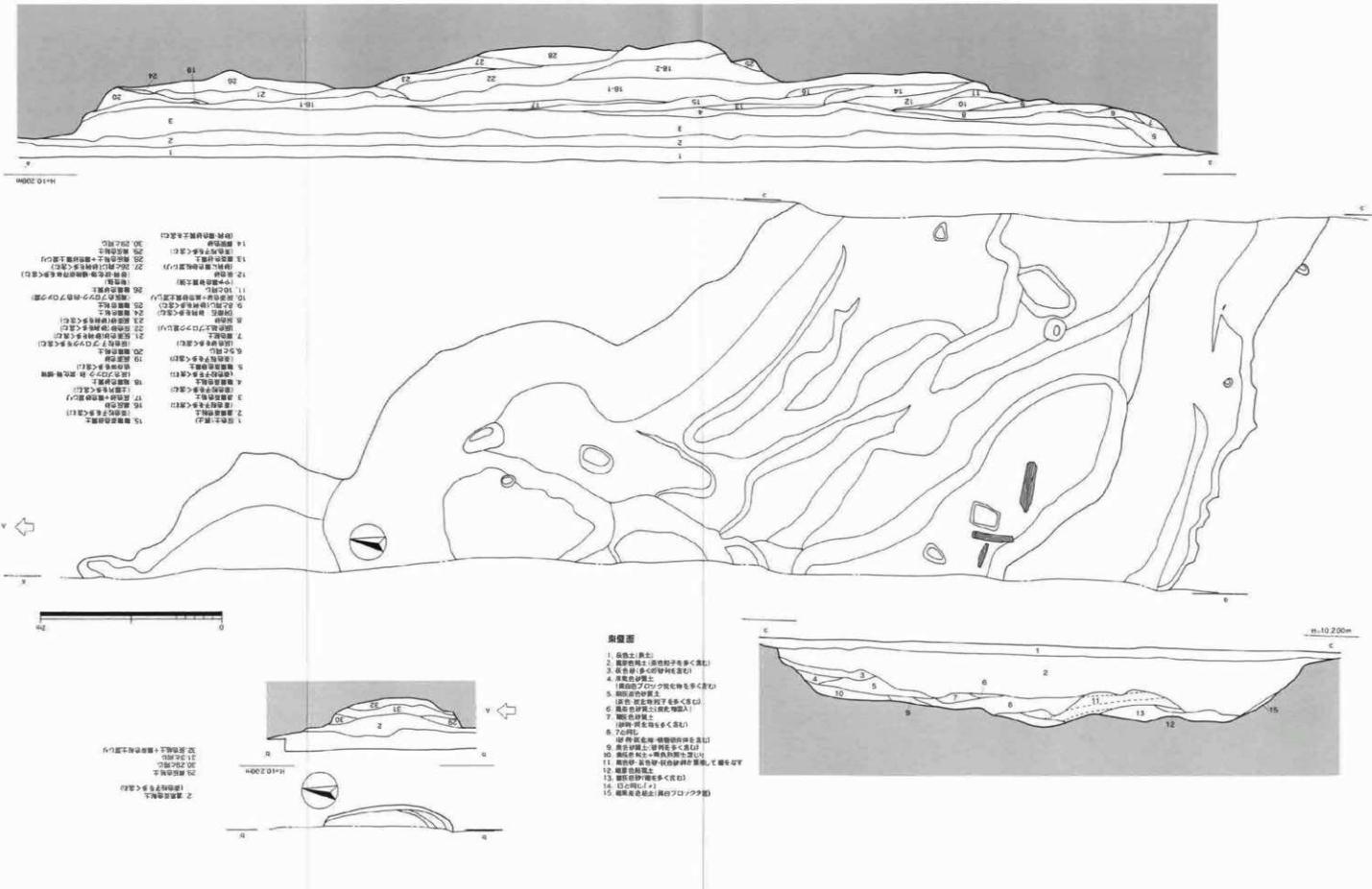


Fig.42 河川跡 (1SX1) 実測図 (1/40)

Fig. 43 路路 (1SD2) 實測圖 (1/40)



流路

1SD2 (砂利層) (Fig.44 · Tab.67 · 68)

弥生土器

図 (3~7) 3は「逆L字状」から「く字状」へと移行する過渡的様相を呈した口縁部の形状を示す。

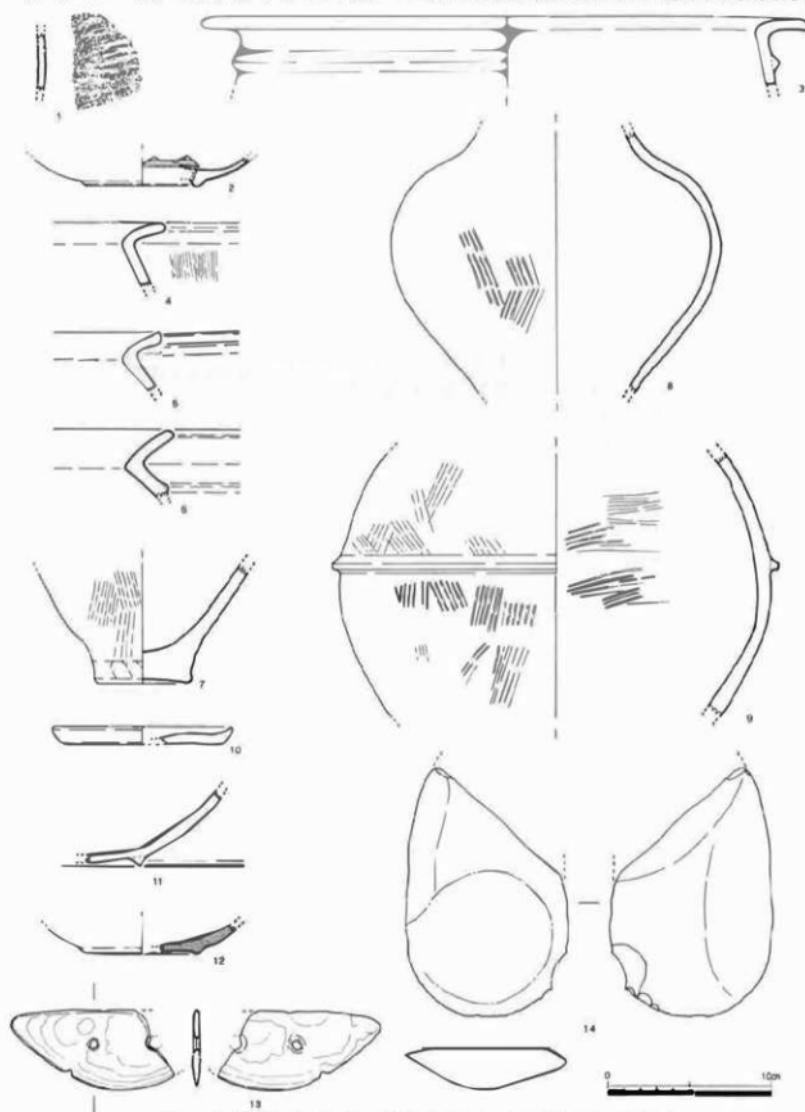
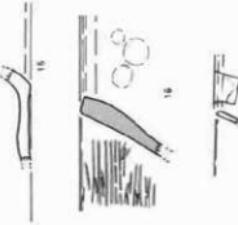


Fig.44 河川跡 (1SX1) · 流路 (1SD2) 出土遺物実測図 (1/3)



石器 (10) 口径 11.2cm、底径 9.4cm、高さ 1.1cm を復元する。表面は磨光のため調整不明である。外底は糸切りか?

土師器

石器 (11) 表面磨耗のため調整不明である。底部は微砂粒を含む。

瓦器

石器 (12) 斧溝細片で高台径 7.0cm を復元する。表面は著しく磨耗しており、調査は不明である。

石器

石器 (13) 外溝刃半月形を呈した石包丁であり、石材は片岩製である。刃部は円形2孔を施す。長さ 4.7cm、幅 10.0cm、厚さ 0.4cm を測る。著しく風化している。

石器

石器 (14) 石材は砂岩製で、表面下半を砥面として使用している。現行の大きさ 15.25cm、幅 9.9cm、厚さ 2.55cm を測る。

#### 包 嵌 (Fig. 45~Tab. 68)

土師器

石器 (15) 底部翻削で底部外面は糸切りである。底土は微砂粒及び石英を含む。

瓦質土器

火器 (16) やや肥厚した口縁部を呈する。端部はヨコナデ、外面は指押さえ、内面は横方向の削毛目を施す。

石器

碗 (17) 口縁部細片で外面に透弁を施す。淡茶灰色の基地に液灰白色釉を内外面に施釉するが、高台内は露胎である。大字前驅甲 N 類。

白磁

碗 (18) 底部細片で高台径 5.4cm を測る。淡茶灰色の基地に液灰白色釉を内外面に施釉するが、高台内は露胎である。

#### (4) 小結

当地は八手浜に広がる八女街道に挟まれた谷底あたり、調査区で検出された河川跡 (2SX1) は、その地形的制約を受けて生じた自然河川と思われる。土削周辺では多くの砂や砂利を含む砂層と粘土層が重複しあった状態を呈していたことが想定される。堆積からは古代の遺物を伴うのみで廃棄場河川の氾濫に遭遇していたことが想定される。なお、当調査区の北側にある郡賀三郎丸遺跡調査区南端部では河川の北岸を確認し、更に当直勝に隣接する A1K では同一と思われる ISX が検出されている。

一方、調査区南部、丘陵北東部の麓に位置する流路 (1SD2) は、丘陵部辺鄙に沿うように検出された。当群は、A1K で検出された 1SD2 の延長と思われ、河川跡 (2SX1) から派生した自然流路と推測される。出土遺物から中世の所産であるとわたり、興波時期は属ね 13世紀代と考えられる。

## IV. 考察

### ・各遺跡の概要

今回は8ヶ所での調査を行い、各遺跡の成果について概要をまとめ今後の課題について考察する。熊野伊勢道筋は今回の調査の中で唯一、熊野伊勢地区での調査である。地形的には南北の丘陵地帯に挟まれた軒下での調査であり、溝、溜まり状遺構など流水により形成された遺構が検出され、遺物も弥生時代から中世までと幅広い。熊野山ノ前遺跡などと同様に、極端に、先までの低地（谷地）部の遺構の存在や追跡、移動など、周辺の文化財を越境地外である副食地の近隣に新たな文化財を確認する事を示唆する貴重な資料となつた。

成敗島ノ本遺跡はSD01（自然流路）・が丘段の段階で検出する形状と際に付帯的に検出され、東から西へ若しくは大きく南北に蛇行しながら走っている様子が確認された。遺物は古墳時代のミニチュア土器が出土しており、これらも流路内でのローリングにより磨耗が激しく付近に「流路」堆積が形成されてい

ることを示唆する資料である。

成敗島古手遺跡第2次調査ではA区で蛇行する大溝を南北に検出している。時期については古墳時代から伊勢までと判斷し、紀原原であったと推定される。また、被破壊状の通路土塁や不定形小ピット群なども検出され、馬の性格が、牛馬歩行痕であることを推測させる遺構を検出している。B区では流路の他に溝を検出している。溝と抉まれた空間に則して道路状遺構の可能性を示唆しており、低地上における道路施工についての資料として、今後は調査で認識された諸問題を検証して「道路」遺構を考えなければならない。また、出土遺物に関しては5世紀後半を中心とする遺物が見られ、調査地南西は詳明する成敗島ノ本遺跡との関連も考えられる。C区では成敗島古手遺跡第1次調査地とJR在来線跡を挟んで対向する調査範囲をとり、遺構は流路を中心に構成され、現地時代を中心とした遺物が出土している。

成敗三郎丸遺跡は中世に指定される溝を検出している。また、成敗古手第2次調査八区と同様に約10cm～15cm程の小ピットが群集する牛馬による歩行痕と看取できるような遺構を検出している。低地において水田耕作の様子を示唆する資料である。

成敗長瀬町御所八区では成敗路なども検出されている。各遺跡で流路跡が多く検出されており、当遺跡でも獣骨である。中世を中心として遺構は展開するが、その生活痕跡である遺物の検出には至らず、南側丘陵上に存在することを窺わせる資料である。D区では埋没層を13世紀に求めた河川跡が検出され、八区同様に中世の資料を確認している。

### ・歴史地区の底地での遺跡の展開と文化財包藏地

先述したように、各遺跡からは「溝」「流路跡」「河川跡」「溜まり状遺構」などの「水」に関する遺構検出が大半を占めている。これは今回調査区が設定された範囲が南北の丘陵に挟まれた谷地形であることが大きな要因の一つである。谷地形の植生部でこれらの中の遺構が検出する時期については、出土遺物の側から強く傾倒的年代を示す遺物が非常に少ないとから判断が困難であり、周辺遺跡の状況を加味して、一般的に遺跡の性格や時間認定を行わなければならぬ。

今回調査が実行された範囲の南側（熊野伊勢道筋は北側）は全て低位丘陵底部（標高約15m前後）であり、過去の調査で弥生時代から古墳時代の大集落や祭祀場が形成されていたことが解っている。これらの集落跡等の北側に位置する今回の各調査地点は標高約9m以下の底地であり、検出された溝等は「水」の利用、または生産（水田など）に関する遺構として捉えることができよう。その中で牛馬歩行による移動の可能性を示唆する遺構の検出は泥炭化し易い底地における良好な資料として、今後羽衣塚地区や熊田地区などの底地丘陵地や台地上に展開する同様の遺構と比較検しなければならない。また、谷地形隔離部において文化財包藏地の設定を参考する機会に恵まれたことは、今後の文化財包藏地の方を考える上で貴重な資料となつた。

## 写真図版



熊野原跡遺跡

全景

(空中写真：真上から)



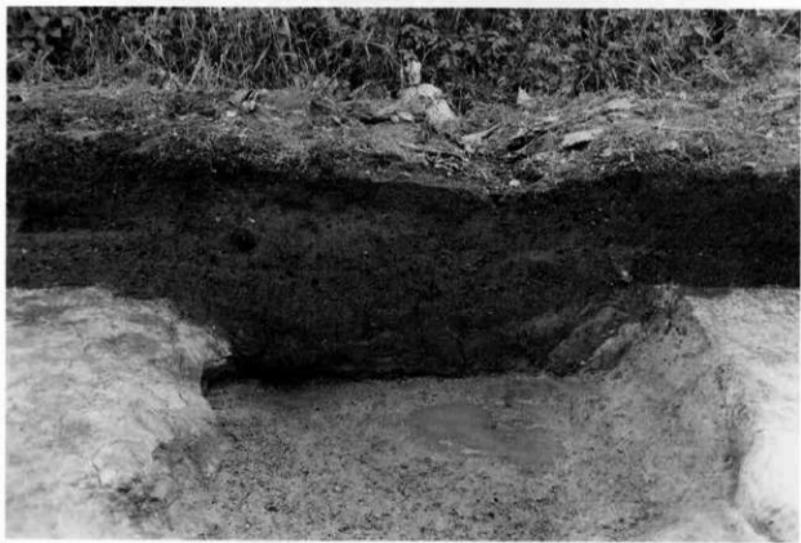
熊野原跡遺跡

A区全景

(空中写真：真上から)

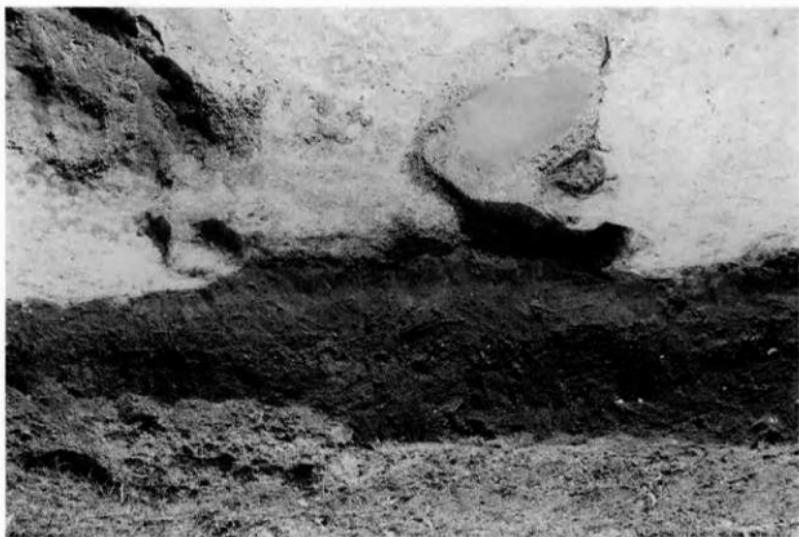


熊野根町遺跡A区ISX2土層観察状況（西から）

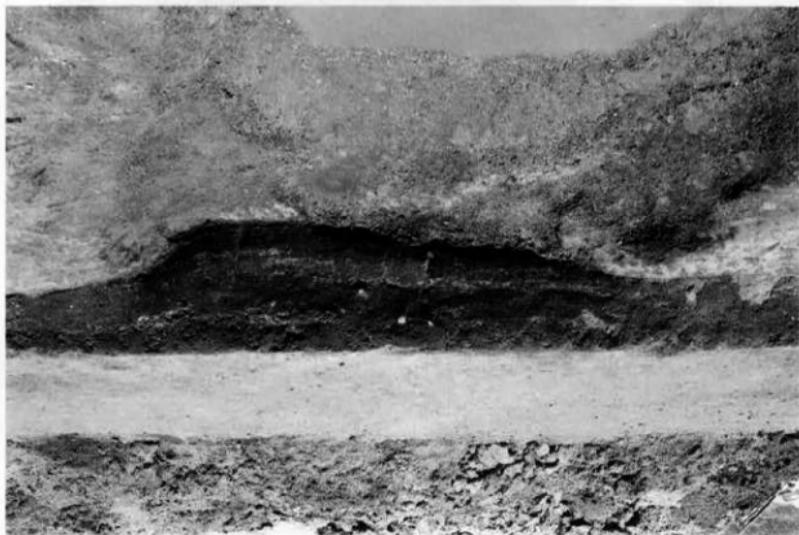


熊野根町遺跡B区ISD7土層観察状況（西から）

蘇聯伊爾庫茨克 ISD10 土壤腐殖質 (圖 6.5)



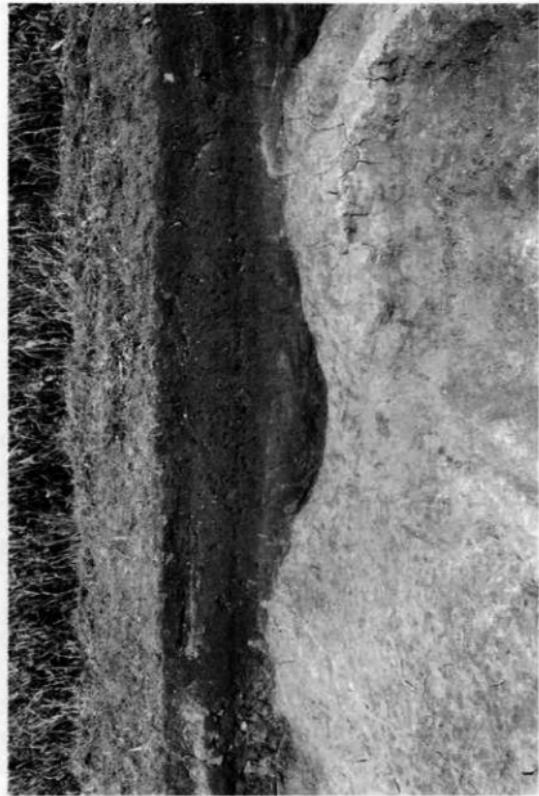
蘇聯伊爾庫茨克 ISD9 土壤腐殖質 (圖 6.6)



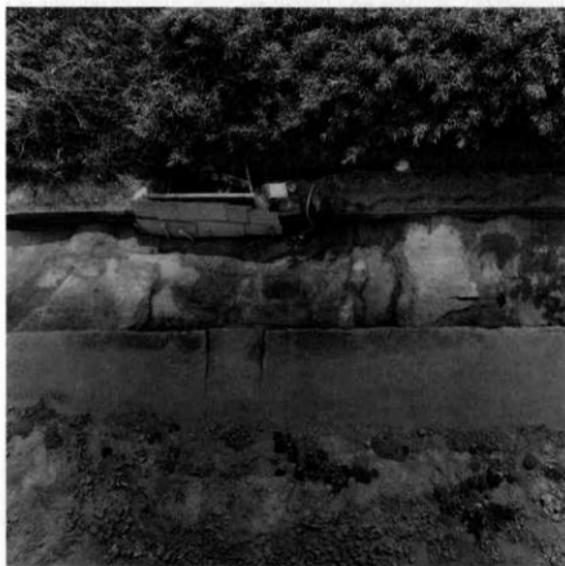
pla.4



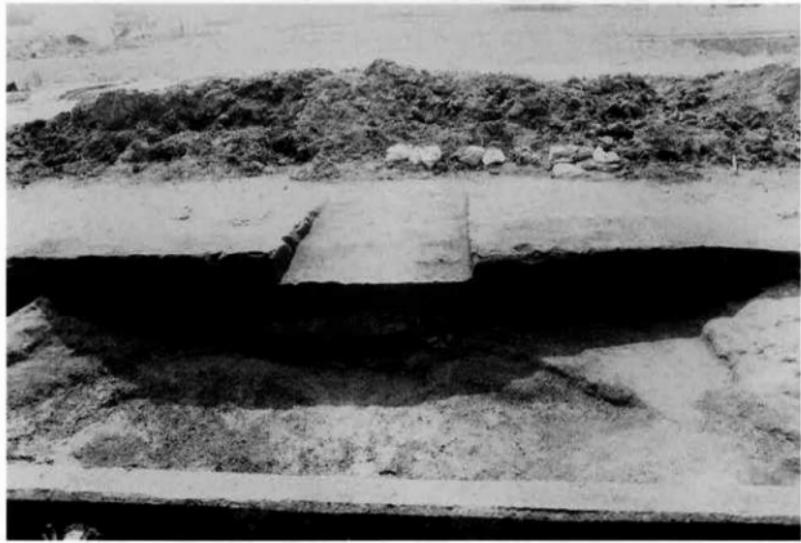
熊野市町道断B区1SD1中央部土解観察状況 (西かが)



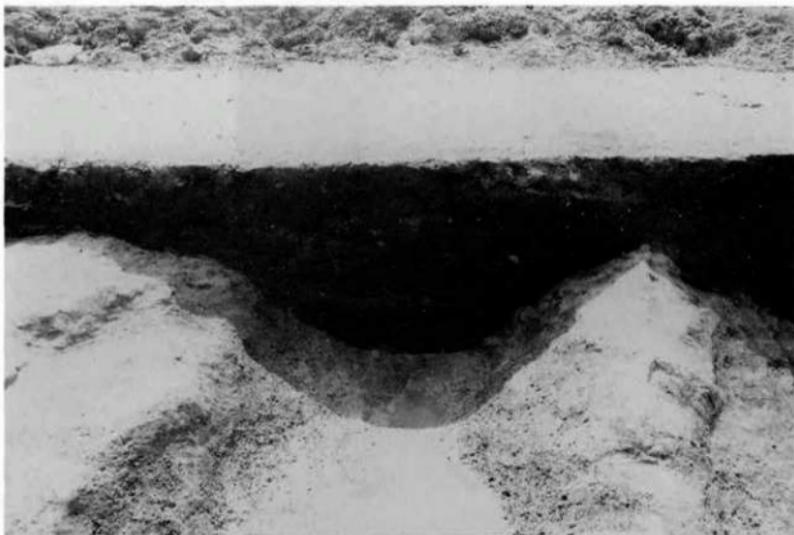
熊野市町道断B区1SD1東部土解観察状況 (西かが)



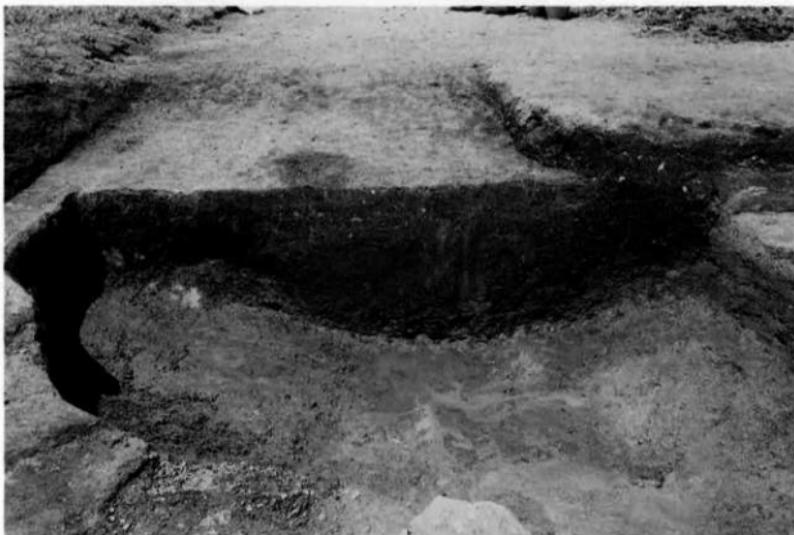
熊野柳町遺跡B区  
ISD12・13  
(空中写真：真上から)



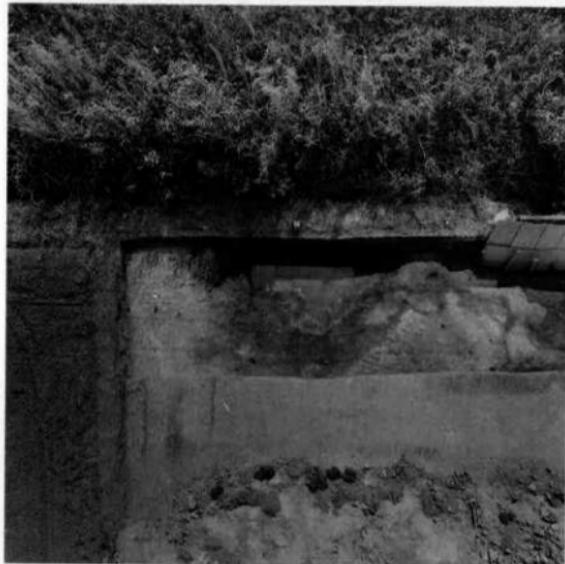
熊野柳町遺跡B区ISD12土層観察状況（東から）



熊野柳町遺跡B区ISD13土層観察状況（東から）



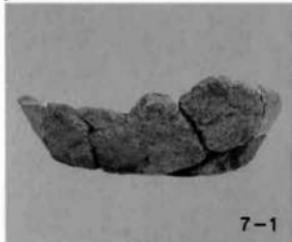
熊野柳町遺跡B区ISX14土層観察状況（東から）



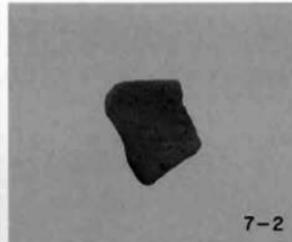
熊野伊町道跡B区  
ISD15  
(空中写真：真上から)



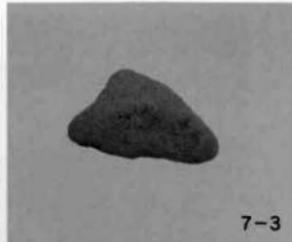
熊野伊町道跡B区ISD15土層観察状況（東から）



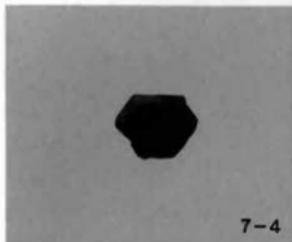
7-1



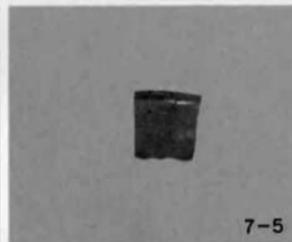
7-2



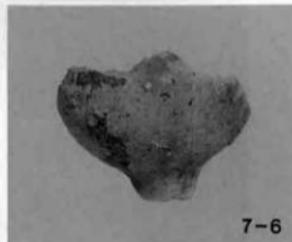
7-3



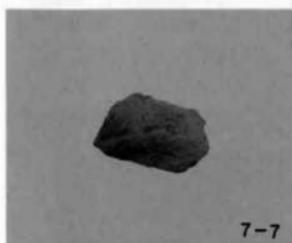
7-4



7-5



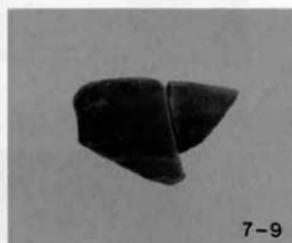
7-6



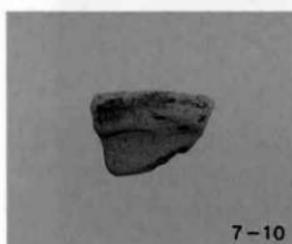
7-7



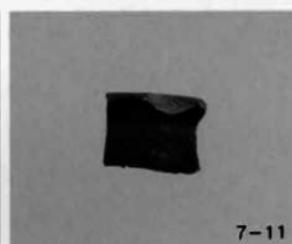
7-8



7-9



7-10



7-11



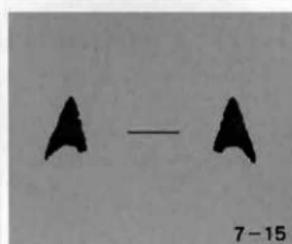
7-12



7-13



7-14



7-15



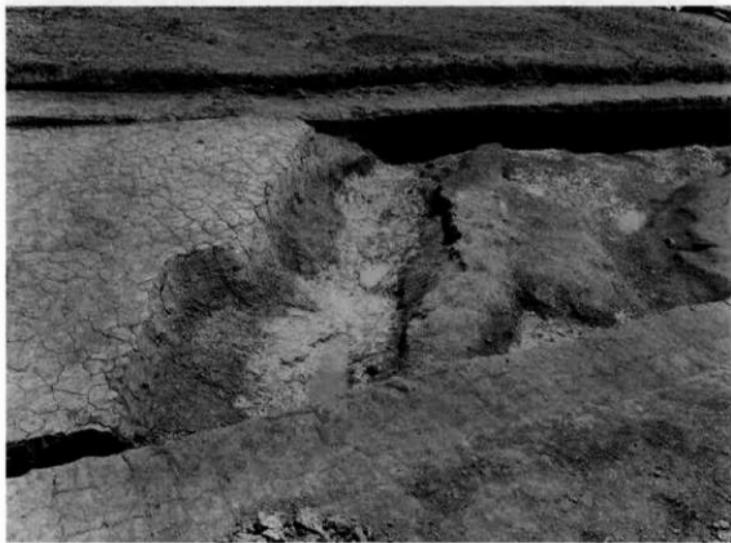
藏敷島ノ本SD01・SD02調査区北側土層



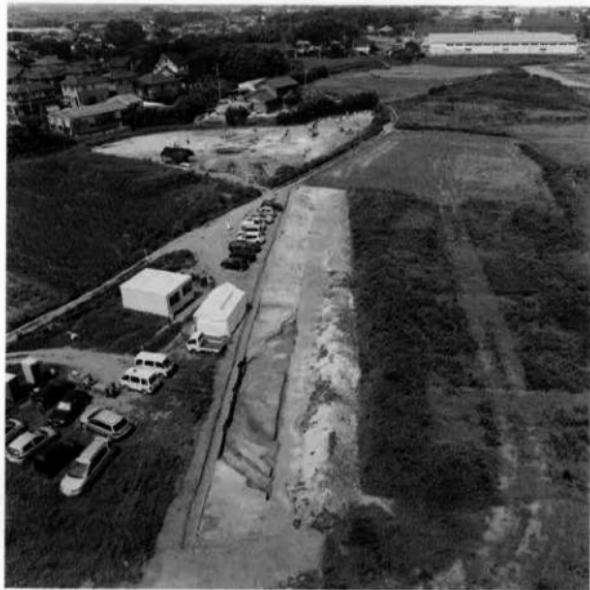
藏敷島ノ本SD01・SD02調査区南側土層



藏数島ノ本SD01 (西から)



藏数島ノ本SD02 (北から)



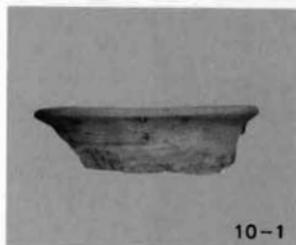
藏敷島ノ本調査区全景（東から）



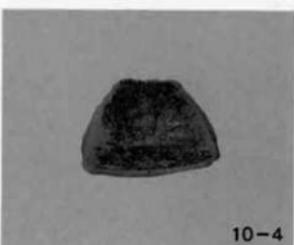
藏敷島ノ本調査区全景（真上）



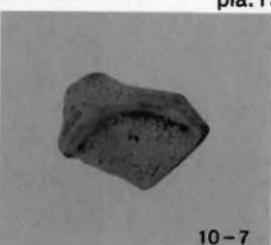
藏敷島ノ本SD01・SD02（真上）



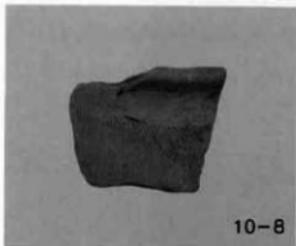
10-1



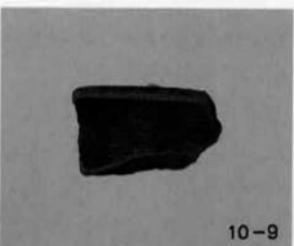
10-4



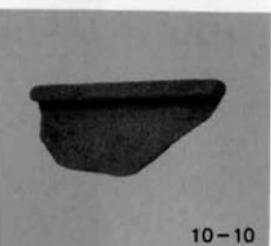
10-7



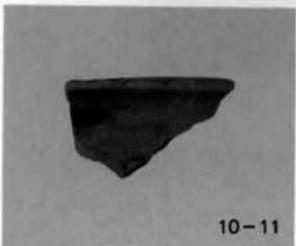
10-8



10-9



10-10



10-11



藏敷保古手第2次調査A区  
調査区全景（東から）



藏敷保古手第2次調査A区  
2SX13土層観察（東から）



藏敷保古手第2次調査A区  
2SX13分完掘状況(東から)



藏敷保古手第2次調査A区  
2SD09土層・完掘状況(北東から)

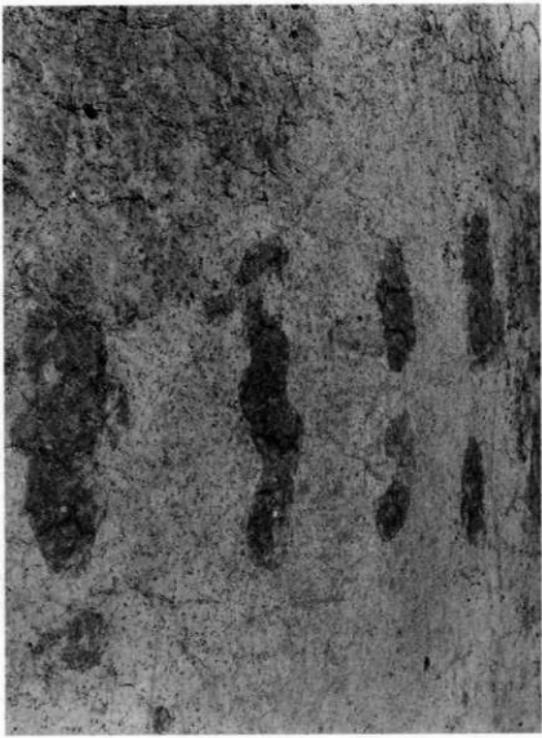


蔵敷保古手第2次調査A区  
2SD09土層・完掘状況（北西から）



蔵敷保古手第2次調査A区  
2SD09土層・完掘状況（北東から）

藏敷保古手第2次調查八区  
2SD10土壤剖面 (東から)





蔵敷保古手第2次調査A区  
2SX18検出状況（南から）



蔵敷保古手第2次調査A区  
2SX18完掘状況（北から）



藏敷古手第2次調査A区  
2SX18土層観察（南東から）



2SX18-a土層観察（北から）



2SX18-b土層観察（北から）



2SX18-c土層観察（北から）



2SX18-d土層観察（西から）



2SX18-e土層観察（南から）



2SX18-f土層観察（南から）



蔵敷古手第2次調査A区  
2SX22完掘状況（北から）



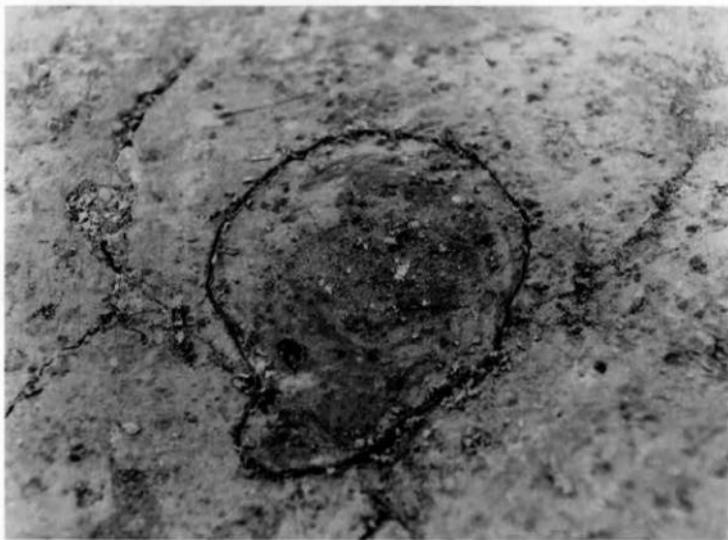
藏敷保古手第2次調査A区  
2SX22完掘状況（北から）



藏敷保古手第2次調査A区  
2SX27検出状況（東から）



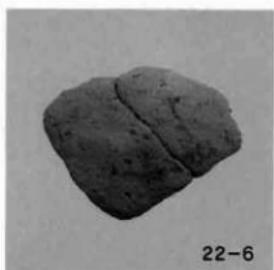
蕨數保古手第2次調査A区  
2SX27完掘状況（北から）



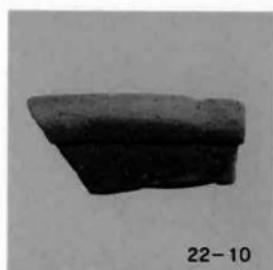
蕨數保古手第2次調査A区  
2SX27検出状況（南から）



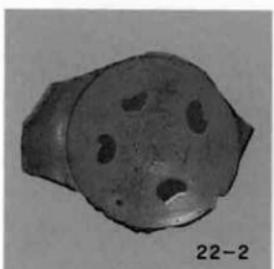
22-1



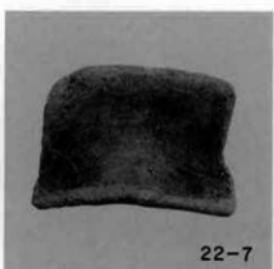
22-6



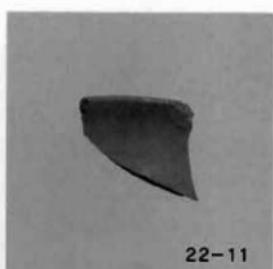
22-10



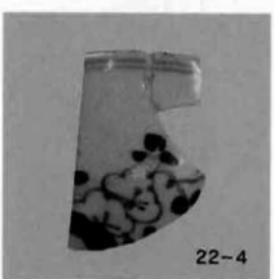
22-2



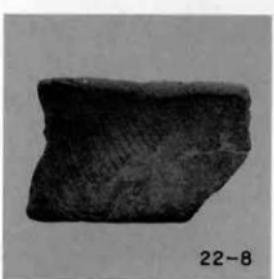
22-7



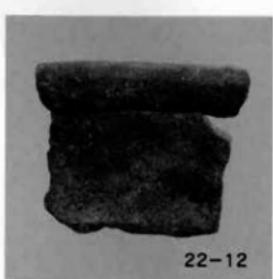
22-11



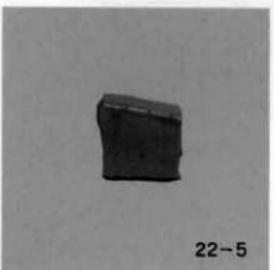
22-4



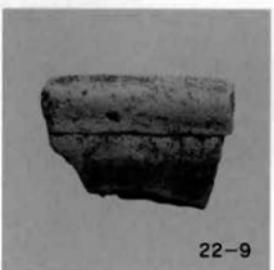
22-8



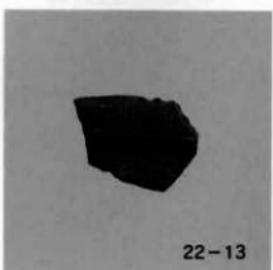
22-12



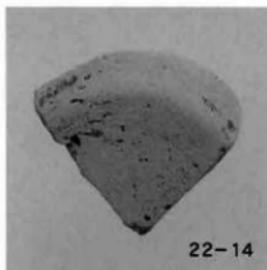
22-5



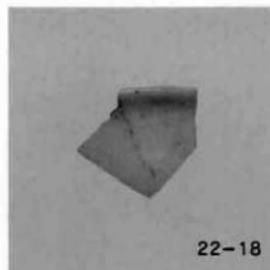
22-9



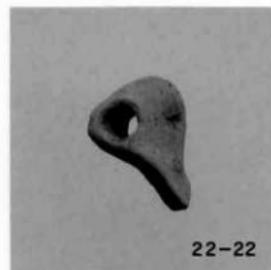
22-13



22-14



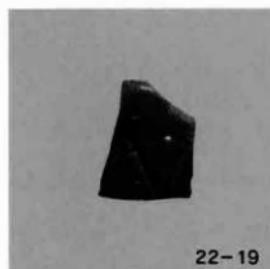
22-18



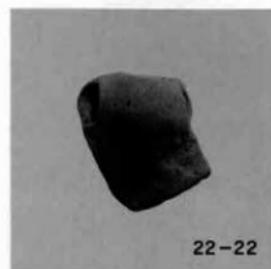
22-22



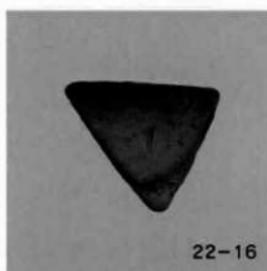
22-15



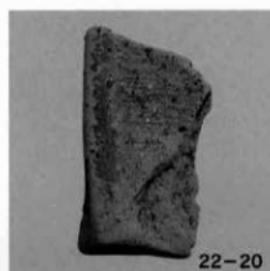
22-19



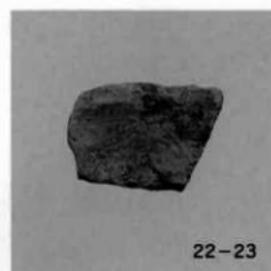
22-22



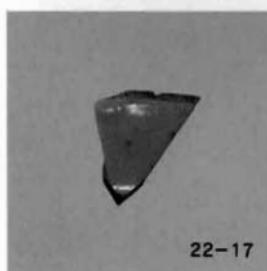
22-16



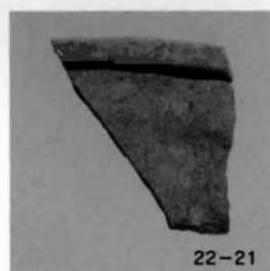
22-20



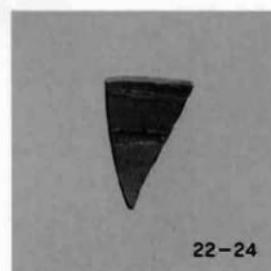
22-23



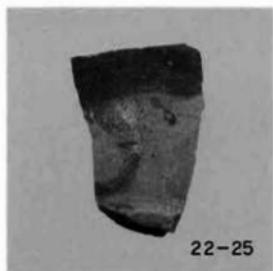
22-17



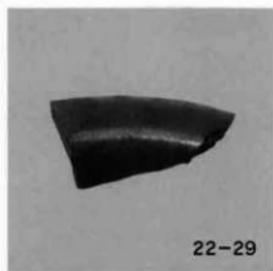
22-21



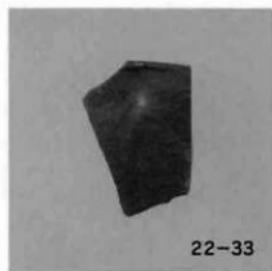
22-24



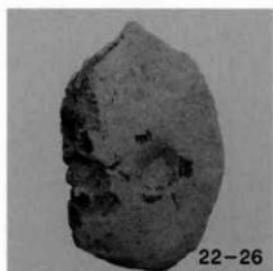
22-25



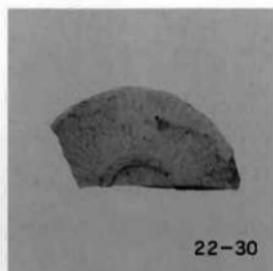
22-29



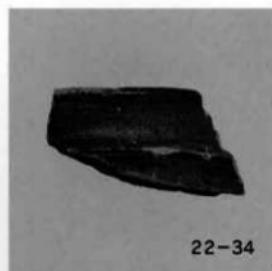
22-33



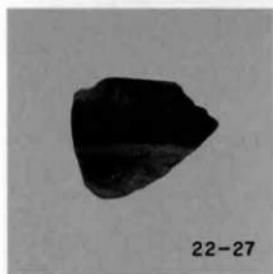
22-26



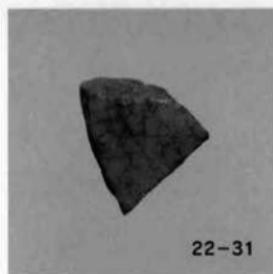
22-30



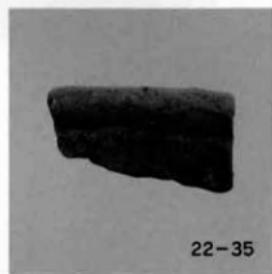
22-34



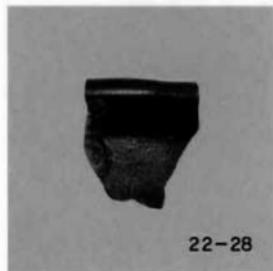
22-27



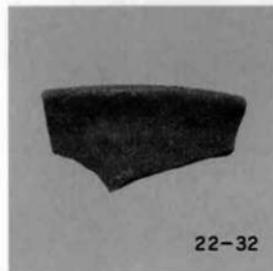
22-31



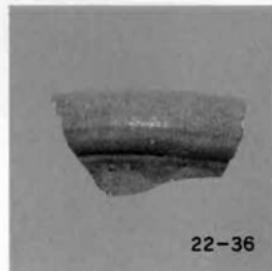
22-35



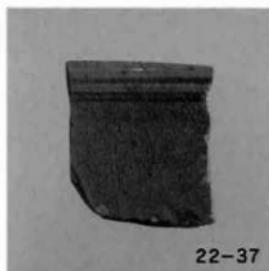
22-28



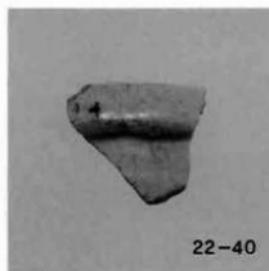
22-32



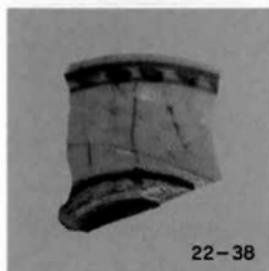
22-36



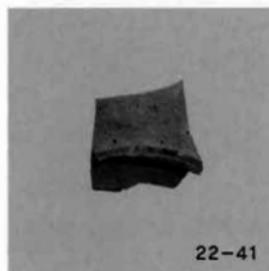
22-37



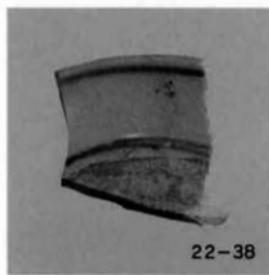
22-40



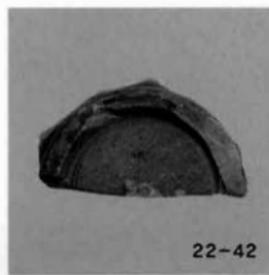
22-38



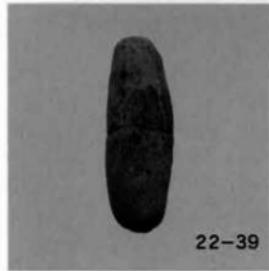
22-41



22-38



22-42



22-39



藏敷古手遺跡  
2次B区全景  
(空中写真：北から)



藏敷古手遺跡  
2次B区全景  
(空中写真：西から)



藏敷古手遺跡2次B区  
2SD1完掘状況（北から）



藏敷古手遺跡2次B区  
2SD1完掘状況（南から）



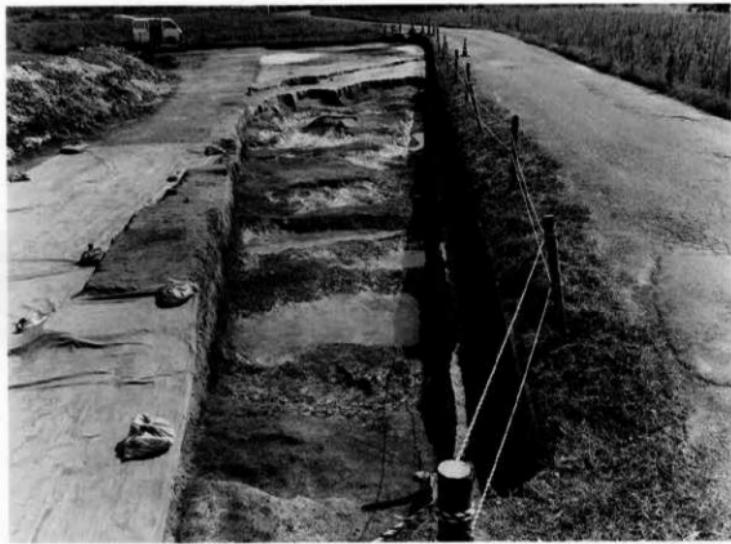
藏敷保古手遺跡2次B区  
2SD1北ベルト土層觀察状況（北から）



藏敷保古手遺跡2次B区  
2SD1南ベルト土層觀察状況（南から）



藏敷古手遺跡2次B区  
2SX2・3完掘状況（北から）



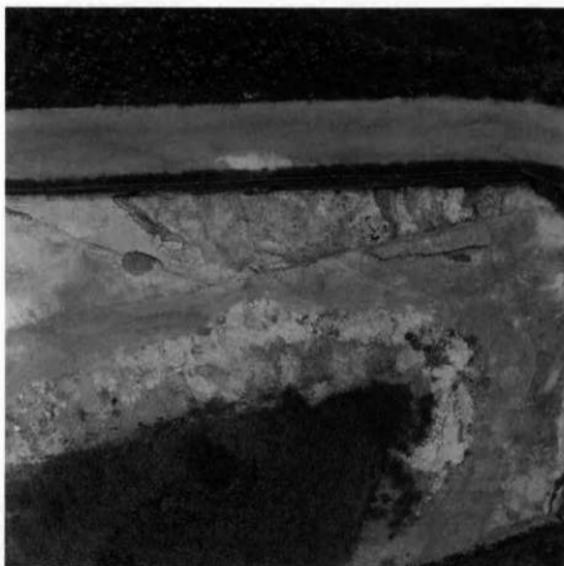
藏敷古手遺跡2次B区  
2SX2・3完掘状況（南から）



蔵敷古手遺跡2次B区  
2SX2完掘状況（西から）



蔵敷古手遺跡2次B区  
2SX2土層観察状況（北から）



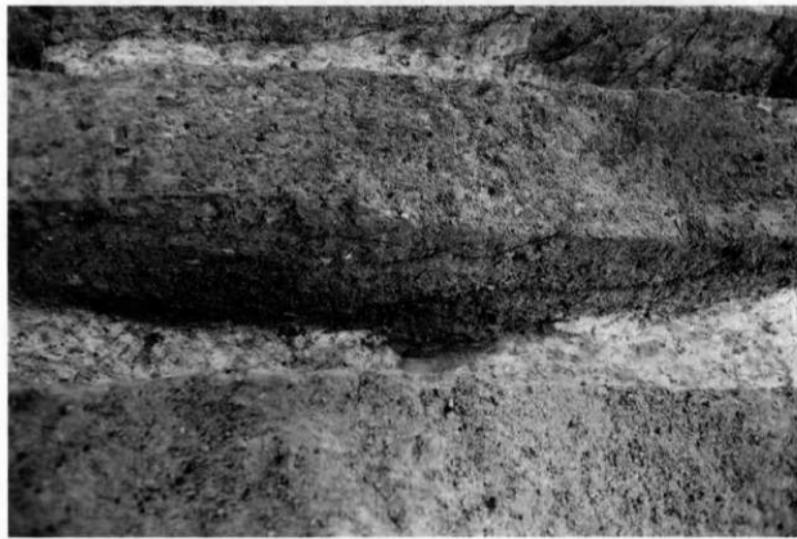
蔵数保古手遺跡  
2次B区  
2SX5完掘  
(空中写真：真上から)



蔵数保古手遺跡2次B区  
2SX5 (S8) 土層観察状況 (西から)



藏敷古手遺跡2次B区  
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



藏敷古手遺跡2次B区  
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



蔵数保古手遺跡2次B区  
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



蔵数保古手遺跡2次B区  
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



蔵敷保古手道跡2次B区  
2SX5 (S9) 堆積状況（北から）



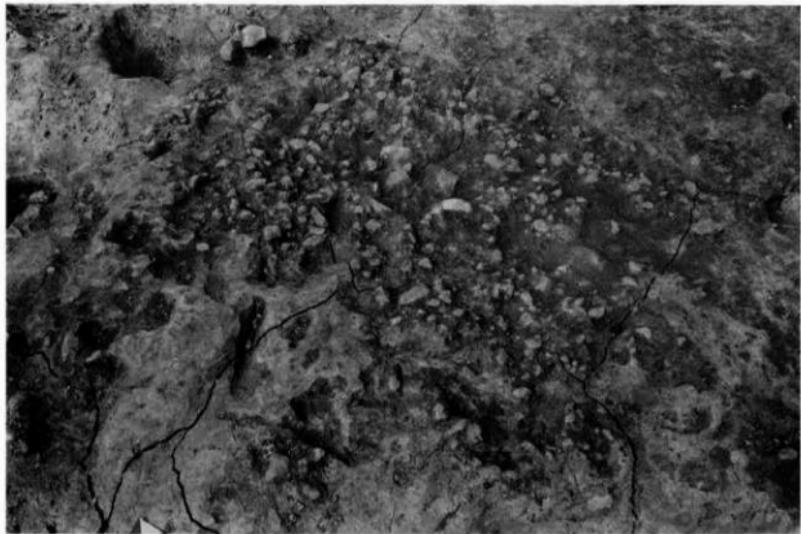
蔵敷保古手道跡2次B区  
2SX5 (S9) 堆積状況（北から）



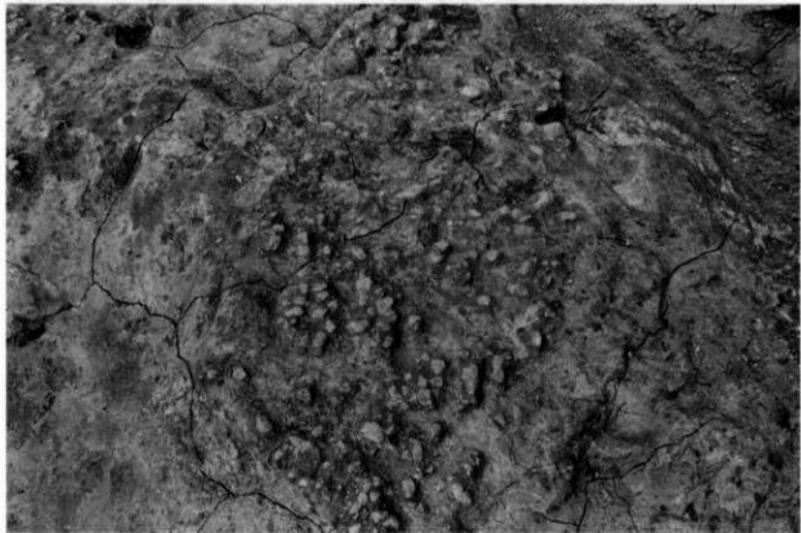
蔵敷古手遺跡2次B区  
2SX5 (S9) 堆積状況 (西から)



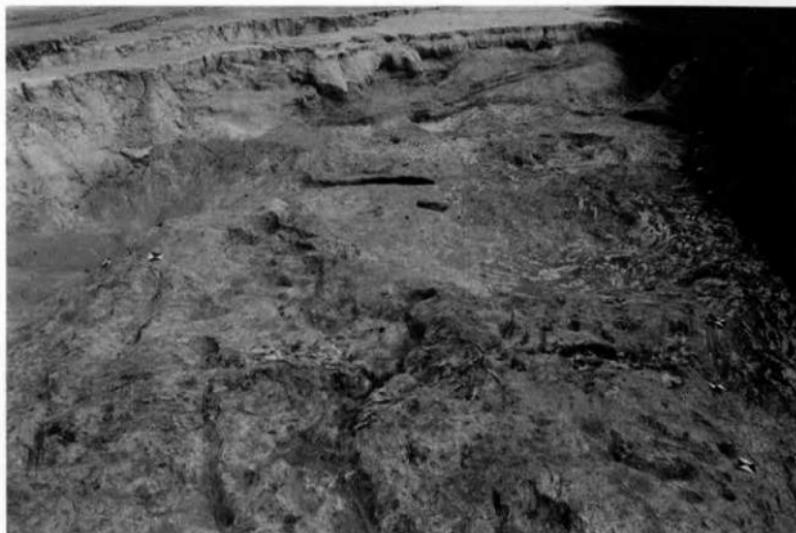
蔵敷古手遺跡2次B区  
2SX5 (S9) 堆積状況 (東から)



藏数保古手遺跡2次B区  
2SX5 (S9) 小石検出状況 (北から)



藏数保古手遺跡2次B区  
2SX5 (S9) 小石検出状況 (南から)



藏数保古手遺跡2次B区  
2SX5 (S9) 完掘状況 (東から)



藏数保古手遺跡2次B区  
2SX5 (S9) 完掘状況 (東から)



24-1



24-2



24-3



24-4



24-5



24-6



24-7



24-8



24-9



27-10



27-11



27-12



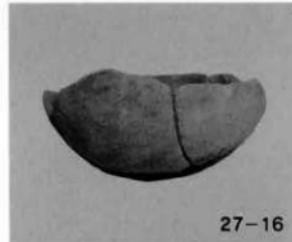
27-13



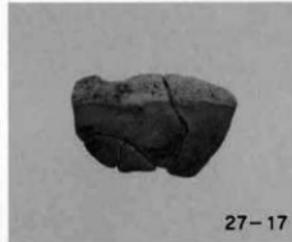
27-14



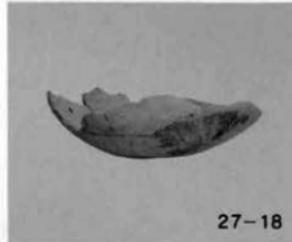
27-15



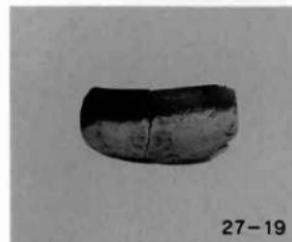
27-16



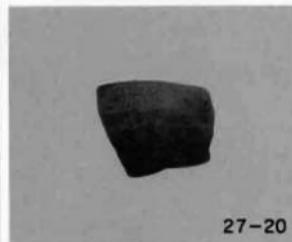
27-17



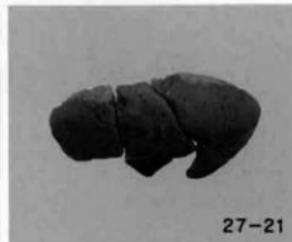
27-18



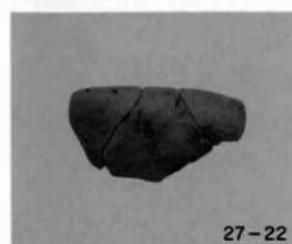
27-19



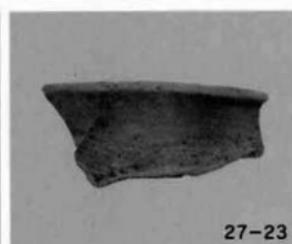
27-20



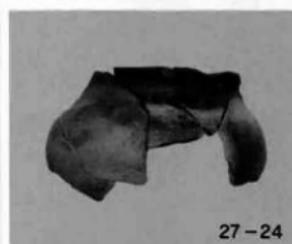
27-21



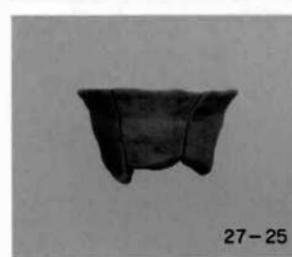
27-22



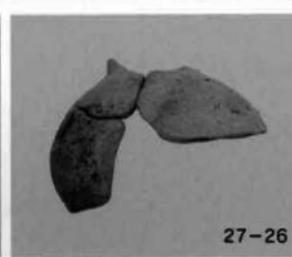
27-23



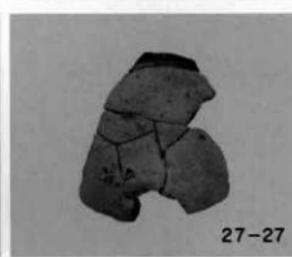
27-24



27-25



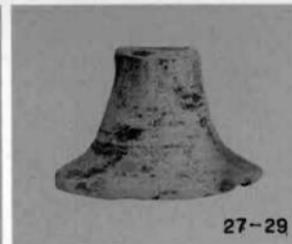
27-26



27-27



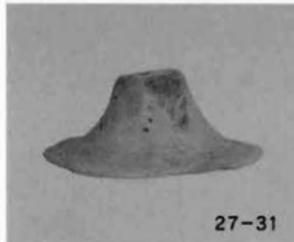
27-28



27-29



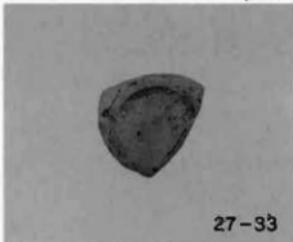
27-30



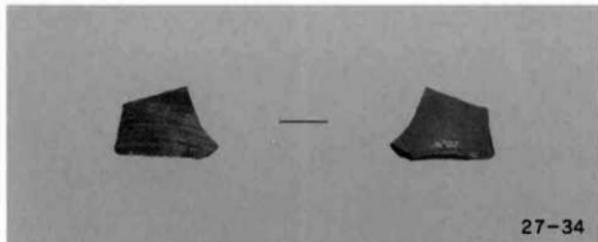
27-31



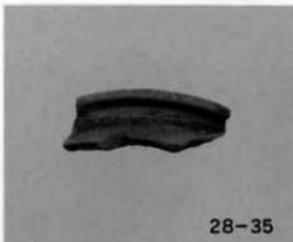
27-32



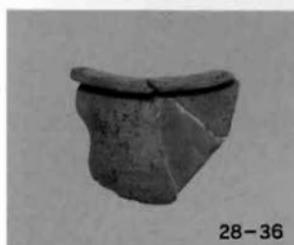
27-33



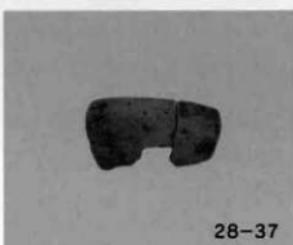
27-34



28-35



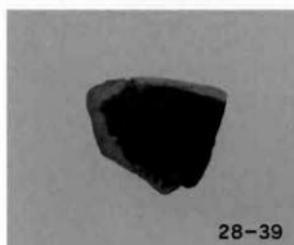
28-36



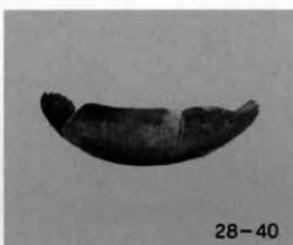
28-37



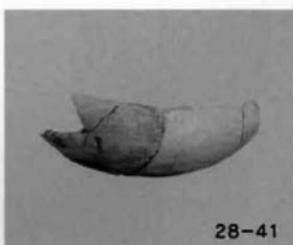
28-38



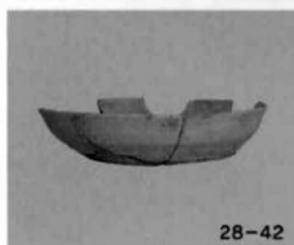
28-39



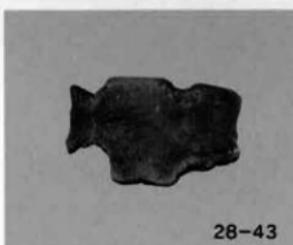
28-40



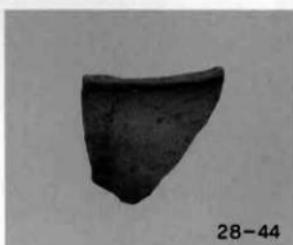
28-41



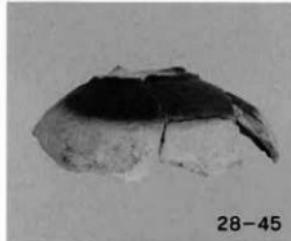
28-42



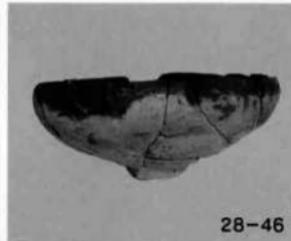
28-43



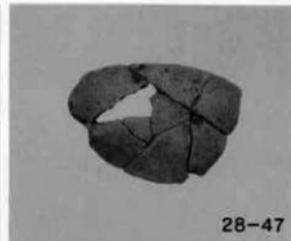
28-44



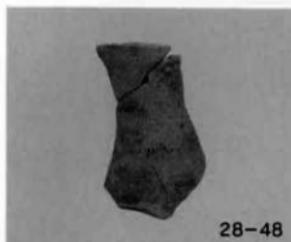
28-45



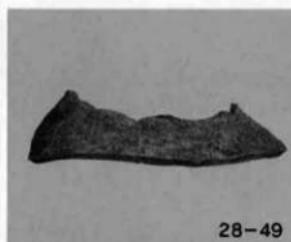
28-46



28-47



28-48



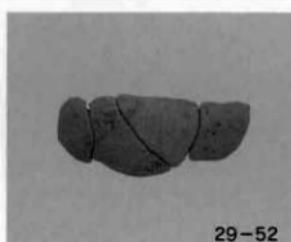
28-49



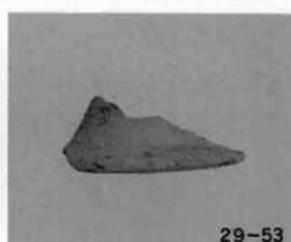
29-50



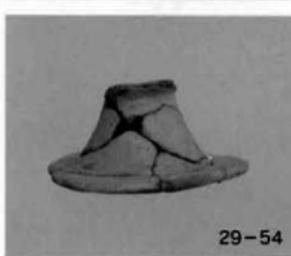
29-51



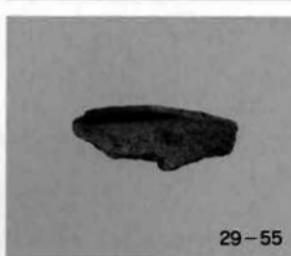
29-52



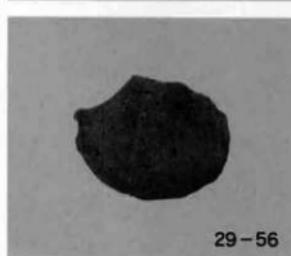
29-53



29-54



29-55



29-56



藏数保古手遺跡2次C区  
2SD01 (東から)



藏数保古手遺跡2次C区  
2SK03調査区東壁土層



威勢保古手遺跡2次C区  
2SK04上層（西から）  
2SD05・2SD06（北から）





藏敷保古手遺跡2次C区  
2SD05・2SD06（南から）



藏敷保古手遺跡2次C区  
2SD05・2SD06調査区西壁土層



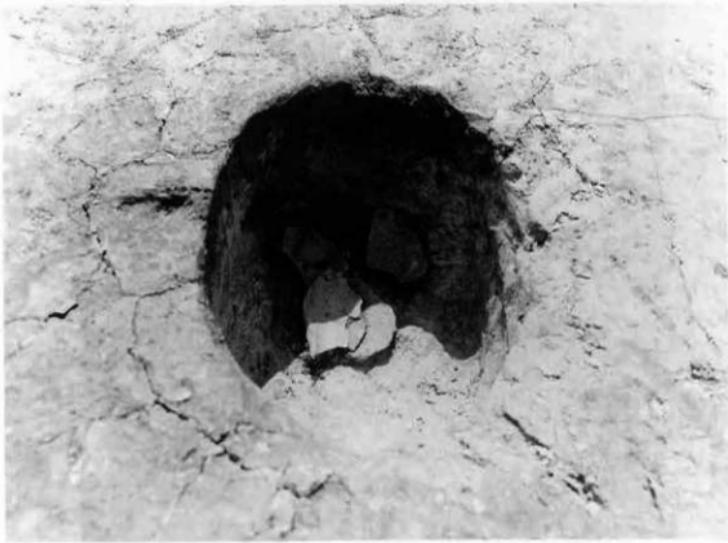
藏数保古手遺跡2次C区  
2SK07・2SD08 (西から)



藏数保古手遺跡2次C区  
2SD08調査区東壁土層



藏敷保古手遺跡2次C区  
2SD08ベルト南側上層



藏敷保古手遺跡2次C区  
2SP11（東から）



藏敷保古手遺跡2次C区

北側調査区（真上）



藏敷保古手遺跡2次C区

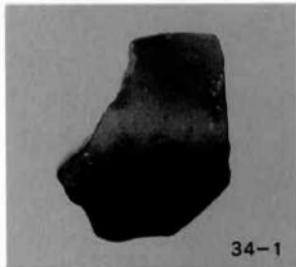
南側調査区（真上）



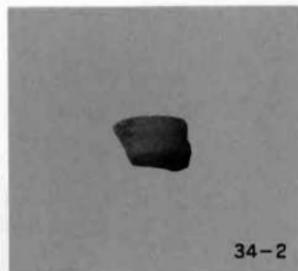
葛ヶ保古手遺跡2次CII  
調査区全景（西から）



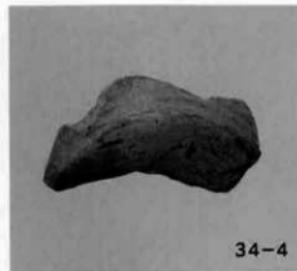
葛ヶ保古手遺跡2次CII  
調査区全景（東側を望む）



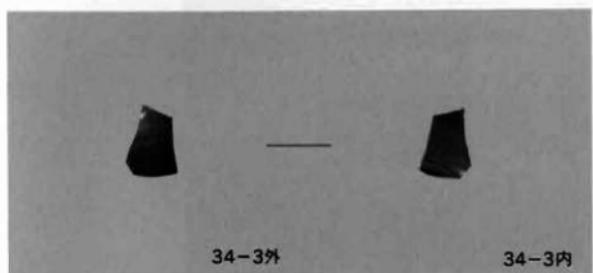
34-1



34-2

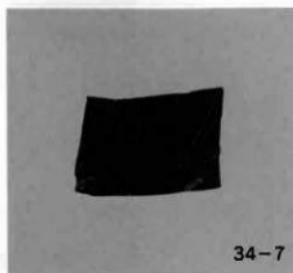


34-4

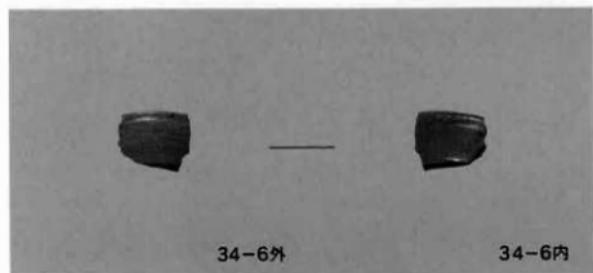


34-3外

34-3内

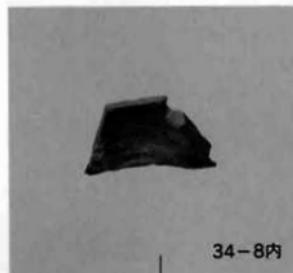


34-7

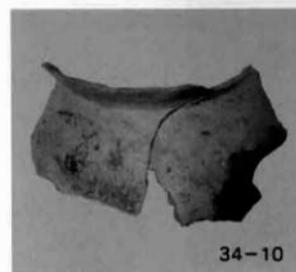


34-6外

34-6内



34-8内

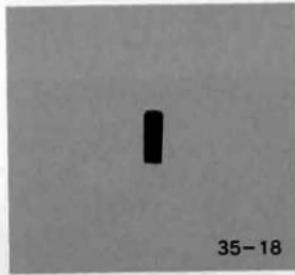
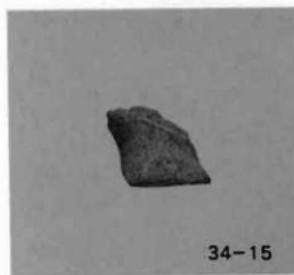
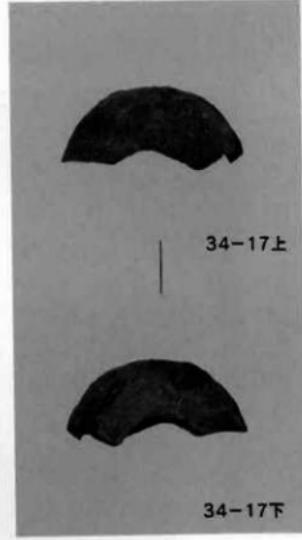
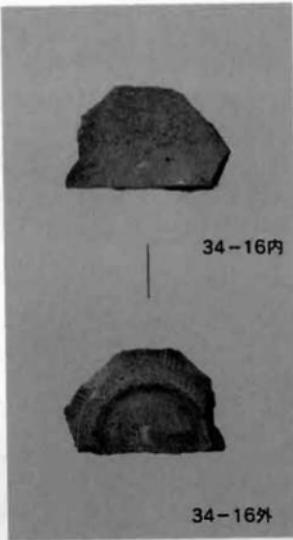
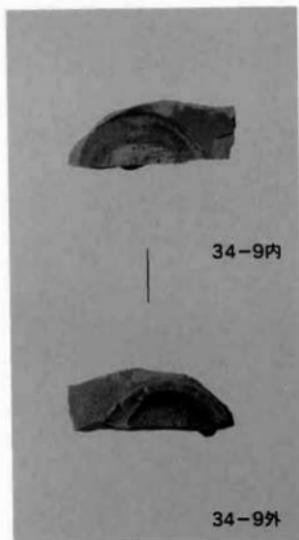


34-10

34-13

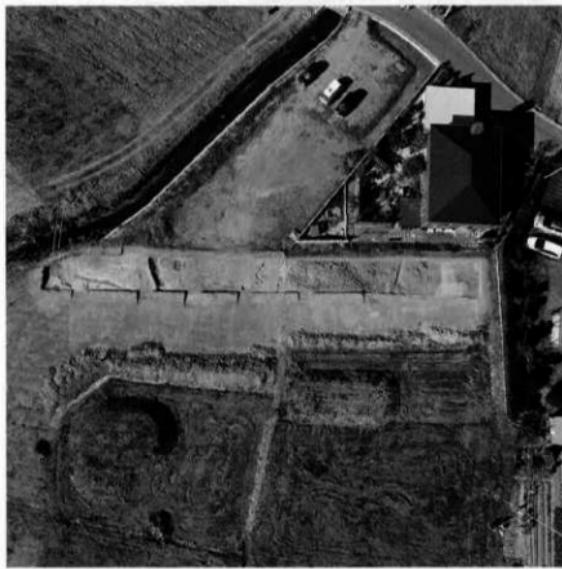


34-8外





城敷三郎丸遺跡  
全景  
(空中写真：南から)



城敷三郎丸遺跡  
全景  
(空中写真：真上から)



藏敷三郎丸遺跡  
ISD1土層観察状況（西から）



藏敷三郎丸遺跡  
ISD2土層観察状況（東から）



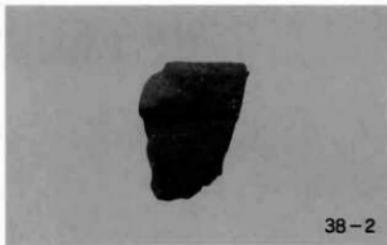
藏敷三郎丸遺跡  
ISD3土層観察状況（南から）



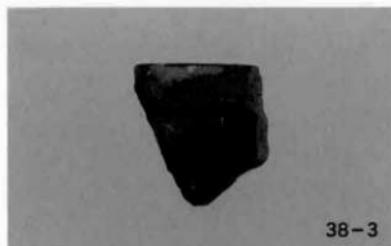
藏敷三郎丸遺跡  
不明遺構  
(空中写真：真上から)



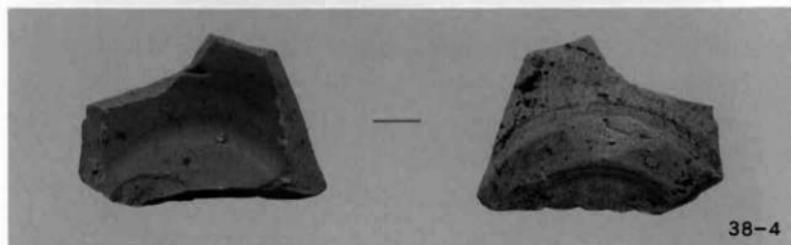
38-1



38-2



38-3



38-4



長歌町八ヶ  
ISX01a (東むか)



長歌町八ヶ  
ISX01a・b調査区西壁土層



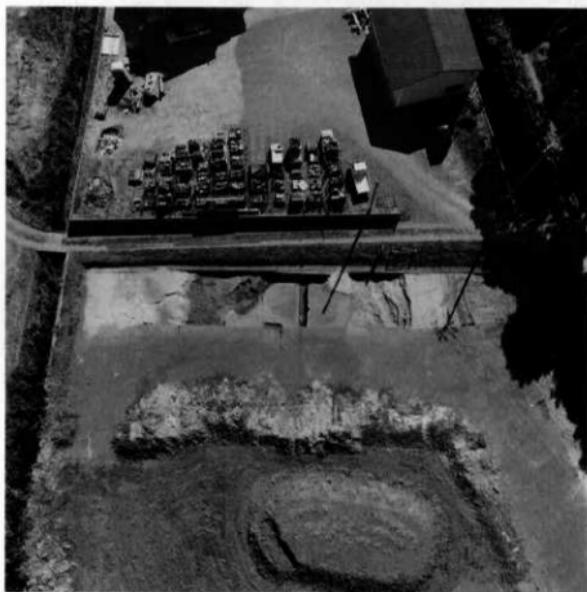
長畠町A区  
1SD02 竹製暗渠検出  
(東から)



長畠町A区  
1SD02 竹製暗渠  
(東から)



長穂町A区  
1SD02調査区西壁土層



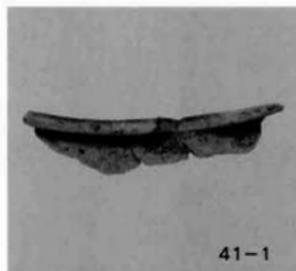
長穂町A区  
東側調査区全景（真上）



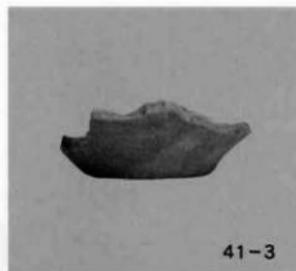
長野町A区  
南側調査区（真上）



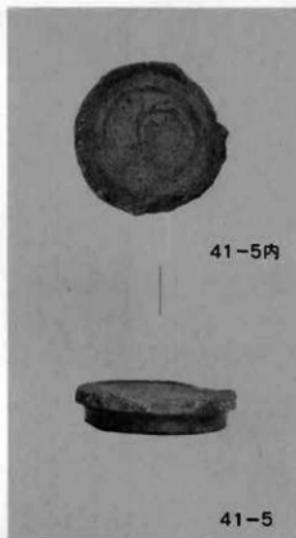
長野町A区  
調査区全景（西から）



41-1



41-3



41-5 内



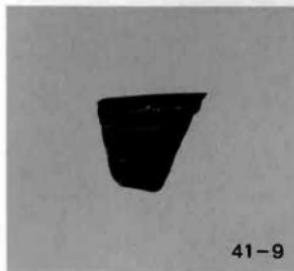
41-8 外



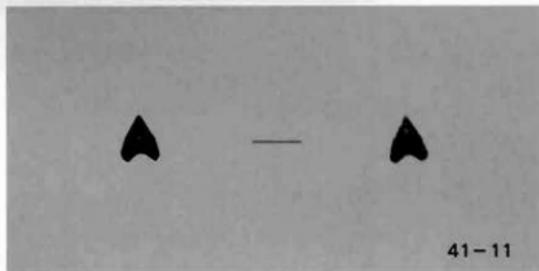
41-8 内



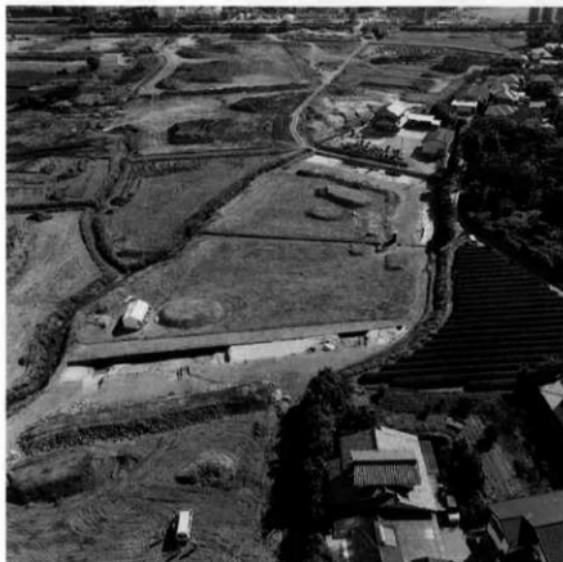
41-5



41-9



41-11



藏敷長畝町遺跡  
全景  
(空中写真：西から)



藏敷長畝町遺跡  
B区全景  
(空中写真：南から)



藏敷長畠町遺跡  
B区全景  
(空中写真：真上から)



藏敷長畠町遺跡B区  
ISX1完掘状況（北から）



蕨數長畠町遺跡B区  
ISX1東壁北側土層観察状況（西から）



蕨數長畠町遺跡B区  
ISX1東壁北側中央土層観察状況（西から）



蔵敷長欽町遺跡B区  
ISX1東壁南側中央土層觀察状況（西から）



蔵敷長欽町遺跡B区  
ISX1東壁南側土層觀察状況（西から）



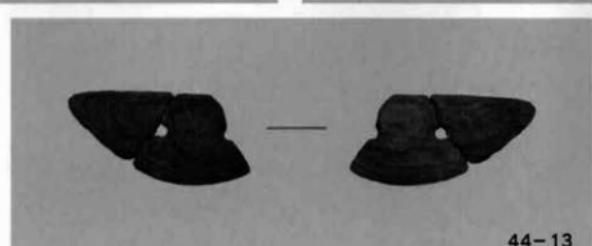
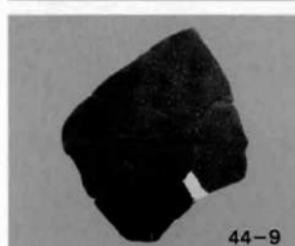
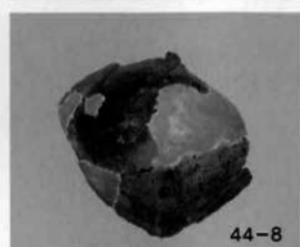
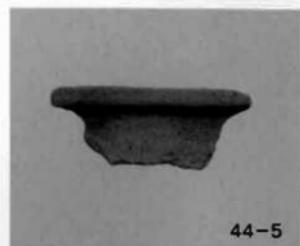
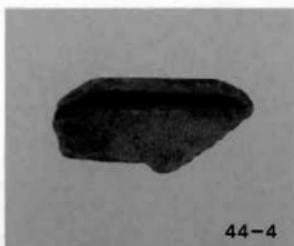
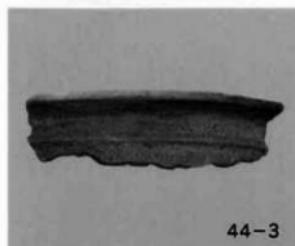
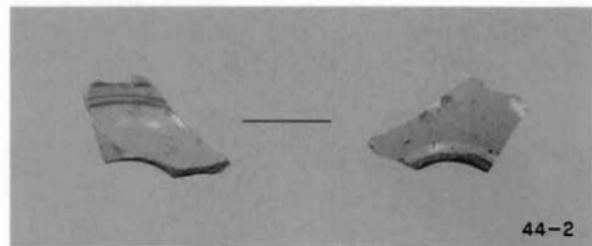
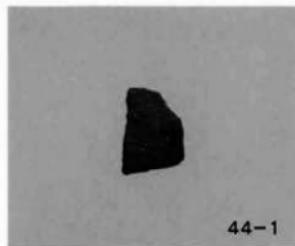
蔵敷長畠町遺跡B区  
2SD2完掘状況  
(空中写真：真上から)

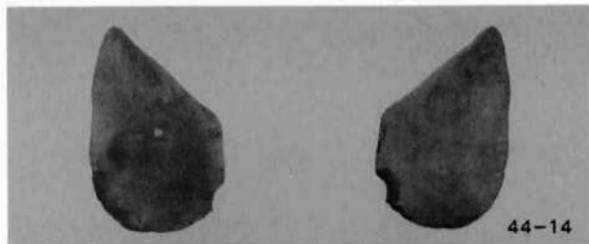


蔵敷長畠町遺跡B区  
2SD2完掘状況（東から）

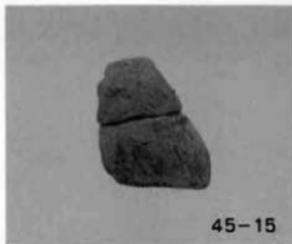


歳数長歟町道路B区  
2SD2東壁土層観察状況（西から）

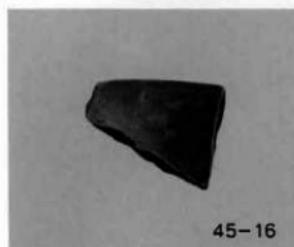




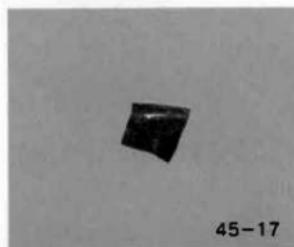
44-14



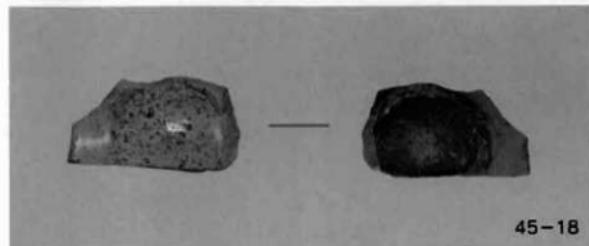
45-15



45-16



45-17



45-18

筑後市文化財調査報告書 第70集

**筑後北部地区遺跡群II**

平成18年3月20日

発行 筑後市教育委員会

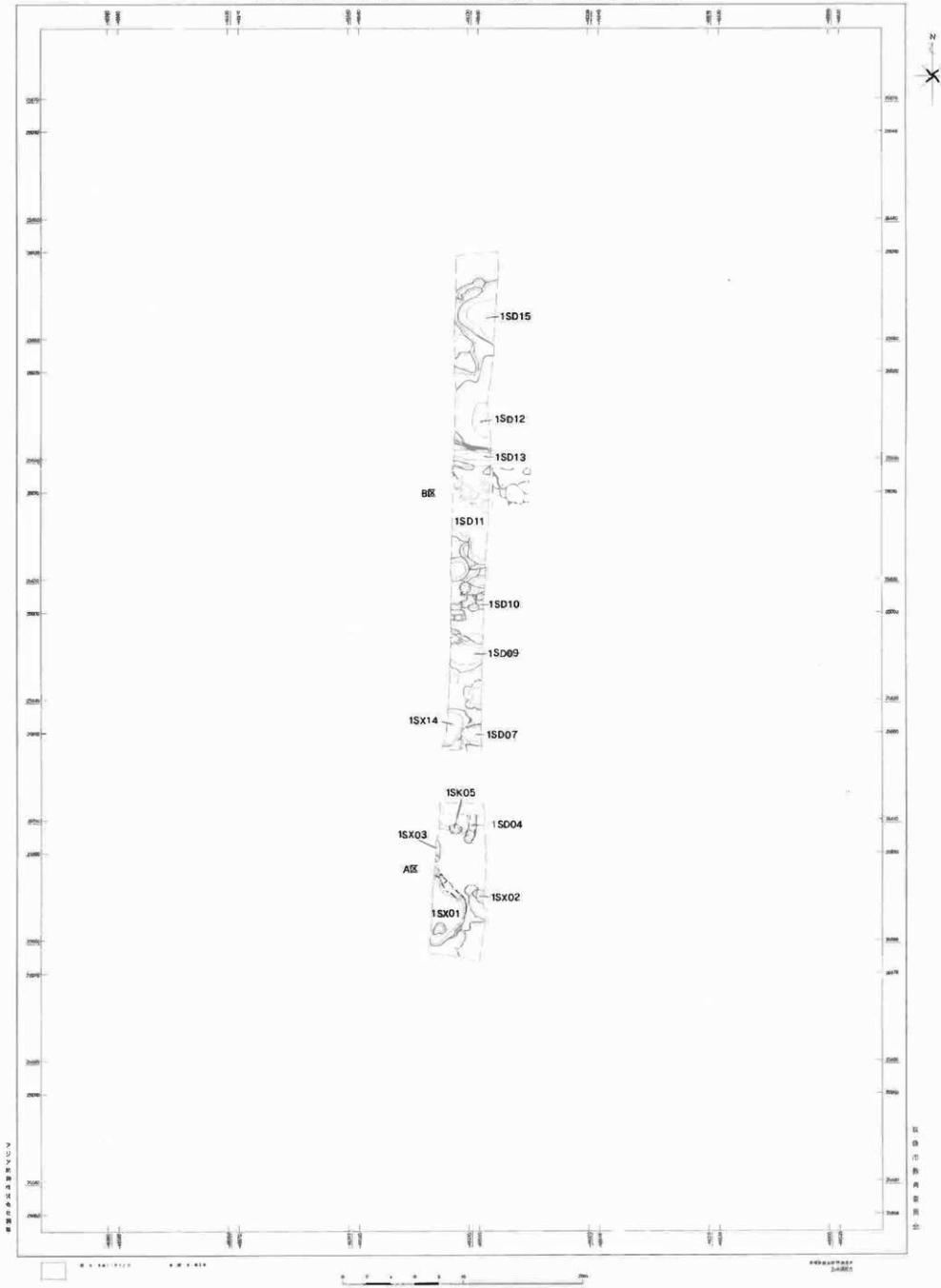
筑後市大字山ノ井898

TEL 0942-53-4111

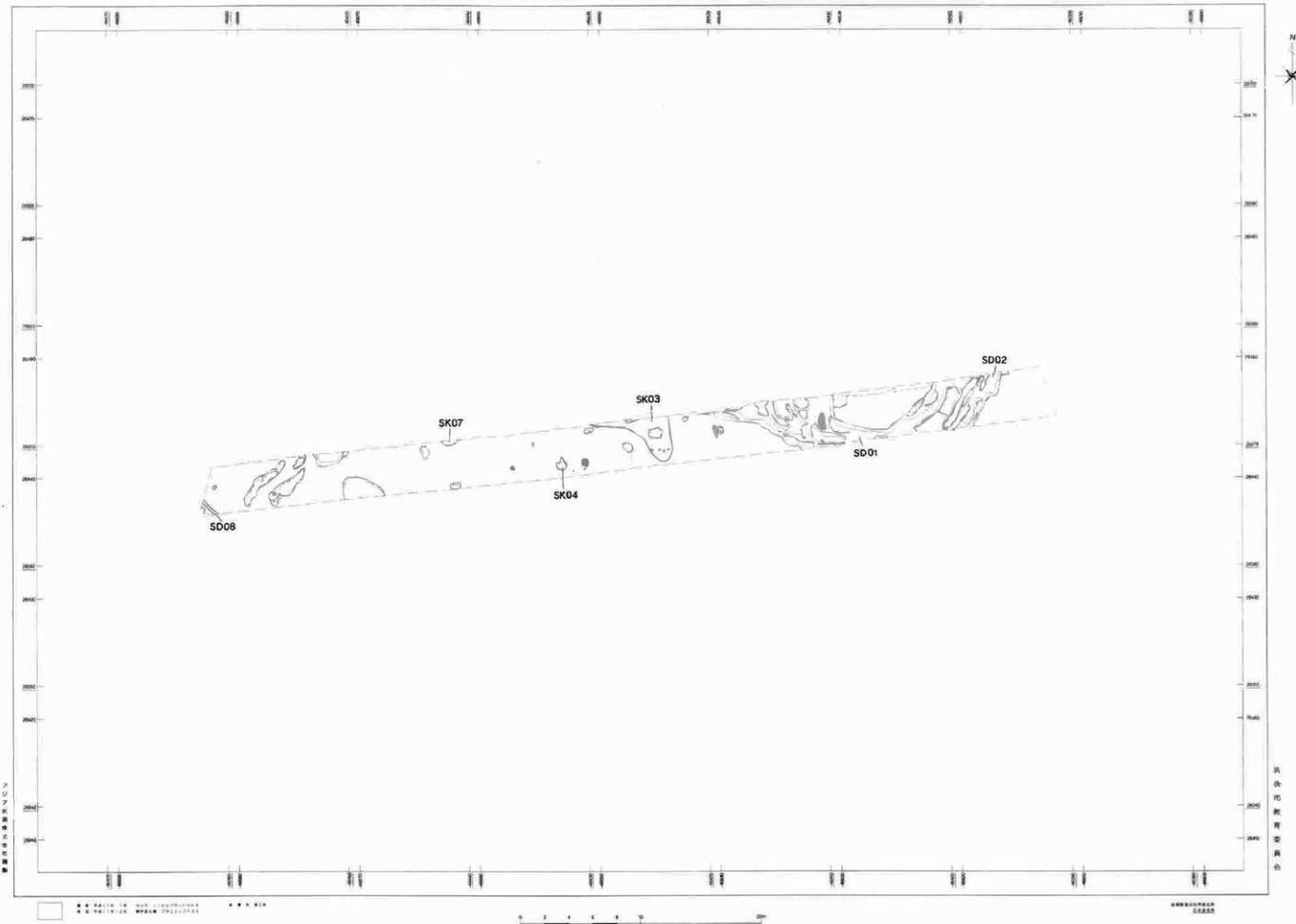
印刷 蝶四ヶ所印刷

福岡県朝倉市馬田336

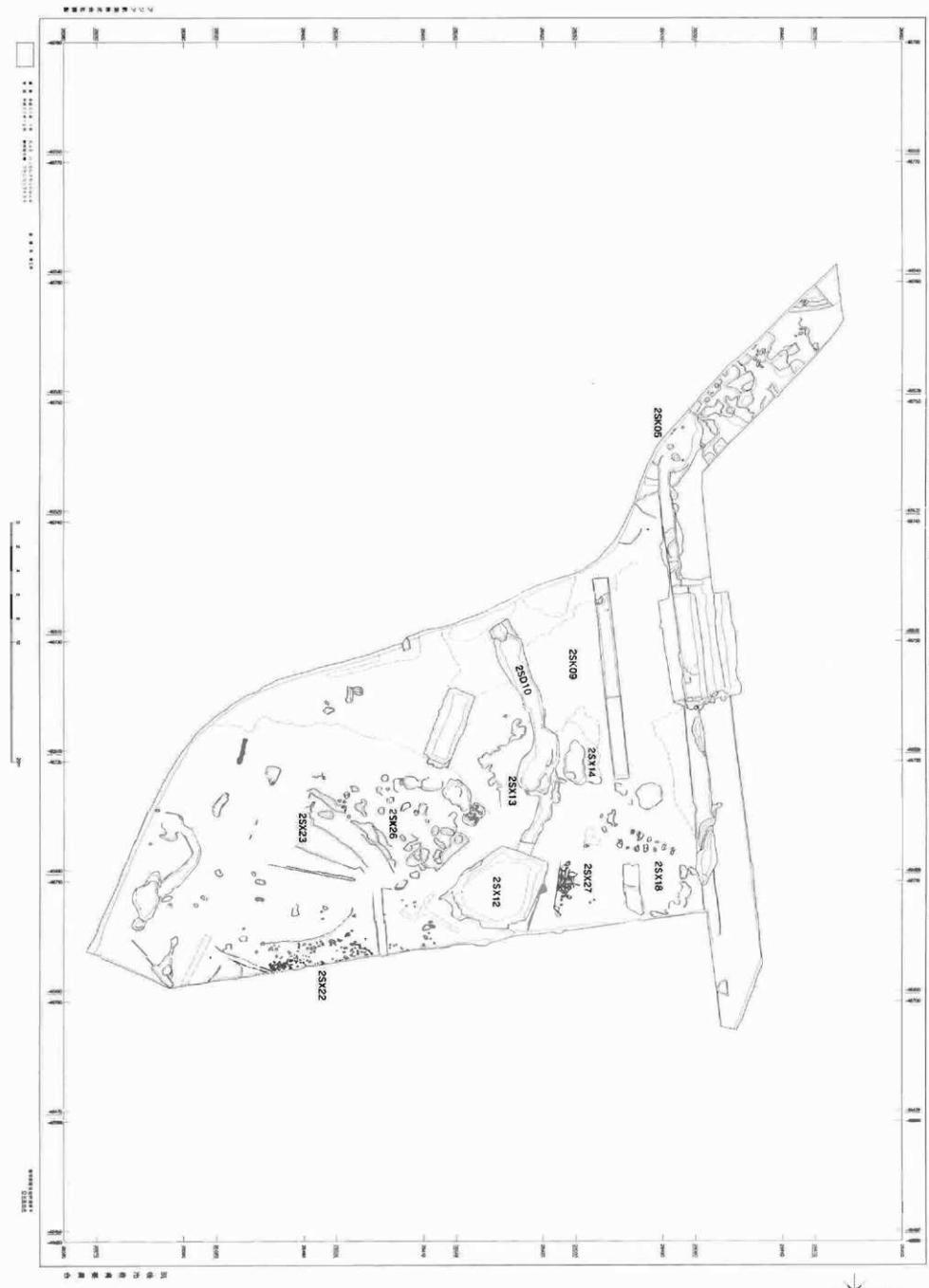
筑後北部地区遺跡群 平面図(熊野炉町遺跡) (1/300)



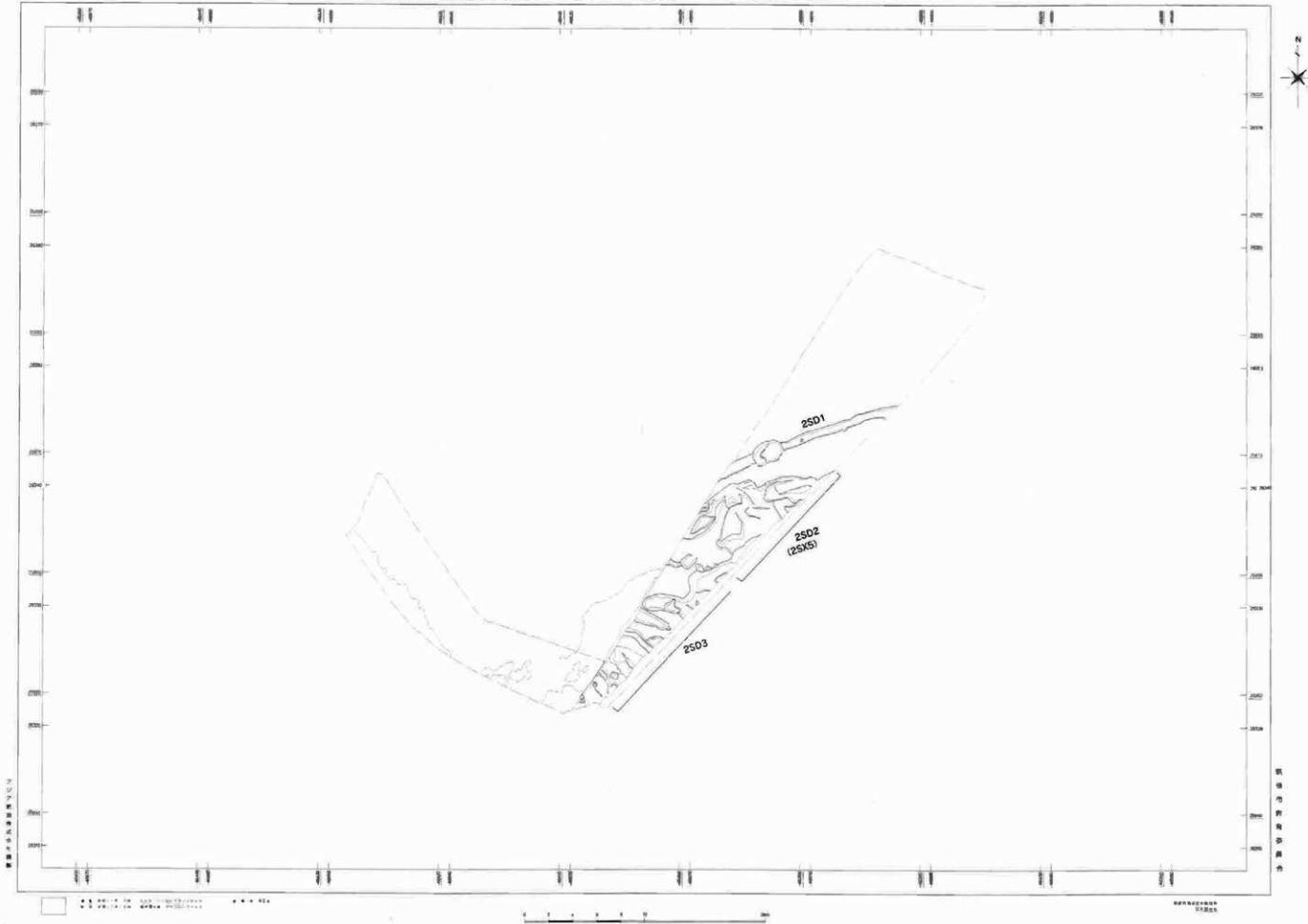
筑後北部地区遺跡群 平面図(藏数島ノ本遺跡調査) (1/300)

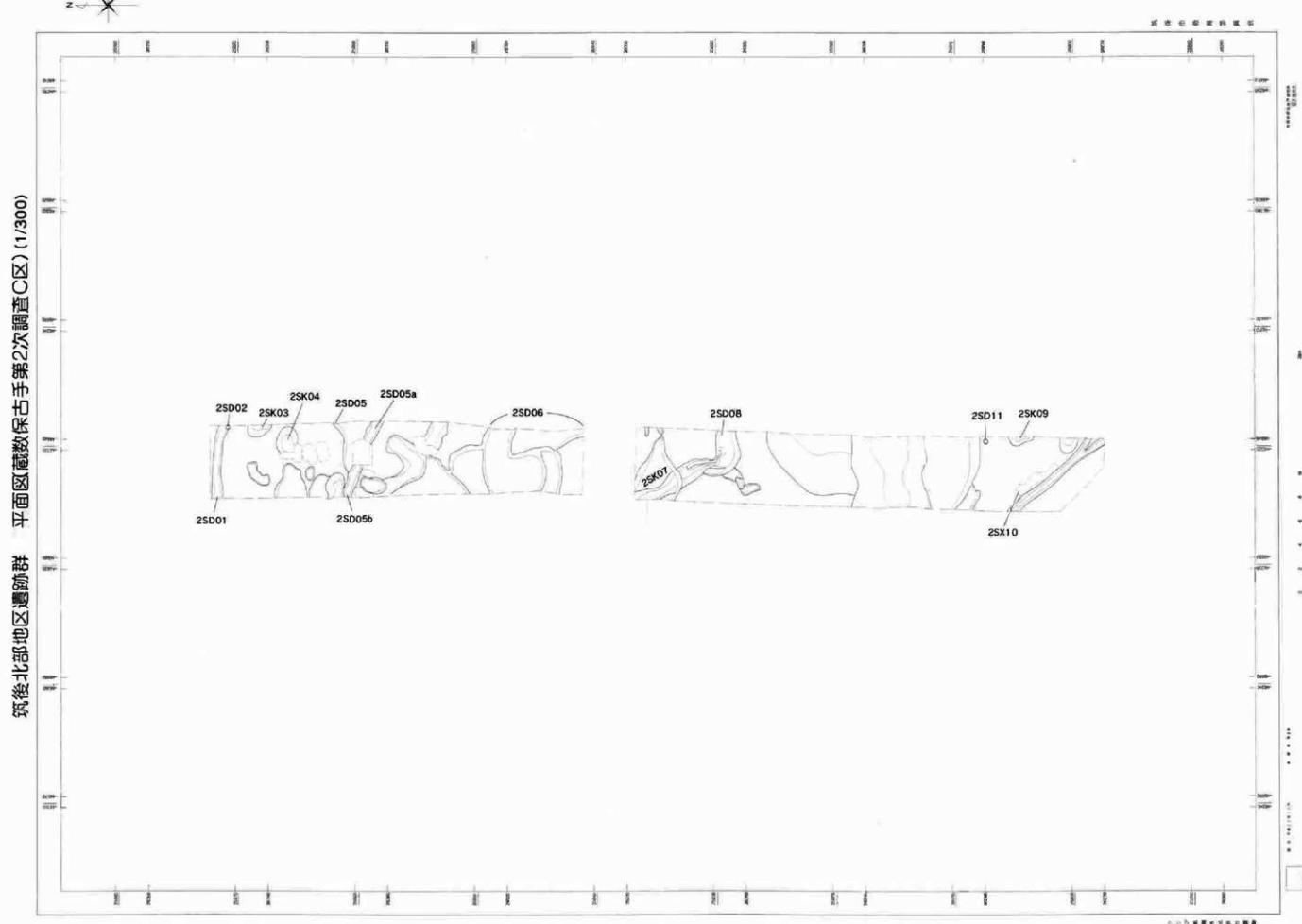


筑後北部地区遺跡群 平面図(歴数保古手第2次調査A区)(1/300)

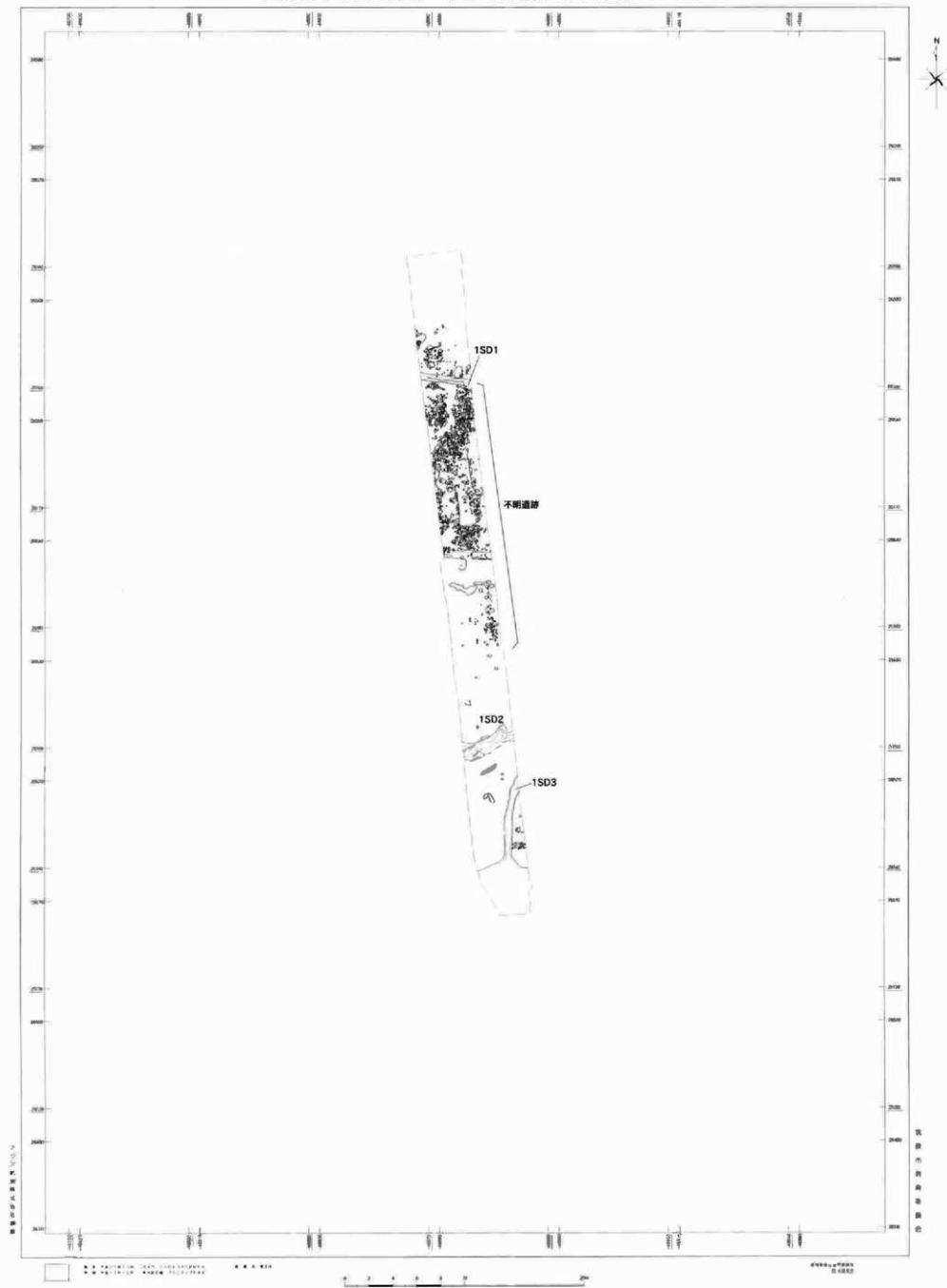


筑後北部地区遺跡群 平面図(戦国保古手遺跡第2次調査B区) (1/300)

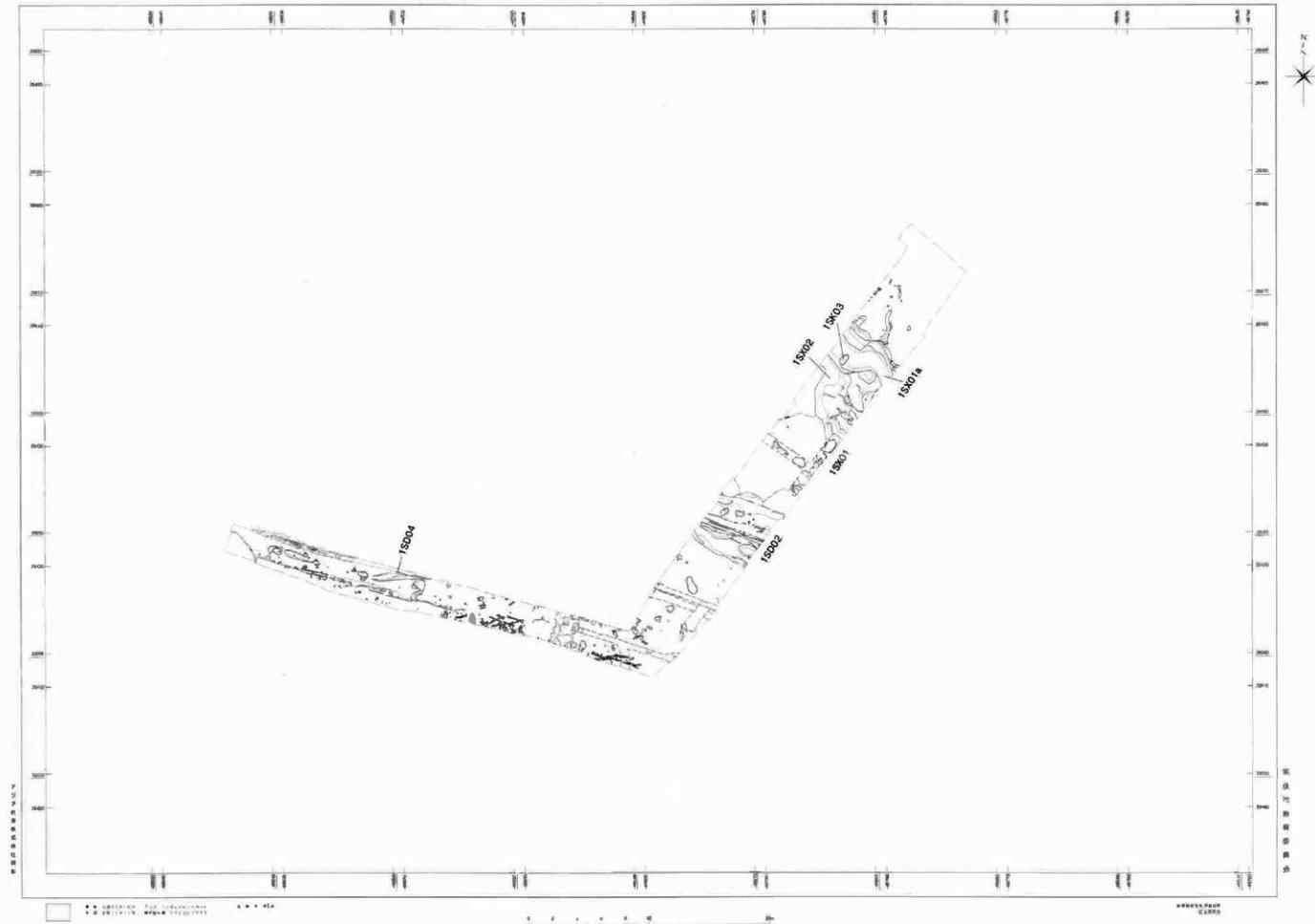




筑後北部地区遺跡群 平面図(藏数三郎丸遺跡) (1/300)



筑後北部地区遺跡群 平面図(蔵数長畠町遺跡調査A区) (1/300)



筑後北部地区遺跡群 平面図(轟数長畠町遺跡B区) (1/300)

